

187

366

從容錄講話

上卷之二

墻外道見筆錄

從心錄

東都 佛教館發行

明治
33 3 15
丙寅

從容錄講話上卷の二目次

第二十一則	雲巖掃地の話(搬掃)	一
第二十二則	巖頭拜喝の話(參學)	二
第二十三則	魯祖面壁の話(禪定)	三
第二十四則	雪峯看蛇の話(免蛇)	三四
第二十五則	鹽官犀扇の話(鏡扇)	四六
第二十六則	仰山指雪の話(獅象)	五六
第二十七則	法眼指簾の話(簾帳)	六六
第二十八則	護國三懺の話(骨董)	七八
第二十九則	風穴鐵牛の話(宰臣)	八九
第三十則	大隋劫火の話(水火)	一〇七
第三十一則	雲門露柱の話(佛祖)	一二七
第三十二則	仰山心境の話(勘辨)	一二五

第三十三則	三聖金鱗の話(龜魚)	一三五
第三十四則	風穴一塵の話(示衆)	一三五
第三十五則	洛浦伏膺の話(菴居)	一四五
第三十六則	馬師不安の話(問疾)	一五三
第三十七則	瀉山業識の話(勘辨)	一六七
第三十八則	臨濟眞人の話(入境)	一七五
第三十九則	趙州洗鉢の話(齋粥)	一八五
第四十則	雲門白黑の話(對機)	一九四
第四十一則	洛浦臨終の話(遷化)	二〇〇
第四十二則	南陽淨瓶の話(瓶錫)	二一〇
第四十三則	羅山起滅の話(悟道)	二二六
第四十四則	興陽妙翹の話(飛走)	二三三
第四十五則	覺經四節の話(經教)	二四四
第四十六則	德山學畢の話(佛祖)	二五五

第四十七則	趙州柏樹の話(祖教)	二七三
第四十八則	摩經不二の話(門戶)	二八二
第四十九則	洞山供眞の話(眞像)	二九四
第五十則	雪峯甚麼の話(菴居)	三〇五



從容錄講話上卷の二目次終

從容錄講話

(上卷の二)

墻外道見筆錄

第二十一則

雲巖掃地の話

示衆

示衆云、脱迷悟絶聖凡雖無多事立主賓分貴賤別是一家量材授職即不無同氣連枝作麼生會

●脱迷悟絶聖凡雖無多事 本來解脱の眞淨界中には迷悟も無ければ聖凡もない、迷悟とか聖凡とかの差別があるものぢやに依て諸佛の出世もあれば、祖師の西來もある、佛祖の出世があるからに七面倒な事も澤山にある、七面倒な事が澤山あるにもせよ、その迷悟聖凡を超越して仕舞ひさへすれば我に於て何事もありません

●立主資分貴賤別是一家 何事もありはせぬ様なもの、無一物の所無盡蔵、無住の本より一切の法を建立するのが佛事門中の活生涯である。從上の佛祖は、執れも皆迷悟凡聖の區域を超脱した人ばかりであるが、又却來の消息といふことが有つて、何うしても差別門を建立せずには居られぬわけである。差別門を建立して主資を立て、貴賤を分つことは、別には是れ佛祖門下の一家風といふものである。

●量材授職即不無 其の家風があるからには其人々の才能と器量とを計つて、才器相應の職分を授けねばならぬ事もある。即ち音聲の善き者には維那とか堂行とかの職を授け、典座寮の上手な者には飯頭とか菜頭とかの職を授け、言説の上手な者には説教法談講義等の事を司らせ、文筆の上手な者には書記書狀等の職を授け、其他夫々向さくくの職を授くるのは、家風を建立する宗師家尋常の手段といふものぢや。

●同氣連枝作麼生會 師家と學人とは夫れでも宜いが、同聲相應じ同氣相求むる互格の連枝即ち難兄難弟の出會つた時の商量には何の様に和會したものであらうか、その和會の仕方が見たければ今日の本則を見ると能く分る。

本則

舉雲巖掃地次、不得氣力。道吾云：太區區生埋兵。巖云：須知有不區區者。可憐話吾云：恁麼則有第二月也。豈止第二巖提起掃帚云：這箇是第幾月。水品宮裏吾便休去。盡在不玄沙云：正是第二月。一人傳萬人。雲門云：奴見婢，慙慙簸箕。

●舉雲巖掃地次 雲巖は山の號諱は曇成といふ無住大師とも申します。藥山惟儼禪師の法嗣である。今日の相手たる道吾といふは其の師弟である。法臘の順序と年配こそは師兄と師弟との差があれど、その道力に至つては難兄難弟である。此の問答を爲た時は、雲巖もマダ住持ではなかつたらしい。共に藥山に在て修行中の商量であつたかと思はるゝ。修行中の事であるからして、雲巖は竹箒を以て頻りに掃除をして居られたものと見える。其處へ道吾がやつて來て、商量せられたのである。何うも古人は法に親しい事々物々に就て眞面目である。今日の雲水中にて眞面

目に雲巖道吾の如く商量する者があるか知らん、よし有つたとして大抵は戯論に過ぎぬ

▲沙彌行童氣力ヲ得ズ 行童或は童行とも申して、僧にならんとして未だ成らざるもの、沙彌とは寺に入り始めて剃髪した謂ゆる豆小僧である、何うも歴々の雲水僧分達が先に立って、その様に作務をしては、沙彌や童行が定めしづゝないであらう、萬松老人も餘計な心配、爲たがる者には行らせて置くがよい

●道吾云太區區生 區々は勤々の貌で大いに勞働する事ぢや、イヤ何うも師兄エロ、働きますねいと、一寸師兄の脚下を探って見たらしい、平常心是れ道なるの人は何れにつけても虚しく光陰は渡らぬ

▲兵ヲ埋メテ闘ヲ挑ム イヤ何うも疊成サン大尉御苦勞で御座いますねいと口を掛けしたのは仁義道中通途の挨拶らしいが、深く考へて見ると何うも其の言中に響きがあるらしい、若し兵法で譬へて見たらば伏勢をして置いて、戦闘を挑むとても云ふべきである、實際また一法戦をする積りであるらしい

●巖云須知有不區區者 雲巖はチャンと言中の響きを聞き取つたものぢや

に依て、間然さず答へて、左様サねい、苦勞して居る様に見ゆるかは知らねど、其實は苦勞せぬ者がありますワ、寂場を動ぜずして威儀を現す、その苦勞せぬ不動著なものは何であらうか、何うぞ尊公もそれを知つて貰ひ度いものぢやと、師兄は師兄だけの挨拶振りである

▲惜ム可シ話兩楸ト作リシコトヲ 萬松が思ふには、勞働する時は徹底勞働、區々たる時は徹底區々の一法究盡でよい、然るに區々たるものと、區々たらざるものとがあつては何うも二法となつて餘り面白くもない、若し萬松であつたならば、道吾の聲に應じて、恁麼々々とても云つて遣るであつたにと、さうするとモウ道吾も打込所はない

●吾云恁麼則有第二月也 眞逆、雲巖の境界に辨道と掃除と二ツはなけれど、道吾が太區々生と挑んだ者ぢやに依てその反對に一寸不區々者と一戦を試みられたまでの事である所が、その苦戰中に一寸破綻を生じたものぢやに依て其處へ打込まれたのである、道吾も始めより徒らに發言したのでないから直にその隙間をねらつて、さうすると區々たるものと、區々たらざるものがあるのですかと眞

正面より打込んだ流石は道吾である、第二月といふは圓覺經の中にある譬喻で眼病の者から見ると第一月の外に第二月が見える、その第二月は固より夢幻空華の如きものである、夢幻空華の如きものはあるが、必竟活眼を開いて見ると、その第二月は随縁真如、その随縁が其儘不變不變の儘が直に隨縁ぢや、千江に水あれば千江の月一月普く一切の水に現する、その一切の水月が一月に攝まるのであるから不變即隨縁、隨縁即不變である

▲豈止タ第二ノミナラン百千萬箇 イヤ何うして〳〵第二月のみではない、隨縁應同するときは千手千眼千百億化身となつて一切時一切處に光明遍照である

●巖提起掃帚云、道箇是第幾月 隨縁が即不變、一切の水月が其儘一月となつて掃除即辨道の端的を呈露せられた、一即萬萬即一で、區々の中に區々たらざるものがあるとは、此の端的に於て脱躰露現である

▲水晶宮裏ヨリ出頭シ來ル 水晶宮とは月宮殿の事である、成る程雲巖は水晶宮裏の主人公で一點の塵埃もない、その月宮殿より却來して掃除をするのである

るから、没蹤跡斷消息の境界があり〳〵と見られてある、雲巖に限つたこともない今日の禪者も斯くあらねばならぬ

●吾便休去 何うも早斯う手酷く打返やされては退身三步するより仕方がない、あれ程勢ひのよかつた道吾もグニヤ〳〵になつて維摩の如くに沈黙せられた

▲盡ク不言ノ中ニ在リ 當年維摩が毗耶離に緘黙したのは敢て、文殊の爲に遣り込められた譯ではない、緘黙すべき所に到つたから緘黙したので、其黙は却て雷の如くである、今もその通り、道吾の休し去つたのは休すべきであるから、休したので、雲巖の爲に閉口させられたのではない、無一物の處、無盡藏で、その不言の中に無盡の妙味が含まれて居る

●玄沙云、正是第二月 道吾不言の中にも、ただ妙味があるけれど、玄沙は更に一頭地を抽んで、道吾に代つて、雲巖長老、尊公は掃帚を提起して、第一月を呈露せられた積りかは知らねど、此方の眼から見ると正しく是れ第二月と見ゆるわひナ何故かといふに、第一月の水晶宮裏は無爲寂冥にして、其んな之乎者也、は固よりあり

は爲ないぞ

▲一人虚ヲ傳フレバ萬人實ヲ傳フ 道吾が休し去つたら夫れて宜いではないか、それを何ぞやエラさうに物數奇げに言はてもよいことを言はるゝものぢやに依て、その詞尻に付きまはつて、雲巖は第二月に落在せられたのであるぞと、疑ひなき處に疑ひを生じ、論議なき所に論議を生ずる様になつた、三タビ市虎を傳へて人皆信ずとは此事である

●雲門云奴見婢感歎

玄沙は玄沙の見る所があり、雲門は雲門の見る所がある、雲門の思はるゝやう、成る程道吾雲巖の商量は殊勝に聞えはする、されど必竟下女下男の互にチンコロを盡して話しをする様なもので、主人公から之を見ると、賤劣な話して、逆も立派な座敷へ披露の出来ることではないと如何にも佛向上の大活眼より評語された

▲邪ニ随ツテ箴箒ヲ撰ツ

暗夜に箴箒を撰て人を驚かすといふ事があるが、雲門大師もこれと同じで、いらざることに、玄沙の邪魔徒らに随つて箒を撰ツ様な戯れをされるが、萬松から見ると、何うも餘計な世話であると思はるゝと、皆んな

が天狗となつて法戰を遣らるゝのである

頌云

借來聊爾了門頭當處得用隨宜即便休隨處象骨巖前弄蛇手欲
他兒時做處老知羞先治自己

●借來聊爾了門頭

古人は證上の修に親しいから、一切時一切處に於て何事をするも三昧中の妙用で、今雲巖道吾の兄弟が掃帚を借り來つて聊爾と苟且に少しの暇を以て而も祖門向上の第一義を商量せられた

▲當處ニ發生シ

掃除其物の當所即ち手元に於て直にその三昧力が發動し、その商量が始まつた、理事無碍法界圓融の法門に遊化する人は四六時中斯うなくてはならぬ

●得用隨宜即便休

全體この商量といふものは道吾の方から闘ひを挑んだので、道吾の思はるゝに今日雲巖が掃除をして居るが、必竟渠は何んな心持で掃除

をして居るのか知ら試みに掃帚の使ひ振りを點検して見やうとて、太區々生と云ひ、恁麼ならば第二月ありやと打込て見られた、すると流石は雲巖却々放過して居らぬ、區々たらざる者があると云ひ、這箇は是れ第幾月ぞと云はれた、振合は、よくも用ふることを得られたのである、ソコで道吾は雲巖が如何にもその使ひ振りの宜しきを得られたから、それは随喜し、ウン夫れならば早や別に申分はないとて、その商量を休し去られた

● 隨處ニ滅盡ス 扶起放倒に自在を得て居る兄弟であるから、發生する時は忽然と發生し、盡滅する時は俄爾として盡滅し、毫末許りも蹤跡を留めぬ

● 象骨巖前弄蛇手 以上は雲巖道吾の二師を頌じ、以下は玄妙雲門の二師を頌じらるゝのである、象骨巖といふは雪峯山下に有るので、其實は雪峯義存禪師の座下でといふ事になる、弄蛇手といふは本録第二十四則にある、或る日雪峯禪師が衆に示して、南山に一條の籠鼻蛇が有るが、汝等諸人切に須らく好看すべしと云はれた所が、玄沙和尚か南山を用ゐて作廢かせんと云ひ、雲門和尚は柱杖を以て雪峯和尚の面前に擲向して、怖るゝ勢ひをせられた、その二人が今日雲巖道吾の商量を

見て兎や角と批判せらるゝから、天童が引合に出されたので、却々天童は旨い所に氣が付く人ぢや

● 他人ヲ道ハント欲セハ 玄沙にもせよ雲門にもせよ、雲巖道吾のことを兎や角と云はうと思ふならば、御自分の脚下から穿鑿して掛らなければならぬが、玄沙雲門の二師は雲巖道吾の商量に點檢を入るゝの權利があるか知ら

● 兒時做處老知羞 玄沙雲門の法兄法弟が、象骨巖前に於て南山の籠鼻蛇を玩弄せられた手並といふものは如何にも荒々しい振舞であつた、併しそれはマダ思想の幼稚な時の做處であるから有勝の次第である、其人が今年老ひて正に是れ第二月と云ひ、奴は婢を見て慙懃とも云はれたのは、御尤な事ではあるが、御自分方の若い時の做處に引比べて、雲巖道吾の親しき商量を見られたならば、嘸かし羞を知らるゝてあらう、否な羞を知られたから斯くも批評せられたのもあらう、玄沙や雲門許りではない、今日のお互でもさうぢや、若氣の時には随分素慢氣な商量をもし、論議をもするが、少し老輩となつて來ると、昔の事を思ひ出し、一言一動がみな老實になるものぢや、その老實になるのは兒たりし時の做處を羞るからの事であ

▲先ッ自己ヲ治メヨ 他人を善道に誘引せんと思ふたならば第一その己れを正しうしてから事である、己れは行はないで他人に行はせやうといふのは無理なことである、ぢやに依て自信教人信といふてはないか
斯ういふ問題になると、我々は第一に攻撃せらるゝ一人であるが、古人は一丈を行じ得てから一寸を説かれたもの、我々は一分も行ぜずして一丈も二丈も説かんとするのであるから、人が皆野狐禪ぢやといふ、その野狐禪と評する人も矢張野狐窟中の野干鳴である、これが末世の状態であらう、悲しむべきことぢや

第二十二則 巖頭拜喝の話

示衆

示衆云、人將語探、水將杖探、撥草瞻風、尋常用底、忽然跳出箇魚尾、大蟲又作麼生

●人將語探、水將杖探 世の中には口に語る事と心に思つて居る事と違ふ人もありはすれど、其の言語は畢竟無形の思想を吐出すところの機械であるから、始めての人とでも面會して言語を交へて見れば、大抵其の心中が探り得らるゝものである、而して又水の深淺は杖を入れて探つて見れば、何の事は無い直に分るものである、だが言語でも柱杖でも分らぬものは何であらうか又

●撥草瞻風、尋常用底 迷悟凡聖有無得失の庭草を撥ひ除けて本地一段の眞風を瞻るといふは、コリヤ尋常一様參禪學道者の何時も用ふる所であるから別に珍らしいことも何ともない

●忽然跳出箇魚尾、大蟲又作麼生 まあ以上の手段は禪者尋常の茶飯であるが、忽然と思ひも寄らぬ時に、魚尾の大蟲ともいふべき、伶俐活潑變化自在の活禪者に出會つた時には、何の様に勘辨したものであらうか、先づ巖頭と徳山との相見を見たが宜からう

▲魚尾大蟲 支那の古説に、虎は尾を焼いて人と成り、魚は尾を焼いて龍に化す、といふ事がある、無論小説的の寓言であらうけれど、今は只變化自在の義を應用

したものである

本則

舉巖頭到德山跨門便問是凡是聖賊山便喝裂體破頭禮拜好未當洞
山聞云若不是豁公大難承當厚幣頭云洞山老漢不識好惡却又
我當時一手擡一手捺我豈不知

●舉巖頭到德山跨門便問是凡是聖 此は巖頭が德山と同道唱和する底の
驗主問ともいふべきであるこの一問に對して德山は何と答へらるゝであらうか

▲這の賊 此は賊もく甚しい強賊であり能り問違へは德山の咽笛を捕
へてギユツと云はさうといふ勢である

●山便喝 流石は德山である凡とも云はなければ聖とも云はぬ巖頭の膽玉
を潰すほどの大勢を發し威を震つて一喝せられたこの一喝は凡とも聖とも價は
附かぬ謂ゆる超凡越聖の大喝一聲である

▲獨體ヲ裂破ス この大喝一聲で凡聖迷悟の血腥き巖頭の頭腦がわれて七
裂八片となつて仕舞ふた

●頭禮拜 巖頭はこの一喝に喝破せられたのであらうか又凡聖迷悟の迹を
尋ねて居る人であらうか巖頭を見損はぬ様にしなければならぬ何うもこの禮拜
は思らしい禮拜である多分肯つての禮拜ではあるまい德山の寶劍があんまり鋭
いから強に逢うては弱といふ調子でスボンと轉身したものらしい此時の禮拜し
た巖頭の面付は何うであつたらう

▲未ダ好心ニ當ラズ 萬松が傍觀するに何うもこの禮拜は本當に肯つたの
てはないらしい夫れが證據には何うも巖頭の禮拜した時の面付が眞面目でなか
つた

●洞山聞云若不是豁公大難承當 豁公とは巖頭のこと豁は巖に通ずるので
豁公といふは巖頭の全巖和尚即ち德山の法子である此話を或者が洞山良介和尚
に告げ知らせたものと見えるすると洞山が大層讚めそやしそれは何うも近頃氣
味好い話してある德山も德山であるが豁公も亦豁公である外の者ならば逆もそ

の一喝を聞取ることには出来ないのであるが、豁公なればこそぢや、その一喝を聞き取って承當したのであると、これも亦真面目には聞かれぬ、この一語は洞山が大いに其の告白者を釣り上げる所の餌らしい、何うも一體善知識といふものは底意地が悪くてならぬ

▲幣ヲ厚ウシ言ヲ甘ンズ

餘り洞山和尚の讃方が宜過ぎる、進物を澤山に遣

つて甘い言を云ふと大抵な者がぐにやつとして本根を吐出すものである、洞山はその告白者と巖頭との二人を釣り上げ、爾うして巖頭にスツカリと白状させる積りらしい、勿々以て巧みなものぢや

●頭云洞山老漢不識好惡

その傳言奏語の者が洞山の評語を聞いて、餘り讃

方が變だから後口に至り、巖頭に向ひ、洞山禪師は貴僧のことを斯くく讃められましたぞよと申した、すると巖頭はまだ洞山の舌頭に載せられて居るとは氣が附かず、思はず本根を吹出し、いや何うも洞山老漢は此方を見損うて御座るから其んなことを云はるゝのである、左様も滅茶く讃めらるゝといふは好惡を知られぬからである

▲却テ又著忙ス

巖頭餘程急らい積りであるかは知らねど、洞山老人から見

らるればまだく遙かに及ばぬ所がある、何故かといふに巖頭和尚はまだ脚下が軽い、洞山一語の爲めに斯くまで忙がしさうに分疏しなくても宜からうものに

●我當時一手撥一手捺

巖頭は素より半は背ひ、半は背はないので一手は撥

げ一手は捺へたのであつた、何うして全分背ふものではない、併し一撥一捺であるから宜いのである、凡聖を喝散した向上上底、固より無くてはならぬけれど、凡聖の向下底も無くてはならぬ、この向上向下正偏宛轉するのが佛祖門下の行履である

▲我豈知ラザランヤ

其んなに分疏を爲ないからとて、萬松は勿論洞山も能

く知ッて居るのである、知ッて居るけれど、洞山は巖頭をして夫を云はせやうが爲め、斯くは遠廻しに釣竿を垂れて見られたのである

頌云

挫來機、風行總權柄、符到事、有必行之威、佛手遮國、有不犯之令、誰
頭賓、尙奉而主驕、刺下以風、君忌諫、而臣佞、化下以風、底意巖頭問、德山

雖然父子與師一擡一捺看心行未免待

●挫來機 來機とは巖頭のこと挫ぐとは徳山のことぢや是れ凡か是れ聖かと問へば直に大喝一聲して來機を挫折する徳山の機鋒といふものは實に鋭いものぢや徳山も徳山なれば巖頭も亦巖頭である何れも剛のものぢや

▲風行ケハ草偃ス 如何さま何うも徳山の威風に靡かぬものはない筈ぢや一舉一動が變つたものである

●總權柄 權は秤の錘である柄は其の竿であるいや何うも徳山ばかりではない洞山も亦惠來ものでこの二老は大唐國裏に於ても隠れなき歷々ぢやほどに法門の權柄を總へ括つて居らるゝのであるから重くしやうが軽くしやうが把住放行自由自在なものぢや

▲符到れば奉行す 天子の勅令さへ到れば割符を合はすが如く下萬民は誰一人として之に背く者はなき如く徳山洞山の行令には千古萬古奉行せざるものはない

●事有必行之威 斯ういふ歷々の言ひ出された事柄は必ず行はれぬといふ

こともなく亦必ず行はしむるの威徳威力といふものがある

▲佛手モ遮ルコトヲ得ズ 何んなに惠來物があつても二老の行令を遮止することは出来ぬ度惠來威光ぢや

●國有不犯之令 國民として國家の法律命令を犯すことは出来ぬその如く徳山の大喝一聲は凡聖迷悟の證論を判決する佛國不犯の行令で縱ひ三世諸佛と雖も之を犯すことはならぬ況して巖頭に於てをやぢやソコで止むなく禮拜し去つたのである奉行し遵守し去つたのである

▲誰カ敢テ當頭セン 誰一人として違犯する者はない

●賓尙奉而主驕 賓のお客が餘りに其の主人を尊敬して譽めそやすと其の主人が調子に乗り圖に載せられて勝手我儘なことを云ふ様になる如く今洞山和尚が巖頭和尚の賓客となり是れ豁公にあらずんば大に承當し難からんと譽められたれば主人の巖頭和尚も宜氣になつて洞山老漢好惡を知らすと我儘を云はれた併し賓となり主となつて洞山回互の宗風を擧揚せらるゝ所は勿々面白い

▲下ハ以テ上ヲ風刺シ 下に在る人民としてはお上の役人に對し政治上の

事に關し色々勸告をもし建白をも爲たい事があるけれど直接に左様してはまた忌憚る所もあるからして詩文章歌俳諧などを以て間接に上の政治を諷刺することがある今洞山和尚は敢て巖頭の風下に立つ人ではなけれど先づ直接の關係がないから直接に自己の所存を吐露する譯にも行かぬにより遠廻しに巖頭を諷刺せられたのである洞山の言中には容易ならぬ作略がある

●君忌諫而臣佞 君は徳山に譬へ臣は巖頭に喩へたものぢや君王たる者が臣下の諫言を忌み嫌うて容れぬ時は臣下も止むを得ないから細び詰ふ様になるものぢやが今この天童が徳山巖頭父子の相見を視るに巖頭が是れ凡か是れ聖かと徳山に驗問せられたのは恰ながら臣下の諫言らしい所がある然るに徳山は凡とも聖とも云はず兩頭俱に不是中間亦放下著と云はぬばかりの勢ひにて一喝の下に喝破し去られたは君王が臣下の諫言を容れられなかつた様子にも見えるンコで巖頭も詮方なしに禮拜せられたは臣下が止むを得ずして君の御機嫌を取た様にも見えるそれは何うしても仕方がない徳山の所領なる佛國土には必行の威と不犯の令があるからそれを施行せられた日には何う有つても禮拜もし服従も

しなればならぬ故に佞する様に似て佞して居らぬ所があり禮した様に似て禮せぬ所がある其處が即ち回互宛轉賓主互換の宗乘自在である

▲上ハ以テ下ヲ風化ス 上に在る君王は下に在る萬民を草の風に靡くが如く徳風と威風とを以て感化しなければならぬ巖頭の様な堅い頭を以て居る者と雖も佛祖の正令を全提せらるゝときは何うしても禮拜服従しなければならぬ

●底意巖頭問徳山 以上は只本則を有り身に評頌せられたのであるが以下は天童老人が本則に就ての抄著である天下の諸禪者は徳巖父子の問答に就て如何なる感覺が起りますな彼の巖頭は全軀如何なる底意があつて此の問端を發しられたのであらうか大いに此處は穿鑿ものである

▲然モ父子師ヲ興スト雖モ 徳山巖頭の問對は即ち佛國上の法戰である元來巖頭は風なきに波を起したのであるからこれは太平の姦賊とも謂つべきもの徳山は一喝の下にその激浪怒濤を鎮められたからこれは亂世の英雄とも謂つべきものである

●一搔一捺看心行

彼の巖頭が徳山一喝の下に禮拜したのは變であつたが

洞山の爲めに釣り出されて漸くその底意を白状させられた即ち我れ當時一手捺一手捺と本根を吐出されたので、その禮拜し去つた巖頭の心行底意が手に取て看らるゝ様ではないか、元來用もなきに凡聖の間端を發するといふのが太平の姦賊であるからの事ぢや

●未タ干戈相待ツコトヲ免レス 昔日父子法戰の時巖頭は一戰の下に敗北し去て天下は太平であるかと思つて居たが、洞山の爲めに一撃せられて黙つて居ることが出来ずに一擽一捺を吐露したのは未タ干戈を交へんとして居るので、本當の太平無事でもなかりさうぢや

第二十三則 魯祖面壁の話

示衆

示衆云達磨九年呼爲壁觀神光三拜漏泄天機如何得掃蹤滅跡去

●達磨九年呼爲壁觀神光三拜漏泄天機

達磨大師は佛心印を傳へんが爲め、西天竺より遙々支那國に渡來せられ、初め梁武に相見せられたけれど、渠は逆も心印を傳ふべき器でないとして取られ、臂を掉つて魏國の嵩山少林寺に九年の間寓居して、説法をも爲さず、提唱をも爲さず、日々黙々として壁に面ひ坐禪をのみして居られた、今日ならば新聞雜誌といふ、銳利なる機關があるから大抵なことはみな坐ながらにして分るけれど、昔の支那であるから、今でも日本の如くには分らぬ、其邊のことは甚だ遠々として、其實際を探問することが出来なかつた、されど最早佛法も可なり弘まつて居たから、印度に婆羅門宗のある位なことは分つて居たものと見え、時人が呼て渠は壁觀の婆羅門であらうとの噂を爲して居たと申すこと、其實何者であるか、颯波離窺ひは附かぬ、時人に窺ひの附かぬは無理もない、南山道宣律師を見た様な明眼の人でさへ、僧史を編むに大師を習禪の科に列ねた譯りの甚しきものである、何うして大師の面壁は佛魔も亦窺ひの附かぬ大禪定である、神光の三拜、これは臂を斬て大師に呈露した二祖慈可大師のことぢや

達磨大師が九年の間面壁坐禪して居られたのは、傳法の大器を待たんが爲であつた、其間面壁打坐のみでもあるまい、多少の門人が有て神光を始めとして三五の大器が集まつて来た、大法を付囑してもよいといふお考へ、大法だに付囑すれば最早支那に在留せらるゝの必要もない、ソコで大法を付囑し印度の故郷に歸らんとするに臨み、門人等に告げらるゝ詞に、汝等蓋ぞ各々所得を言はざるや、と時に道副、尼總持、道育等各々その所見を述べた、すると大師は道副に向ては汝吾が皮を得たりと云ひ、尼總持に向ては汝吾が肉を得たりと云ひ、道育に向ては汝吾が骨を得たりと云ひ、夫々みな印可せられた、終りに神光の慧可大師は何とも云はず、只出て三拜し、而して吾が本位に歸て起立せられた、すると達磨大師が口を開いて汝は吾が髓を得たりと印可證明せられた

此の三拜得髓で以て直指端的の天機が漏泄せられたので、夫れまでは没蹤跡、断消息であつたが、是れから佛祖屋裡の機密が漏れ出し、爾して、祖宗門下にその蹤跡が現はれた

●如何得掃蹤滅跡去

兎に角田地穩密なる祖門屋裡の機密が世の中に漏れ

出したのは憂ふべきである、この蹤跡をば何の様にして掃滅し去つたものであらうかないや、それならば一ツの手段がある、その手段とは先づ魯祖の家風に參ずるのである、夫が所望ならば今日の公案を見るが宜い

本 則

舉魯祖凡見僧來便面壁了相見南泉聞云我尋常向他道空劫以前承當自招佛未出世時會取也和尚會尚不得一箇半箇只爲漏檢案他恁麼驢年去忙者不忙會

●舉魯祖凡見僧來便面壁 是れは如何なる手段であらうか、普通ならば佛拳棒唱問答商量して學人を接待すべきである、然るに雲水僧侶の參じ来るのを見る度に一言をも垂れず面壁して了ふとは、全體變天乎な遣り方ではある、是れを門を閉て打睡して上上の機を接するともいふべきであらう、圓明國師が上根の坐禪は諸佛出世の事を語らず、佛祖不傳の妙を悟らずと云はれたが、實に魯祖の面壁打

坐は達磨の面壁打坐と同軌同轍である。打坐の正當は實に佛魔も窺ふことが出来ぬ何故かといふに、永平祖師は三昧王三昧の卷に、慈然として盡界を超越して佛祖の屋裏に大尊貴生なるは結跏趺坐なり、外道魔黨の頂額を踏躡して佛祖の堂奥に箇中人なることは結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するはたゞこの一法なりと仰せられたは、全く面壁打坐の王三昧である。魯祖はこの王三昧を拈提せられたのである。

▲相見了也 魯祖の面壁諸人は何うてあるかは知らねど、萬松などは最う疾く魯祖と相見了ぢや

●南泉開云我尋常向地道空劫以前承當 さて南泉和尚といへは實に僧中の泰斗である。此人が魯祖面壁のことを聞き附けられての批評に、イヤ夫れは餘り感心しない接待の爲方ぢや、何故かといふに、此方は尋常座下の禪徒に向ひ、一機未發なる陰陽未分なる空劫以前に承當せよ、父母未生以前一念不生以前の自己に承當せよとて、懇々切々として提携して居るのぢやけれども、勿々以て容易に承當する者がない

▲考へザルニ自ラ招ク 萬松が傍から見ると、誰も空劫以前ぢやの空劫以後

ぢやのと考へもせぬに、南泉和尚が彼れ此れと自から分別を招き寄せらゝのであ

る、だから無分別で居る者までが分別の禍を招く様になる、餘計な事ぢや

●佛未出世時會取 然かのみならず諸佛出世以前諸佛の出世あるは迷ひの衆生があるからの事ぢや、迷ひの衆生が無ければ諸佛の出世もない、故に迷悟以前の自己を會取せよとの垂訓である。迷悟凡聖の音沙汰なき本來眞の面目を會取せよと道うて居るのぢやけれども、聞く耳を以て居ないものと見え一向親しく見所を呈し來る所の者がない

▲和尚會スヤ也タ未シヤ 南泉そなたは獨りて惠來さうなことを云はるゝが、全體お前サンは、その諸佛未出世の時辰兆以前の眞面目を會取して居らるゝのか、他人に許り寄せ掛くるが妙では御座らぬぞへと、南泉に一箭を試みられた

●尙不得一箇半箇 斯くまで此方が丁寧に口宣して居るにも拘はらず、今尙ほ一人半箇も承當致しました、會取致しましたといふ者が現はれて來ない、併し承當したり會取したりする者があるかしら、若し會不會の沙汰があつたら空劫以前

でも未出世以前でもあるまい、一箇も半箇もないのが本當であるかも知れない
 ▲只椗索ヲ漏スガ爲ナリ 椗は木の釘又はくさびの如きもの、索は繩のこと
 ぢや、イヤ左様でない確乎と釘付にし細拵みにして魯祖の如く祖室の秘密を漏し
 さへしなれば一箇や半箇は出来るのであるけれど、その締りがなく口を開いて
 漏すものぢやから却てそれが邪魔となるのであらう

●他恁麼驢年去 十二支の中に驢年といふはない無いらから幾千萬年経つて
 も来ることはあるまい、若し萬が一その驢年が来つたにもせよ魯祖を見た様に、只
 面壁して許り居たならば逆もく一人半個も學人を接待し去る様なことはある
 まいと、何だか魯祖を貶斥せられた様に聞ゆるが、是れは南泉和尚が魯祖の爲め且
 の諸人の爲めに一線路を通じられたのである、何故かといふに、その面壁打坐の當
 躰が此身此儘空劫以前に承當し、諸佛出世以前、父母未生以前の自己を會取して居
 るからの事ぢや、之が即ち迷悟情量の邊際を超越した非思量不可得の正當正面ぢ
 や三昧王三昧の當躰ぢや

▲忙者は不會 只南泉の言語面をのみ聞いたのでは其の眞意を會取するこ

とは出来ぬ、仍て氣を靜かにして篤と考へて見ると、自から眞意のある所が會取せ
 らるゝであらう

頌云

淡中有味誰教備添 妙超情謂別口再 綿綿若存兮象先 第己落元元
 如愚兮道貴著無價 玉雕文以喪淳和尚 珠在淵而自媚弄少賣 十分爽
 氣兮清磨暑秋金體露 一片閑雲兮遠分天水 魔多好事

●淡中有味 淡は濃なり濃泊な物の事、餘り甘かつたり、辛かつたり、苦かつた
 り油強かつたり、濃厚な食物には好き嫌ひもあるが、米飯や澤庵香々の様な淡味な
 ものは、年中喰つて居ながら、一日たりとも厭きが來ない、何に限らずアツサリした
 食物は都て其中に無盡の妙味がある、魯祖の面壁もその通り、禪道佛法ぢやの、迷悟
 凡聖ぢやのといふ鹽醋の添物が無い、その無い所に甚深の妙味がある

▲誰カ備ヲシテ鹽ヲ添ヘ醋ヲ著ケ教メン 魯祖の面壁に何うして微妙の味

ひがあらうぞ、梨は熟したまゝ柿も熟した其のまゝて宜い、それに鹽や醋を添へたら喰はれたものではない、面壁は面壁のまゝて宜い

●妙超情謂 情謂とは思慮分別のこと、三祖も申されし如く、非思量の處識情測り難して魯祖面壁の王三昧は非思量の佛境界て其處は妙々不可思議ぢや、不可思議にして情量を超脱して居るから、佛魔も窺ふことが出来ぬのである

▲別日ニ再ビ商量セン 情謂を超えて思慮分別が届かないとして見れば逆も今日商量するわけには參らぬから、まあ思慮分別の届かぬ他日に譲つたが宜からう

●綿綿若存分象先 さて其の情謂を超越した境界はドンなものかと強て之を形容して見やうならば、その洞然明白なる面壁の當躰は、綿々不斷にして存するが如くにして存せず亡するが如くにして亡せず、遙かに二儀四象の外に先立て居る、即ち空劫以前、天地未開以前の消息である

▲已ニ第二ニ落ツ 天童は象の先ぢやと云はるれど、萬松の眼から見ると、已に既に第二第三に落在して居る様ぢや何故かといふに、已に空劫の時ならば先後

の躰はない等ぢやとそれを後ぢやの先ぢやのといふから第一義ではない

●兀兀如愚兮道貴 兀々は無知の貌、この無知の貌が佛量法量を飛び越えた結跏趺坐の當躰にて、洞山の謂ゆる非佛の境界ぢや、又愚の如く魯の如く、只能く相續するを主中の主と名くと仰せられたので、其の愚魯の如き所か、三賢十聖の頂額を慕過した大道の尊貴最勝なる妙所である

▲人ノ價ヲ著ル無シ 何うして賢とも愚とも、何とも彼とも價の著くものではない、超凡越聖ぢや

●玉雕文以喪淳 以上は魯祖の面壁を頌じ、以下は南泉の評語を頌せられたものぢや、玉は面壁に比し、文は評語に擬したものの、南泉が面壁を評唱せられたのは、恰ながら無取の眞玉に、文彩を彫りつけて以て、眞淳萬古の姿を喪失した様なものぢや、他恁麼ならば、臘年にし去らん杯とは、餘計な世話、却て瓊物にして仕舞はれたと句抑下の意卓上乎

▲和尚手高シ イヤ萬松も天童和尚の眼キ、には威服をした、又虚空の中に一寸彫物をせられたのは上手なものぢや

●珠在淵而自媚

南泉和尚が模倣を附けなかつた時は明珠の深淵に在て自然に其の媚を呈して居たのであつたが、惜い哉無用の言句を吐かれたものぢやに依て、多くの人が兎や角と其淵を攪亂し、その珠の在所が分らぬ様になつた併しこれは一休の謂ゆる○釋迦といふ徒者が世に出て、多くの人を迷はするかなと詠まれた道歌と同じ意味に見るも面白からう、又永祖の謂ゆる將錯就錯せざるゆゑにおほく外道に零落すと云はれたのと對照して見るが宜い

▲少賣弄

天童和尚その様にまあ勿昧を附けなくとも宜いではないか、小商賣人が品物を賞めるのは通例ではあるけれど、餘んまり賞め過ぎると聞いて居るのが忌になる、成る程而壁の珠は眞淨なる者に相違はないが大抵宜い加減な所で切止めにして置かんと却て價值が下がる

●十分爽氣分清勝暑秋

天童正覺禪師には魯祖の面壁が除程と氣に召したものと見え、又もや此の二句に於て之を稱歎せらるゝのである、然し前は面壁默坐の當昧を人に就て頌出し、今は而壁の境界を法體の上より頌出せられた様に見える陰曆で申せば八月中秋の頃十分爽かなる陰氣が金天に満ちて暑氣を磨洗し去

て清涼の西風がソヨ／＼と吹來る夕の景色といふものは實に早言ふに言はれず説くに説かれぬ魯祖面壁の第一義天を譬へて見れば斯くなるもので、修證功勳の暑雲もなければ、佛量法量の熱氣もない、只清涼不變の法體が廓落たる大虚空に天真獨露して居るのを見る

▲體露金風

遙かに人法二執の熱氣が去り、いかに爽かな秋風颯々たる時節である

●一片閑雲兮遠分天水

さて其の清涼なる空氣を以て暑熱を拭ひ去つた秋の空に、一片の閑雲が浮んで遠きに在る天上と低きに在る水面とが際立って見ゆる様は如何にも爽快なものぢや、魯祖面壁の脫跡露現はまあ此んなものであらう

▲好事魔多シ

イヤ餘り宜いとて其んなに氣を許さぬが好い、油断すると煩惱や無明の惡魔が出て來まいものでもない、諸人者脚下を照顧するが宜いぞと、これは四海の禪流に注意せられた萬松の爲人ぢや

増外云く、或る一類の者が斯ういふ爽快なる禪界の妙味を知らずして、默照の邪禪と誘ふけれど、勿々以て看話禪や待悟禪に彷徨しつゝある者の夢にだも知る

所のものではない、黙にして常照なる單傳直指の王三昧は彼の情識を弄し、精魂を弄する者の窺ひ知らるゝものでない、我が祖宗門下の衲子は能く之を轉して、他の邪禪に瞞ぜられぬやうに留意すべきぢや

第二十四則 雪峯看蛇の話

示衆

示衆云東海鯉魚南山鼈鼻普化驢鳴子湖犬吠不墮常塗不行異類且道是什麼人行履處

●東海鯉魚南山鼈鼻普化驢鳴子湖犬吠

これは都て禪機大用の三昧格外の

力量を列擧せられたので、先づ東海の鯉魚とは本録第六十一則に列ねてある、僧の雲門に問答した事柄である、即ち十方薄伽梵の一路涅槃門はと問ふたれば、扇子踏跳して三十三天に上り帝釋の鼻孔に築着す、東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たりと答へられた、この意味は何れ其處に至つて解釋するてあらうが、

何にしても度外れの挨拶といふものではある、次に南山の鼈鼻といふは本則にあるから此にいふまでもなきこと、次に普化の驢鳴とは臨濟録に見えて居る、普化和尙が日の暮に臨濟院に入て生菜を喫せられた、スルと臨濟和尙の申さるゝやう、道漢大に一頭の驢に似たりと云はれたれば、普化和尙が其聲に應じて驢の鳴聲をせられた、マサカに滑稽でもあるまい、何れ本分の禪機であるが是も亦並尋常のことではない

次に又子湖の犬吠とは子湖岩の利蹤禪師が山門頭に牌を立て夫れに書き記された、子湖に一隻の狗あり、上人の頭を取り、中、人の胸を取り、下、人の足を取る、擬議すれば、爽身失命すとあつたと見える、开はまあドンな狗であらうか、何うせ四教や五教の判釋で分る所のものでもあるまい

●不墮常塗不行異類且道是什麼人行履處

迷悟凡聖の音沙汰ならば古聖先

哲の踐み來られた常塗であるが、迷にも屬せず悟にも屬せざるがゆゑ、其の常塗に墮在する所爲とも申されぬ、然らば人間以外の異類に中行するものであるかといふに左様でもない、何故かといふに、瀟山和尙の如く死後一頭の水牯牛となるとい

ふのでもない、誠に變天乎なものぢや、して見るとサア全體これはドンな人の行履する處の事柄であらうか、兎にあれ本則に就て、窺ふたが宜しからう

本則

舉雪峯示衆云、南山有一條、鼈鼻蛇、汝等諸人、切須好看。是情、長慶云、今日堂中大有人、喪身失命、便颯。僧舉似玄沙、云、須是我、稜兒、始得。狗黨、然雖、如是、我即不恁麼。和尙作麼生、上措頭、沙云、用南山作麼、猶爲分外。雲門以拄杖擲向峰、面前作怕勢、傷已命。

●舉雪峯示衆云……切須好看。さて南山とはソモ何れの所であらうか、
に南山に限つたこともあるまい、東山でも西山でも宜いわ、併し是れは法華提婆品の南方無垢世界とある、あの南方ではあるまいか、南山ならは何うせ南方であらう、所が是れは支那國に於ての南山であらうか、印度に於ての南山であらうか、又は

日本に於ての南山であらうか、但しは又歐米諸國に於ての南山であらうか、その中心が定めてないから甚だボンヤリして居る、ボンヤリして居る所が着目すべき此の南山である、若し肉眼を開いて見んと要せば、白雲萬里、到底見ることが出来ぬが、若し眼を閉ぢて諦観するときは、互も南山の真中に居るのかも知れぬ。倍又一條の鼈鼻蛇とはドンなものであらうか、南山の何物たることに氣が付いたならば、鼈鼻蛇の何物たることも分つて來なければならぬ、蛇なれば何れ毒氣毒熱を吐くに相違はないが、教相門に云ふ所の三毒煩惱杯とは、天地懸隔ぢや、併し流石は雪峰義存禪師、何うも當今の諱に觸れず、飛てもなき物を借り來て、甘く形容せられた野禿も、何とか名を付けて見たいが、從來形名なく、天真性相を亡ずるので、何とも云ふことはならぬ、云はぬ所に味ひがある、只此の鼈鼻蛇、觸るれば毒熱の爲めに害せられ、背けば却て睡る、汝等諸人、切に須く好看すべし、親切に好く看破しないと、禿僧の活眼睛を失ふ、何うも兜率の撥草參玄の拈提とは、一層格調が高イ。
▲坐具ヲ提起シテ云ク、這箇ハ是レ情ヒ來ル底ニアラズ。雪峰どの、お前サンは御苦勞にも、南山の毒蛇を借り來て、彼れ是れと云はるれど、萬松杯は是れ此の通

り持合の坐具がありませよ、これは決して借ひ來る底のものでは御座らぬワイとは何の事であらう局外者には頼と分らぬ、否な分らぬといへは分らぬ様なもの、岡目八目でよく分つて居るけれど、まあ假りに分らぬといふて置く

●長慶云、今日堂中、大有人喪身失命

時に長慶といふ和尚が雪峰の旛蛇を能く看破せられたものと見え、イヤ何うも早此の僧堂裏に在る者は皆んなその毒氣

に觸れてスツペリと死んで終ひました、否な其蛇の爲めに残りなく一吞にされて終ひましたトは随分立派な挨拶である、生殺では役に立たぬが大死一番したといふのであるから先づは結構である

▲風ヲ聞イテ便チ颯ル

順風が吹いて來たからとて直に帆を颯るは餘ンまり輕卒ではあるまいか

●僧舉似玄沙

時に玄沙は其塙に居なかつたものと見え一人の僧が此事を玄沙に告げ知らせたのである

▲壘スルコト三ニ過ギス

壘は累と同じ、わづらはすと訓む、何だ累はしい、同じことを二度も三度も珍らしさうに持ち廻る、大抵にしたが宜いではないか

●沙云、須是我稜兄始得

玄沙といふは却々名の聞えた祖門の英雄であるか

ら一は揚し一は抑する、或は活し或は殺す、弄蛇には實に馴れたものぢや、何うも慧稜和尚でなくては、その様な挨拶は出來ぬであらう、勿々以て云ふべき所を云はれた他人の及ばぬ所がある

▲狐朋狗黨

昔し孟嘗君と云へる史記の話し、人の手下には狐白の裘を巧みに盗んだ狗盗もあれば、雞鳴を上手にして函谷關の役人を欺いた家來もあつたが、

雪峯も夫れと同じく、長慶ぢやの玄沙ぢや、雲門ぢやのといふ狐朋狗黨が隨うて居るから油斷のなつたものではない、是とか非とか云ふけれど皆んな同穴の野狐で、腹の中は一ツである

●然雖如是、我即不恡麼

なる程稜兄の云ひ分は結構至極に相違はないが、併し此方には賛成が出來ぬ、何だか意地悪るさうな奥齒に物の挿まつた様な云ひ方ではある

▲別ニ一條ノ長アラバ便チ請フ拈出セヨ

長慶の説に賛成が出來ぬといふ

からには、定めし御自分に別段な長所があるに相違はない、あるならば速かに拈出

して見られよ

●僧云和尚作麼生

不賛成不同意であるといふならば和尚様にも定めし勝

れた御意見があるので御座りませうその御意見は如何なものですか

▲毒蟲頭上ニ痒ヲ措ク

何だ如何にも危ないな其んなことを尋ねるのは毒

蛇の痒りを措いてやる様なものぢや

●沙云用南山作麼

全休雪峯和尚が南山杯といふ餘計なことを擔き出した

のからして氣に喰はんのぢや併しまあ夫れに就て稜兄が一轉語を下したのは流

石の作家相見ではあるが元來その南山が氣に喰はぬから稜兄の云ひ分に充分の

同意を表することが出来ないのぢや仍て我意の如きはその南山云々は全く餘計

な閑言語であると思ふと雪峯も長慶も一僧をも一言下に罵倒し去られた

▲只者ノ鼈鼻分外ト爲ス

玄沙は南山こそ用ひぬものゝ其實は一種特別の

鼈鼻蛇で雪峯長慶一僧までを悉く一呑にした大蛇であるナリに法界をまて一呑

ぢや

●雲門以拄杖擲向峰面前作怕勢

長慶と玄沙との二人が寄て係ッてスツベ

りと南山の鼈鼻蛇を弄り殺して終ッて跡形も見えぬ様にしたから是では行かぬ
とスカさず雲門が拄杖を以て雪峯の前面に抛擲し如何にも怕しさうな勢ひを示
された是れて公案が圓明ぢやなぜならばその大死した鼈鼻蛇が大活現成したか
らの事である

▲何ソ自ラ己命ヲ傷ルコトヲ得タル

雲門どの全體尊公は氣が升ッたので

はないか元來自己の拄杖子ではないかそれに何うして其の様に怖るゝのである

かナそれとも雪峯が大蛇を拈出したからそれが怖くなつたのか

頌云

玄沙大剛當機不讓長慶少勇不見義南山鼈鼻死無用風雲際
會頭角生時來蛟龍果見韶陽下手弄不忍俊下手弄弄不出即休激
電光中看變動身眨眼喪在我也能遣能呼少賣於彼也有擒有縱寸七
有底事如今付阿誰老漢冷口傷入不知痛阿耶

●玄沙大剛 今日天童がこの本則を批評して見ると、玄沙和尚が、南山などの閑語を用ひるは餘計であると云はれたのは餘りに何うも剛直に過ぎる様なが、却々剛のものぢや

▲機ニ當ツテ父ニ讓ラズ 流石は一騎當千の勇將、敢て父の力は借らぬ

●長慶少勇 長慶が喪身失命して終ひましたと謂ったのは如何にも弱過ぎる様に見える、併し強に逢うては弱弱に逢うては強と來るのが佛祖位中の活作畧である

▲義ヲ見テ爲サス 義を見て爲さざるは弱卒である、義を見て進むは勇卒である、併し機を輸く謀主に深意あり、敵を欺く兵家に遠思なしといふから、弱卒の様に見えて居ても、おのつと勇豪の所もあるものぢや

●南山龍鼻死無用 何うも長慶は弱に偏し、玄沙は強に過ぎて居るから、南山の龍鼻蛇は死したも同様である

▲條斷貫索ヲ擔フ 玄沙も長慶も一條のチギレ繩を擔うて居る様なもので一向用に立たぬ

●風雲際會頭角生

併し死物となつたからとて油斷はならぬ、弱き雲と強き風とが際會と一緒にになると其間に龍鼻蛇が怖しき頭角を生じて震天動地の働きを起す様になる、謂ゆる一死再活の時節である

▲時來レバ蚯蚓モ蛟龍ト作ル 彼の蚯蚓が果して蛟龍になるものか、ならぬ

ものかは知らねど、蚯蚓を見た様な小蛇でも、年功を積みれば大龍に變化することもあるから、死蛇が活蛇となつて頭角を生ず様なこともないとは云はれぬ

●果見韶陽下手弄

韶陽とは雲門の事である、風雲が際會すれば頭角を生ずる所以のものであるが、果して雲門が頭角を生じ、恐しき龍鼻蛇となつて、平峰の面前にこの活蛇を翻弄せられた、何うも死蛇に手を下し、妙術を施して活蛇とせられたは如何にも手際が宜い

▲忍俊不禁

雲門が斯く手を下して翻弄せられたのは、定めし其の死蛇を見て居るに忍びぬからの事であつたらう

●下手弄

是れは韶陽の翻弄が如何にも勝れて居るから、讚歎の餘り更に此の三字を置かれたのである

▲弄不出ナラバ即チ兩廻三度セン 雲門の翻弄が出来てあつたならば何うして二度も三度も賞めはせぬ、翻弄の手際が如何にも美事であるから斯くも再三賞めらるゝのである

●激電光中看變動 イヤ何うも其の轉變自在の状態といふものはス早いのぢや否なス速くなくてはならぬ

▲眼を眩スレバ喪身失命ス 變動が如何にも機敏であるから須臾の間も油断すれば一呑にされて終ふ

●在我也能遣能呼 さてその鼈鼻蛇の人々個々道邊に在るときは遣るも呼ぶも把るも放つも自由自在である

▲少賣弄 天童の賞方は如何にも小商人の様ぢや、餘りに賞め過ぎるは聞き苦しいものぢや

●於彼也有擒有縱 若又那邊に在りては擒と把住することも、縦と放行することも亦自由無礙である

上の句は自受用三昧、下の句は他受用三昧を頌せられた

▲七寸手ニ在リ 蛇の頭から頸に至る七寸の所が急所であるから其處を打てば必ず死するといふ事ぢや、雲門はその七寸を押へて居るから殺活自在である、

雲門許りではない、人々も亦復斯うなくてはならぬ

●底事如今付阿誰 以上にて本則は頌し終り、以下は天童座下及び四海の禪流に對しての爲人である、底事とは此の鼈鼻蛇を弄する底の事である、此の活手段をば如今ソモ何人に付囑したものであらうか、何うも其人が無かりさうぢやとは

天童の歎息である

▲萬松老漢 天童和尚その様にまあ心配めさるな、その付囑を得て自由自在に翻弄して餘りあるは此に萬松老人が居りますぞよと力味れた、ナリに萬松老漢に讓つた事はない

●冷口傷人不知痛 天下人は大方この蛇の冷かな口を以て賞められ、その毒氣に觸れて居るのぢやけれども、皆んなが死物同前であるから、一向にその痛みを知らずに居る、困つたものぢや、高聲に呼んで曰く、脚下を照顧せよと

▲阿耶阿耶 俗に謂ゆるあやくといふこと、即ち驚く義である、成る程く

如何にも驚いたものぢや、併し萬松などはチャンと其の痛痒を知ッて居りますよ
天童サン

第二十五則 鹽官犀扇の話

示衆

示衆云刹海無涯不離當處塵劫前事盡在而今試教伊觀面相呈
便不解當風拈出且道過在什麼處

●刹海無涯不離當處

刹は土田と申す事にて此れは陸地のこと、海は讀て字
の通り、故に刹海をば陸海として見ると素人には分りが宜い、この世界をひつくる
めて見れば只是れ陸海のみぢや、之を夫れ佛學上では五大洲とか六大洲とか涯り
をつけない、中に就て一佛所領の世界を三千大千世界とも三千刹海ともいふ、この
三千刹海が無量無邊不可思議の十方虛空に徧滿して際涯がないとの唱へてある、
この廣大無涯の刹海なるも、優に五眼を活開して看來るときは只此の當處を離れ

ぬぢや、當處とは即ち人々の脚跟下面前底ぢや、此れはまた如何なる道理であらう
か、何にこれは大小圓融依正不二といふ道理から唱へたのである、ソコで李長者の
華嚴合論にも無邊の刹境自他毫端を隔てずと申してある、又首楞嚴經などには釋
尊がドエライことを申された

我れ妙明の不滅不生を以て如來藏に合す、而も如來藏は唯妙覺明にして法界を
圓照す、是故に中に於て一を無量と爲し、無量を一と爲す、小の中に大を現じ、大の
中に小を現ず、道場を動ぜずして十方界に徧らす、身に十方無盡の虛空を含み、一
毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に座して大法輪を轉ず

背覺合塵の時は大は大小は小と自他の隔歴があれど、滅塵合覺の時は大小圓融自
他一枚となる不離當處とは即ち滅塵合覺した如來藏中の消息にして神通大光明
藏の様子ぢや

●塵劫前事盡在而今 塵の字は極小を意味することもある、今は無數を加
味したものぢや、劫は時間の義ぢや、故に塵劫は無數時間のこと、前句の刹海は無量
空間のことぢや、佛學上に於ては五百塵點劫など申す熟語もあつて、塵劫前事は甚

大久遠の大昔し威音王已前といふ程のことぢや、そのまゝ古い時の事が即今面前底に在りとは又何うした事であらうかな、之も左のみ六ヶ敷い事ではない、矢張華嚴合論の序に前に引いた句に續て、十世古今始終當念を離れずと申してある、有形の上でこそ永いといへば永い様なものゝ無形の上では古今の差別はない、ソコで華嚴經の中には、一念普觀無量劫、無去無來亦無住とあり、法華經の中には、六十小劫猶如半日とある、後來無門和尚が兜率三關の頌に、一念普觀無量劫、無量劫事即如今、觀破箇一念、觀破如今觀底人とあるが却々面白い之を要するに、應切は時間の義であるから、三世のこと、刹海は空間の義であるから、十方ぢや、この無量無邊の三世十方に通貫して居るのが吾人一念の心性ぢや、この心性の何物たることを徹見するのが禪人本分の着力を要する所である、

● 試教伊觀而相呈 今日正師家たる者が彼れ諸人を試験して見んが爲め、一機一境例へば扇子禪板の如き上に於て、その見解を相呈露せしめんとして、或は竹篔を拈じ、或は拂子を拈じて、サア何うぢやと差付て見ると下の句に移る

● 便不解當風拈出 便ちその師家の家風に突當つて、その學人が當位即妙にある

サア御覽下されと、その見解その禪機を拈呈し且つ呈露することを解せぬものがある

● 且道過在什麼處 例へば鹽官が扇子を以て侍者の脚跟下を試験して見たが其侍者が平凡であるから、官の家風を拈出せらるゝに當つて、その深意を解することが出来なかつた様なものぢや、その當位即妙に切抜ることの出来なかつたのは侍者の過失といふものぢや、且く道へその過失は畢竟ドンな處にあるのであらうか、そは申すまでもなく、師家の着眼點と學人の着眼點とが指り違うて居るからの事である、その師家と學人との相違點を見んとするには、今日の本則に就て箇と觀察するが肝要ぢやとは萬松老人の親切である

本則

舉鹽官一日喚侍者與我過屎牛扇子來、他不得、者云扇子破也、
 時却官云扇子既破還我屎牛兒來、何不見道破也、者無對、
 完全 雖有如無

資福畫一圓相於中書一牛字 出巧新行 能做會賣

●舉鹽官一日……來 この鹽官といふは支那杭州鹽官縣鎮國海昌院齋安禪師の事にて宣宗皇帝より悟空禪師と追諡せられた卓拔の善知識である。犀牛角を以て其骨を拵へた扇子が行はれて在たものと見える。この官禪師が有る日侍者を試験して見やうと思ひつかれたものと見え、コレ侍者和尚今日は餘程暑いから犀牛の扇子を持って来て下されと平生底の事に托して何となく言葉を掛けて見られた。併し此の言便に深意あることを聴き取らねばならぬが、侍者は何と聴いたか知らん

▲要且ツ他ヲ少クコトヲ得ズ 他とは扇子の事ぢや、寒い時には必要もないが、暑い時には何うも用ひずには居られない。併し扇子の時は扇子で法界を究盡して居るのぢやか、迂濶に聞いたら直に落第しなければならぬ

●者云扇子破也 この挨拶の様子では侍者も只事ではないと聞取たものらしい。一寸氣點を利かし、イヤその扇子は破れて了ひましたと行らかした所は風風

兒の様にもあるが惜い哉一着を缺いて居る

▲未ダ舉セザル時却テ完全 何方も未だ黙つて居た時が完全の扇子であつたが取遣するとなつたら破扇子となつて了ふた惜い事ぢや

●官云扇子既破還我犀牛兒來 左様か既に破れて仕舞たならば仕方がないが、併し其骨は残つて居るであらうから夫れなりとも持て来て呉れとは再勘辨である

▲道フコトヲ見ズヤ破ル、ト何ゾ話ヲ領ゼザル 既に破れて仕舞たものならば用にならぬ筈ぢやに、その破れた扇子の骨を持って来いとは話の分らぬ人ぢやの夫れとも何ぞ用事がある積りかな、チト聞えぬやうぢや

●者無對 侍者の無對は何う見たものであらうか、善く見れば無對の所に妙味がある。抑も破扇子を持って来いとは無理な云ひ分である。對ふるの必要はない。既に破れて用を爲さぬものぢやもの何うして其骨が残つて居るものか、骨も皮もスツベリと寂滅ぢや、維摩の默然世尊の無説も只是々ぢや、悪く見れば頑然無記で龍頭蛇尾である。何うも侍者の無對は餘り善くも見られないやうである

▲扇子猶在リ有リト雖モ無キガ如シ。人々持合せの扇子ぢやもの決して無
い筈はない又破れても居らぬ有りはすれども侍者は受用する事を知らぬから無
きも同様である

●資福書一圓相於中書一牛字

資福といふは何んな人であるかその成立が
分らぬけれど兎に角侍者の無對を見て少しく遺憾に思はれたものと見え見るに
見兼ねて侍者に代り鹽官の需に應じられたのである併し侍者の破扇も趙州の無字
と同じく妙味を含んで居る含んでは居るが猶是れ片足ぢや資福の圓牛で以て兩
足完全公案圓明となつた資福の圓牛は刹海塵劫當機觀而の拈出である

▲巧ヲ出シ行ヲ新ニシ能ク做シテ賣ルコトヲ會ス

一圓相を書き其中に牛の字を書いて鹽官に呈露した所は却々以て巧みなものぢ
やこの行動は資福の新發明にて却々の上出來ぢや斯ういふ新規の扇子ならば賣
口が宜からう鹽官も定めて満足せられたであらう

頌云

扇子破索犀牛 二不做捲擧中字有來由 強如說 誰知桂穀千年魄

埋根 妙作通明一點秋 現世 千丈

●扇子破索犀牛

この一句に鹽官と侍者との問答を頌じ次の一句に資福の
圓牛を頌じられた扇子が破れたならば其骨を持って來いと鹽官が落處即ち空處に
突込まれたけれど侍者は其の空處より轉身し來りて扇子の受用底を解すること
が出来なかつたその缺點をば資福が補はれたのである

▲一做ササレバ二休セズ

扇子を持って來いと一度勘辨せられたけれど夫れ
て要領を得ないから再び犀牛兒を持って來いと何處くまでも休められぬは親切
な爲人である

●捲擧中字有來由

捲擧とは一圓相のことである資福が圓相の中に牛の字
を書いて鹽官に呈露したのは却々以て深い來由があるそは何んな來由であらう
か侍者の破扇無對は一圓相であるかも知れぬこの一圓相は真空であるこの圓牛
は妙有である色即是空空即是色この真空妙有が本則の眼目である此の來由の參

より有物の偏位となり死魄が忽ち生魄となつたのでコレは空即是色ぢや

第二十六則 仰山指雪の話

示衆

示衆云、氷霜一色雪月交光、凍煞法身、清損漁父、還堪賞玩也無。

●氷霜一色雪月交光　氷の上に霜を置いて見ると何れも一色で真白い、其れから又白雪の上を白月が光を交へて照せば是も亦真白ぢや、この氷霜雪月は共に一色にして異色はない之を大功一色正位一色といふこともある、大智禪師が不依一物の偈に「全身獨立劫空、前朕迹猶存、一色邊」といひ、蘆月庵の偈にも「長年獨坐寒岩、艸一色功中轉、步難」といはれたこともあるので、此の一色邊に獨坐獨立して居るのは善い心地ではあるけれど、此に住着すれば向上一色の死淡といふものになるから、一旦は此處に到り得て見なければならぬけれども、永く足を停むる場處ではない、洞山大師が機位ヲ轉ゼザレバ毒海ニ死在スと云はれたのは、此の正位を一轉して

偏位に就かしめんが爲の垂示である

●凍煞法身清損漁父　煞は殺と同じこととてコロスと訓ずるぢや、凍はコッヘルといふので、若し氷霜雪月の中に坐着したならば、此の肉身でも暖氣が一點も無くなつて、遂には凍煞せられて仕舞ふが如く、大功正位の一色光中に永く滯着したならば、已到住着の大難病に罹つて法身の慧命が凍殺せられて仕舞ふのみではなく、漁父を清損するのである、此の故事は第四十一則にも引てあるが、此れは昔し屈原といふ人が、官界の腐敗を歎き、自から官を辭し、離騷經を書いて汨羅江に身を沈めたことがある、其時江の畔に獨行し漁父に謂て申しけるやう、舉世皆醉唯我獨醒、舉世皆濁唯我獨清、沈汨羅江而卒と此の離騷の語は文選第三十二卷にある、法身には尙幾分か臭味があるけれど、漁父には更に禪道佛法の臭味がない、ズツト法身邊を透得して居る、透得して見れば頭々物々真如實相ならざるものはない、然るに若し諸法皆空の一色邊に坐着して居たならば、諸法實相なる漁父の境界に及ばぬから、これは清損したといふものである、して見ると皆空の屈原よりも、實相の漁父が最も勝れて居る、その臭味のない漁父だに一念之に愛著すれば、矢張清損である

究は最も親切ならんを要する

▲強テ道理ヲ説クガ如シ 圓牛は只是れ脱躰露現の圓牛ぢや、道理も來山もあつたものではない、それを何ぞや天童和尚が道理あるらしく云はるゝのは資福を強ひらるゝといふものである、又學人をして強テ道理を求めしむるは、餘り好ましからぬことである

●誰知桂殺千年魄

桂殺とは桂輪と同じく月輪の事である、魄とは黒月のことにて死魄といふときは朔のこと、生魄といふときは望といふことになるが今は即ち死魄の義にて千年とはあれど其實は無量劫の義である、此の千年萬年も光のなき死魄の桂殺が忽ち通明一點の秋と作らんとは誰が知るであらう乎と結句に掛けて讀まなければならぬが、桂殺千年の魄とはソモ何事を領じたのであらうか、コレは侍者無對の所をば巧みに屎牛に事よせて領じたものである、屎牛は月に因ンてある、その證據には古詩に「屎八月ヲ既ブニ因テ紋角ニ生ジ象ハ雷ニ驚カサレテ花牙ニ入ル」ともあり、又此の第三則如是經轉讀の頌にも「雲屎玩月際含輝」とある、又何故に月輪の因縁を假るのであるかといへば、資福の圓牛と鹽官の屎牛とに因

ンだものらしい、流石は何うも詩才に長けたものぢや、要するに侍者の無對を黒月(死魄)に比し、資福の圓牛を白月生魄に比せられたのである

▲根千丈ニ埋ム

何うも此の黒月の桂根は千丈萬丈甚大久遠に埋もれて居て地上に顯はれて來ぬ侍者の無對たる清涼一片の月體てはあれど、未だ朔日の月輪で眞黒闇である、

●妙作通明一點秋

その黒月は正位無物の大虚空であるが、それが妙不可思議に、仲秋八月十五夜の白月となり、偏位萬象の明歷々となつて、三世十方利海塵劫を照らす、この思ひも奇らぬ明月が突然資福の圓相中にハッキリと顯はれ來つたのが捲轢中の來山とでも申すべきものである、此の來山は誰が知るであらうか、誰れにも知らせずて遣りたいものぢや侍者和尙も此の來由を知て居たならば、無對にして終りは爲なかつたであらう、何うぞ天下の諸人は此の來由を能く承知して貰ひたいものであるとは天童の爲人である

▲現世に苗ヲ生ズ

彼の久遠萬丈の底下に埋もれて居た桂木の根底より、忽ち今時の現世に苗芽を吹いて來たのであるが、諸人の眼に見えなかつたか、無物の正位

より有物の偏位となり死魄が忽ち生魄となつたのでコレは空即是色ぢや

第二十六則 仰山指雪の話

示衆

示衆云。氷霜一色雪月交光。凍煞法身清損漁父。還堪賞玩也無。

●氷霜一色雪月交光

氷の上に霜を置て見ると何れも一色で真白い其れか

ら又白雪の上を白月が光を交へて照せば是も亦真白ぢやこの氷霜雪月は共に一色にして異色はない之を大功一色正位一色といふこともある大智禪師が不依一物の偈に全身獨立劫空前朕迹猶存一色邊といひ蘆月庵の偈にも長年獨坐寒岩艸一色功中轉步難といはれたこともあるので此の一色邊に獨坐獨立して居るのは善い心地ではあるけれど此に住着すれば向上一色の死淡といふものになるから一旦は此處に到り得て見なければならぬけれども永く足を停むる場處ではない洞山大師が機位ヲ轉ゼザレバ毒海ニ死在スと云はれたのは此の正位を一轉して

偏位に就かしめんが爲の垂示である

●凍煞法身清損漁父

煞は殺と同じこととコロスと訓ずるぢや凍はコッへ

ルといふので若し氷霜雪月の中に坐着したならば此の肉身でも暖氣が一點も無くなつて遂には凍煞せられて仕舞ふが如く大功正位の一色光中に永く滯着したならば已到住着の大難病に罹つて法身の慧命が凍殺せられて仕舞ふのみではなく漁父を清損するのである此の故事は第四十一則にも引てあるが此れは昔し屈原といふ人が官界の腐敗を歎き自から官を辭し離騷經を書いて汨羅江に身を沈めたことがある其時江の畔に獨行し漁父に謂て申しけるやう舉世皆醉唯我獨醒舉世皆濁唯我獨清沈汨羅江而卒と此の離騷の語は文選第三十二卷にある法身には尙幾分か臭味があるけれど漁父には更に禪道佛法の臭味がないズツト法身邊を透得して居る透得して見れば頭々物々真如實相ならざるものはない然るに若し諸法皆空の一色邊に坐着して居たならば諸法實相なる漁父の境界に及ばぬからこれは清損したといふものであるして見ると皆空の屈原よりも實相の漁父が最も勝れて居るその臭味のない漁父だに一念之に愛著すれば矢張清損である

●還堪賞玩也無 此の一色邊に坐着すれば斯く法身を凍然し、漁父を滑損して仕舞ふのであるが、併し還た此處を賞玩して居る者が有るであらうか、または無いであらうか、無いならば宜いが、有るならば是非とも點破し去らねばならぬ、其れは今日の本則に就て見なければならぬ

本則

●舉仰山指雪師子云還^レ有^レ過^レ得^レ此^レ色^レ者^レ麼^レ 仰山不覺交 雲門云當時便與推倒 打破^レ屏^レ斗^レ何^レ 雪竇云只解推倒不解扶起 接^レ劍^レ相^レ助

●舉仰山指雪師子 者麼 雪師子は雪達磨と同じ様なもの即ち雪を束ねたものぢや、古人は一機一境上何事に托しても此事の爲めなる法話の外はない、マア何が白いとて雪より白きものはあるまい、この白雪よりもまだ白いものがあるか、と座下の諸人に問はれた、その底意は雪師子を以て清淨法身に比せられたのである、この法身地を指して空王那畔とも空劫已前とも、一色光中とも、純一無雜

とも申すのである、この向上一色正位一色の處に坐着して、轉身の一路を解せぬが、學人の禪病といふもの、この禪病を療治せんが爲め、雪師子に事寄せ、一鍼を投じて見られたのである

▲仰山覺エズ平地ニ喫交ス イヤ諸人の禪病はさて置き、仰山御自分で思はず知らず平等の一真地に喫ひつかれたやうぢや、何故かといふに、是よりも尙ほ白い物があらうかと云はれたからのこと、狂人走れば不狂人も走るといふ諺の如く、仰山も爲人のためには自病の發するを忘れて居らるゝ

●雲門云當時便與推倒 仰山が此の一語を垂れられた時には惜い哉、何とも答ふる者が無かつたらしい、ソコで後日雲門和尚が此事を聞いて齒ざしりを咬み、此方が若し其時居合せたならば、便ち仰山の與めに其の雪師子を推倒して仕舞ふであつたに惜い事をしたとは、透法身の一句を呈露せられたのである、實際理地一塵不立、設ひ微塵ばかりでも法身とか法眼とかいへる法愛底のものがあつたならば、淨潔の病ぢや、金屑貴シト雖モ眼ニ入テ翳ト作ル故に空々大空畢竟空と推倒して仕舞はなければならぬ

▲ 缸ヲ奈何トモセズ辱斗ヲ打破ス 此句は空谷第九十一則にあるので鏡清が問話の一僧に答へられたもの辱斗とは舟の中で水を打ひ所の器と見える即ち垢汲柄杓ぢや柄杓を打破たから垢水が溜つて缸をば何うすることも出来ぬ其んなに推倒して仕舞つた分では彌々毒海に死任するであらうと透脱無依の病を去らしめんが爲めの爲人である

● 雪寶云只解推倒不解扶起

なる程推倒するも悪い事はないけれども推倒した切にして扶起することを知らなければ却て無事甲裏に坐在し向上魂不散底の死人となる故に我れ雪寶は佛事門中不捨一法の扶起門を建立するのであると今時を以て直に久遠と爲し色を拈じて直に空とせられた斯くの如く扶起推倒の二門に宛轉自在を得るのが禪界の活生涯といふものぢや

▲ 路ニ不平ヲ見レバ劍ヲ抜テ相助ク 一鉢に雲門といふ男は何時も荒つばい釋迦でも達磨でも悉く一棒下に打殺して仕舞ふといふドエライ勢ひ又雪寶は俠客腐の男で弱さうな者に逢へば直に之を助けて遣うといふ様な氣風である今は仰山と雲門との組打ちや仰山は弱にして雲門は強である路傍に此の不平なる

組打あるを見ては忍俊不禁何うも黙つて見過すわけに行かぬから智劍を抜出して其の弱き仰山を助けられたとても評して見やうか

頌云

一倒一起雪庭師子活似箇 慎於犯而懷仁者恐法 勇於爲而見義見路
 不平清光照眼似迷家不東西 明白轉身還墮位更上一 衲僧家了無寄處
 一且過生同死同生何此何彼刀斧所 暖信破梅兮春到寒枝收得返 涼
 颺脫葉兮秋澄潦水來颺

● 一倒一起雪庭師子 一句に公案の全体を拈提せられたが何時もながら正覺禪師の手腕には驚嘆するの外はない仰山雪庭の雪獅子に就て雲門は之を推倒し雪寶は之を扶起せられた只箇の雪獅子推倒も必要なれば扶起も亦必要この回互宛轉の妙密が祖宗門下の風流である

● 恰モ箇ノ活底ニ似タリ 三老は何れも活々して居る様ぢや倒れたかどす

れは直に起る何うせ死に顔てはない

●慎於犯而懷仁 仰山が還有過得此色者麼と釣語を下されたのは、參學の諸人が清淨法身の雪獅子即ち其の明白を犯しはせぬかといふことを慎み恐れて、この明白裏に坐着してはならぬぞと云はぬ許りに、此の一語を垂れられたのは實に大仁慈を懷かれての事といふものである

▲法ヲ識ル者ハ恐ル 犯すことを慎み恐れて犯させぬ様にするのは佛界の法律を識て居るからの事である、法律の網に罹ることを恐るゝ者は決して其法律を犯すものではない

●勇於爲而見義 論語にも見義不爲無勇とあるが如く、雲門も仰山と同じく無雙の宗師家で、殊に義理の難い人であるから、參學の諸人が法身向上の明白裏に坐着する者多きを恐れ、仰山の垂語を此儘に打捨て置ては大變なりとて推倒せられたのも、諸人の爲に義に勇まれたのであるか、雪竇が又その推倒を見られて、雲門が一倒せられたのも一理であるけれど、直饒透得放過即不可で、其儘に打捨て置くは無事甲裏に坐着して透脱無依の病となる、仍て之を看過することはならぬと、その

雲門の推倒せられた雪獅子を再び扶起せられたのも亦義に勇まれたといふものである

▲路ニ不平ヲ見ル 雲門にもせよ、雪竇にもせよ共に法門の俠客であるから、佛祖の大道に不平なところのあるのを見て黙ッては居られぬ、質ぢや黙ッて居らぬから一肩脱いでその危きを助けられたといふべきである

●清光照眼似迷家 そは亦何故かといふに、明白一色の清光が諸人の眼睛を照すにもせよ却て其の清光の爲に視神經を奪はれ、眼が昏んで歸家穩坐する所の路に迷ふことがある、故に趙州老人は老僧不在、明白裏と云はれた、併し歸路に迷ふと云へば家郷を離れて居る様に聞ゆれど、本來家舎を離れて居ないのであるから似たりと申された、只此の一字でも千理を含ませてあるは作家の妙手腕である

▲東西辨ゼズ 白銀世界瑠璃地ともいふべき一片の白漫々地であるから東西の方角も辨つたものではない、方角が分らぬから我家には歸へられぬ、歸へられなければ半途の活計ぢや、素より清光一色の法身邊は全途でない

●明白轉身還墮位 然らば此の明白裏を轉身推倒して非心非佛の境界に到

らんとあせるも尙是れ金鎖玄路の難關大功一色の功位に唯在して其の位中を透過し去ることは出来ぬ透過する事が出来ねば矢張修證功勳邊に彷徨して居るのぢや

▲更ニ一層樓ニ上ル 只さへ危ない高い所であつたに更に一層高き樓上に上ツたから漸々危険極まる

●衲僧家了無寄 衲僧本分の行履とする所は向上にも居らず向下にも墮せず正位にも留まらず偏位にも寄らぬ例へば珠の盤に走るが如くである斯くの通り十二時中一切處に寄らず宛轉回互するのが行履の本分である

▲且ク一生涯ヲ過グ 是れは且過の一生と讀んだ方が宜い様ぢや雲水の悠々として去來に任すが如く一處に永く留まらぬ様にするのか正偏回互の行履である

●同死同生何此何彼 何れの一方にも偏倚せぬから或時は大死にも同らし或時は大活にも同らし或時は推倒の死に同じ或時は扶起の生にも同ずるので明暗各相對して比するに前後の歩の如しぢや前歩後歩進一步退一步何れをか此と

し何れをか彼とせん何方にも傾ひかぬから中道實相の往來といふべきである

▲斧モテ研ノドモ開ケズ 生とか死とか正とか偏とかの一方に片寄れば隙間が出来るけれど何方にも依らぬから少しも隙間がない隙間がないから刀斧をもつて研らうと思つても穴が開かぬ穴の開かないのが兼中である

▲暖信破梅兮春到寒枝 其の向上向下正位偏位の何れにも片落せぬ天真自然の妙用を頌じて見やうなれば斯うである暖和の花信が枯木同様なる寒岩の老梅樹に入れば一陽來復として寒梅の枝土に積れる白雪も何時しか消失せて忽ちその蕾を破り香氣馥郁たる立派な五葉の花を開き久しく寒林にて淋しかつた窓梅が如何にも賑々敷なつて黄鳥も妙なる聲を發するやうになる古歌にも○染め出す人はなけれど春來れば柳はみどり花はくれなゐとある如く無一物の處無盡蔵となるのが即ち天真無作の妙用である

▲返魂香ヲ收得ス 萬死に一生を得るは返魂香の効能である如く春が來れば寒岩の枯木も活き返つて花が咲く様になる之が人為の分別でなく天爲の自然であるから面白い

●涼颯脱葉兮秋澄涼水　その天真自爾の妙用は春梅許りの事ではない、春も過ぎ夏も過ぎ去て、涼颯の秋風が吹來ると、梅葉のみではなく、梧葉も其他の木葉も自然に何時となく落盡きて仕舞ふのみではなく、此處彼處にある涼水も奇麗に澄み渡つて清らかなになる、是れ何の道理ぞといふに透脱自在の妙用である

前句は扶起門を頌じ、此句は推倒門を頌じられたのぢや、此の現成公案は遍界不

會藏の端的獨露である

▲來テ塗毒鼓ヲ搥ツ　木凋み葉落ちて體露金風となり、凡聖迷悟明暗偏正の熱氣熱慢が去つて全く大死一番したのは塗毒鼓の利目である、併し塗毒鼓といふも、自然鳴の天鼓にして人為の作用ではない

天童上堂の語に「十成收得返魂香、一等來搥塗毒鼓」とある、今は之を轉用したものらしい、塗毒鼓の故事は涅槃經第九如來性品にある、

第二十七則 法眼指簾の話

示衆

示衆云師多脉亂法出姦生無病醫病雖以傷慈有條攀條何妨舉話

●師多脉亂法出姦生　人に病があるに依て醫師の必要がある、其の醫師も一人の病人に二人も三人も掛つて其の脉を見るときは、その見立が違つて、同じ脈が色々に變つて來る脈の見方が變つて來るから、配劑の仕方も變つて來る、ソコで病に狂ひが生じて、輕くて愈るものが、醫師の爲に却て重くならぬ限りでもない、又天下の法律は惡物があるに依り、止むなく之を編み出さねばならぬ譯であるが、之あるが爲め警察も必要になり、裁判所も喧しくなる、又此の法網を潜る奸佞の族が増して來る、佛祖の出世は衆生の病を療じ、天下の惡事を除かんが爲めであるが、其が爲め或は却て宗我見法我見だけが植て來て、何だか迷ひの上に迷ひを重ねて來た様な感がある○生れ兒が次第に智慧つきて佛に遠くなるを悲しきその佛見法見の爲め、無間の業を造る者がある様になつたとして見るときは、大に憂ふべきである

●無病醫病雖以傷慈 世間の醫師は有病に有病を醫するといふもの、法門の中に於ても、二乗の如く無病無學の空認に墮して居る、祖師の西來は全く此の空無の病を療じて再活蘇生の境界を得させて遣りたいといふ如何にも傷ましい大慈悲といふものである、普通の眼から見たならば、無病の者に醫師をして診察せしむる様なもので、無益の様にはあるけれども、その無益の様な處に益のあるのが傷慈である

●有條攀條何妨舉話 それも是れまで條目條例がなければ止むを得ないけれど、既に古徳の條例があつて見れば、之を拈舉して語話するに何の妨ぐる事があるらうぞや、最も此の微細なる問題に就ては篇と攻究を試みなくてはならぬ、その條例とは何であらうか、そは二僧捲簾の話してある

本則

舉法眼以手指簾 莫道不知 時有二僧同去捲簾 同行不眼云 一得一失 分身下

●舉法眼以手指簾 午齋の前に會下に在る二人の僧が方丈へ上參致した、流石は天下の老和尚、大法眼文益禪師ぢや之を接するに、古則公案の話しをするので、もなければ、文字葛藤の穿鑿をせらるゝのでもない、試みに二僧の脚下を探らんが爲め、何とも言はずに、手を以て方丈前の簾を指された、必竟何等の意であらうか、法眼の指頭は容易に看取することが出来ぬ

▲知ラスト道フコト莫レ見ズト道フコト莫レ 盲目ならばイザ知らず、知らないと云ふ事も出来まいし、見ないと云ふ事も出来ないであらう、サア何うしたものであらうか

●時有二僧同去捲簾 時有の有の字だけは少し邪魔になる様ぢや、何故かといふに、捲簾は他の者の爲ではなく、二僧の爲めであるからのこと、故に時に二僧同じく去て簾を捲くと讀まねばならぬ、この二僧は何と思つたか、如何にも恰憚さうに早合點して簾を捲きあげた、併し乍ら法眼の意に叶ふたか、叶はなかつたか、それも果して簾を捲くと指揮せられたのならば、無論その命に應ずべきであるけれど、無言にて指したのであるから、何うも曖昧である、要するに二僧も足の軽い奴では

ある法眼が指頭の爲に轉ぜらるゝ様な事では大抵その高は知れて居る

▲行ヲ同ウシテ歩ヲ同ウセズ 二人が同じ様に了解して起立した所の様子は同じ様であるが歩み方は少々違つた所がある同じ様で同じうないのが二僧の行履ぢや

●眼云一得一失 普通の理屈から云つても機が利いた様で間が抜て居るか
ら得失に相違はない併し乍ら本来無法の中に於て強て法を立するは已に得失である法眼が僅かに手を擧げ二僧が去て籠を捲いたのも本分より見れば已に第二第三である第二第三は有無得失の法にて第一義の中には有無もなければ得失もない

ソコで萬松老人は之を評して諸方は皆得失を離れ是非を亡ずるを以て上と爲す法眼は是非海裏得失坑中に走入して活計を作す蓋し得失なき人にて天下の得失を定むべし萬松恁麼に提唱するもまた得あり失あり諸人恁麼に上來するもまた得あり失あり唯だ深く利害の端を明せるものにて其の損益を較ぶべし道箇をば喚て現成公案と做す再勘を勞せずと云はれた如何にも得失は世法佛法の現成公

案であるこの現成公案に就て深く利害のある所を明知するのが稱僧の着眼學人の着力すべき所である然るに世人は多く得失是非の端緒を見ざるものぢやに依て自己の行履を誤まるのみならず天下の得失を定むることが出来ないのである世法に於ても佛法に於ても靜慮果斷を要する所のものは只この得失である得に就くものは幸福を得失に就くものは不幸に陥るものである彼の四聖解脱の境界に遊化するのには得に就く所以六凡繫縛の苦海に沈淪するのは失に就く所以である三祖大師の信心銘に迷へは寂亂を生じ悟れば好惡無し一切の二邊妄りに自から勘酌す夢幻空華何ぞ把握に勞せん得失是非一時に放却せよと云はれたのは一切の二邊を透脱せよとの意である二邊を透脱して二邊を見れば能く二邊の端が知れる已に二邊の端が知らるれば得に就て四聖に往返するは固より失に就て六凡に輪回するも亦轉た風流の遊戲三昧である大法眼の一語其意津々たりと謂つべきである

▲劍下ニ身ヲ分ツ 得失の一刀は實に二僧が死活の定まる所である併し法眼の一刀は千藏の下威風凛々ぢや

頌云

松直棘曲鶴長鳥短動不得羲皇世人俱忘治亂胡蘆提其安也潜龍
 在淵佛眼覷不見其逸也翔鳥脫絆斫頭望無何祖福西來上梁裡許得
 失相半參下柱蓬隨風而轉空業識茫茫無本可據紅截流而到岸順水張帆
 中靈利衲僧罵街醉漢看取清涼手段我這裡也一人

●松直棘曲鶴長鳥短　これは楞嚴經の松直棘曲鶴白鳥玄とあるのをモデル
 たものらしい、初めの四句は本來得失迷悟に落ちぬ自分の宗旨を頌じ、次の四句は
 得失利害に落ちた第二義門頭の事を述べられたので、初めは眞諦、次は俗諦の商量
 謂ゆる眞如門と生滅門とである
 松は本來正直なもの、棘は本來曲折したもの、鶴の足の長いのも、鳥の足の短いのも
 別に邪魔にはならぬ、短者は短法身、長者は長法身、遍界不礙の現成公案得もなけれ

ば失もない、智愚利鈍その儘の増減である

▲動著スルコトヲ得ザレ　方圓長短其儘てよい、高處は高平に、低處は低平に
 少しも移動するには及ばぬ

●羲皇世人俱忘治亂　支那での大昔し、伏羲氏や神農氏の時代には、悪人とい
 ふが無かつたから、世を亂す様なことは無かつた、亂す者がないから之を治むる必
 要も無かつたのである、故に殆ど治者と被治者と上と下との隔てもなかつた、夫
 故自他俱に治亂のことを知らなかつた、その治亂は得失である、本分より見來ると
 きはお互も本來成佛にて治亂得失迷悟凡聖の音沙汰を知らぬ、羲皇世の人である
 ▲葫蘆提籃得肥　是れは何だか甚だ解し兼ねるやうであるが、葫蘆とは夕瓜
 のこと即ちふくべの事ぢや、提はヒツサゲル、籃は暫なりてシバシの間ぢや、そのふ
 くべを暫し提げて見るに如何にも能く肥て居て、前後が分らぬとは治亂得失のな
 きことを譬へたものらしい

●其安也潜龍在淵　さて其の治亂興廢を忘れて安穩なる日用を形容して見
 やうならば、周易の乾の卦に、初九潜龍勿用、九四或躍在淵、といふが如く、如何にも靜

かなものぢや、得失是非の音沙汰などは夢にだも聞えぬ様ぢや

▲佛眼ニ觀レドモ見エズ 非思量の境界はよし佛眼で觀やうとしても見る

ことはならぬ、まして凡眼をやぢや

●其逸也翔鳥脱絆 秦壑記を案するに昔し王次中といへる者が、年弱冠なれ

ども、非凡の天才あり、蒼頡が作りし古文字を變じて隸書とした時に秦の始皇帝は

何と思ふたものか之を徵されたけれども其の徵に應じなかつた、ソコで始皇は大

に之を怒り、檻車を以て之を囚捕せしめられ、之を連れて行く途中、次中は化して鳥

と作り、その羈絆を脱して西山の方へ飛去つたと申してある、果して真か偽か、何れ

作り事ではあらうが、今はその故事を假りに事實と見做し、巧みに逸脱自在の様子

を頌じられた、實に得失是非の羈絆を脱出して、天空海淵の境界に遊戯する様子は、

如何にも翔鳥が脱絆して西山に飛去つたともいふべきであらう

▲祈頭シテ望メドモ及バズ 迷悟得失の羈絆を脱した境界は三賢十聖の邊

際にも居らぬから、手を額にあて、望み見やうとしても、モウ西山の向上那邊に逍

遙して居るのであるから、眼力の届くものではない

●無何祖禰西來 斯く本來無一物、何處惹塵埃、本來成佛何事も無用であるの

ぢやけれども、祖禰の達磨大師が西來せられてから、風なきに波を起し、平地に竹堆

を生じて何だか非常に喧しくなつた、ウルサイ事ぢや、然らば寧ろ西來のなかつた

のが増してあらうか、さうでもあるまい、吾本來此上傳法救迷情、佛の出興も祖師の

西來も、五濁亂漫の衆生が多いから止むを得ないのである、無論羲皇世の人ばかり

ならば祖佛の必要もあるまい、無病健全の人のみならば、醫藥の必要も衛生の注意

も入らぬわけぢや、だがさうは行かぬ

▲上梁正シカラズ 元來達磨といふ上梁が正しくない、一步進めていへば、佛

といふ礎も正しくないのであるぞと、これは其の裡面より讚歎したもので、ぢや、宗門

の習ひとしては、句抑下の意卓上と申す

●裡許得失相半 裡許とは假りに震旦國を指したものの、達磨の西來せられぬ

時は、この震旦國も、至極太平無事であつたが、西來以後は迷悟得失が半々となつて

來た、半々であるから、得が失のやうにもあり、失が得のやうにもある、迷ひが悟りの

やうにもあり、悟りが迷ひのやうにもある、蓋し迷悟は陰顯の法であるから、深く陰

顯の法に達すれば、隱顯も亦真如海中の活波瀾である

▲下柱參差ス 上梁が正しくないから、下柱までが參差と、たがひちがひになる併し五家七宗と參差交錯して居るのが大に興味のある處ぢや

●蓬隨風而轉空 以下は得失相半の状態を頌じられたので、此句は失の状態を述べらるゝのである、その有様は丁度彼の蓬が風の吹きまはすに隨て東西南北の空中に轉々としごろつく様なものである、彼の煩惱我執佛見法見の爲に轉却せられてウロ／＼として居るのは、如何にも風に隨ふ蓬のやうぢや、三寶の實歸を知らずして、自力でなくては行かぬとか、他力でなくては行かぬとか、イヤ妙力でなくては行かぬとか、煩惱障や所知障の業風に吹かるゝ様子は、變天平な者ぢや

▲業識茫茫ト本ノ據ル可キ無シ イヤ種々様々に轉變するのは、局り業識分別の遡々茫茫として居るのではあるが、必竟その根本を尋ねて見れば、無自性不可得で、據る可き所はない、心は萬境に隨て轉ず、轉處實に能く幽なりぢや、轉處が實に幽であるから、流れに隨て性を認得すれば喜もなく、亦憂もない、憂喜共に無自性天真である

●舩截流而到岸 次に又得の方面を形容して見やうなれば、舩の逆流を截断して向ふの岸に漕ぎ着ける様なものぢや、多分舟老人の作であつたかと思へるが

參禪急水若行舟 纔有閑斷直下流 自汗通身窮命棹 遂臻彼岸妙高樓 と斯ういふのであるから、悟りも随分骨の折れたものぢや、治亂を忘れた義皇世の人から見れば、如何にも御苦勞千萬なものぢや

▲順水ニ帆ヲ張ル快便ニ逢ヒ難シ 物には必ず順逆があつて、失に就くのは、逆風に塵を揚げ、舟を向ける様なものであるが、得に就くのは、順風に帆を張り吹くに任せて、目的地に達する様なものぢや、斯ういふ快便には滅多に逢はれないから、好機を失はぬ様にするがよい

●箇中靈利衲僧 箇中は宏智の座下を指し、兼ては四海の禪者を指されたものぢや、靈利とは目先のさいた機敏なものといふ事、衲僧とは洒脱を意味した詞である、得失や迷悟の羈絆に與からぬものが、靈利の衲僧ぢや

▲街ニ罵ル醉漢誰カ敢テ承頭セン 天童は得失を忘れた、恰利の衲僧と呼び

掛けらるゝけれども、萬松の眼から見ると盡大地悉く得失の十字街頭にウロツイ
て行先毎に罵倒せらるゝ酒酔ひばかりで、天童の命に應ずる様な靈利の漢は一人
も居らぬやうである、承頭とは點頭のこと

●看取清凉手段 清凉とは法眼の住職して居られた寺號である、故に清凉は
即ち法眼のこと、必竟法眼の簾を指した手段は那邊にあらうか、徒らに得失を穿鑿
するが爲でもあるまい、若し靈利の衲僧ならば、その未だ簾を指さぬ已前、即ち得失
の未だ有らざる已前の第一義天に向て眼を着け、法眼の謂ゆる得失は得失に非ず
と看取すべきである

▲我が這裏モ也アリ只是レ其人ニ遇フコト罕ナリ 天童座下にも靈利の漢
があるかは知らぬども、我が萬松座下にもその靈利の衲僧が無いではない、在りは
すれども、サア是れぞと撰むときになると、却々容易には見當らぬ

第二十八則 護國三懺の話

示衆

示衆云、不挂寸絲底人、正是裸形、外道不嚼粒米底、漢斷歸焦面鬼
王直饒聖處、受生未免竿頭險墮、還有掩羞處麼

●不挂寸絲底人、正是裸形、外道 印度には身に寸絲をも掛けぬ真裸の外道が
あるといふ事ぢや、併し當今では真逆そんなこともあるまいが、三千年の昔にはあ
つたものぢや、支那にしても日本にしても、若し此んな者がありとすれば裸形の外
道ぢやが、今日にては警官の注意が行届て、裸形は許さぬ事になつて居る、咄、此んな
世間話しに用はない、今萬松老人の言はるゝのは出世間而も吾が祖門屋裏の禪話
である、寸絲を掛けぬと云つたからとて五尺の臭皮袋に關係した事ではない、正に
本來本法性の法身に於ける話しといふもの、されば縦ひ本來空寂本來無一物何れ
の處にか塵埃を惹かん杯と、空劫以前、父母未生以前、天地未開以前、一片無陰陽地
に出身して、迷悟凡聖有無得失等の寸絲を掛けず、淨裸々赤洒々面目露堂々の好境界
に逍遙すといふと雖も、正眼に看來れば正しく是れ斷空裸形の外道といふもので
ある、何故かといふに是れは初心の一枚見識といふものにて、未だ親しく定慧を修

學し法身を莊嚴せぬからである、如何に無垢清淨とはいへ修證の衣服がなくては無慚愧の人と云はねばならぬ

●不嚼粒米底漢斷歸魚面鬼王 前句には向去守功の咎を明し、今句には尊貴守位の咎を明かされたものである、文句の表面から見ると、粒米を嚼まざるものは、魚面の餓鬼大將に歸依した様なものぢや、魚面大鬼王のことは救面然餓鬼陀羅尼神咒經や儀軌經などに證明されてある、併し今の宗意は其んな事でない、一切衆生本來成佛ぢやと澄し込み因果も修證もあつたものではないと、佛味祖味の法味を咬まざる底の發狂的禪者もあるが、此れは全く空腹高心の餓鬼大將に歸依して二鐵圍山の餓鬼界に墮落した様なものである

●直饒聖處受生未免竿頭險墮 聖處の受生とあればとて西方や東方の淨土に往生するといふ事でもない、只佛境界に安住するといふまでの事である、縱ひ一分の佛境界に入ると雖も、その報位を死守した日には、曹山の言はれた通り尊貴墮といふ、向上の死淡となつて不自由千萬な者とならねばならぬ、長安雖樂不可久居、久居すれば百尺竿頭の危険な場處に墮在して、十方世界是全身といふ轉身の自由

がない

●還有掩羞處麼 何うも兎の様に登るは却て易いけれど下るは難いものぢや、富士は日本一の高山であるから、是非一度は絶頂へ登つて見たいものであるが、若し登り切りて腰を抜き却來する事が出来なかつたならば、隨分大耻のかきあげぢや、孤峯頂上にも一度は登つて見たいものぢやが、若し轉身却來と自由が出来なかつたら慚愧の至りである、今この萬松座下には此の羞を掩ひ隠して退歩承當の人があらうか

本則

舉僧問護國鶴立枯松時如何 步步登高易 登國云地下底一場慚懼 放心下
難 僧云滴水滴凍時如何 法身無被 國云日出後一場慚懼 出死消露
來 僧云會昌沙汰時護法善神向甚麼處去也 點即到 國云三門頭兩
箇一場慚懼 不到點

● 舉僧問護國鶴立枯松時如何

先づ昔しの記録に依て見ると、隋州隋城山護

國の淨果大師諱は守澄とある、此の間僧は如何なる人物であつたかハツキリ分らねど、此の間端に依て見ると却々靈利なものらしい、必ずや一隻眼を具して居る鶴は何時とも高い處に住んで居るものぢやが、それが更に瘦せ枯れ果てた古松の梢に止り立たやうな時は、是れソモ何の時節で御座りませうかと、正位本來空界無一の境界より商量を試みて見た、コレは驗主問といふても好い位である

▲ 歩々高キニ登ルコトハ易ク 一步／＼と高い所へ登るのは左のみ竹の折れるものではないが——と次の句に移る

● 國云地下底一場懺懺

一本には樹下底に作つたのもある、さうサねい、偏位

色界の地下底、歸家穩坐の境界より詠むると、空界無物の高登りをして居る人は如何にも危険なもので、氣の毒な様にもあり、可笑い様にもある、何うぢや長老羞しいことはないか、懺懺は耻辱の義である

▲ 心々放下スルコトハ難シ

竿頭の高き所へ登りつめてから、下へ後戻りする

るのは却て六ヶ敷い如く、前念後念退歩承當することは難儀なものぢや

● 僧云滴水滴凍時如何

此僧は前僧であるか、別僧であるか分明ならねど、或

は別僧かも知れぬ、一滴の水が一玉の氷となり、滴々悉く氷となる時は、その水中に暖氣が一點もないからの事であるが、是の如く大死一番した時は、ドンなもので御座りませうかと、是も向上の一點張りぢや

▲ 法身被無フシテ寒ニ禁ヘズ

被は衣服のこと斯うも眞裸になつては寒くて仕方があるまい

● 國云日出後一場懺懺

北極下の年中暖氣もなく日光も照さぬ處なれば仕

方もなければ、我々の住んで居る所では、如何に氷り切たからとて雲霽れて日光が出れば、石の如く金の如くに凍て居る堅氷でも、直にトロけて柔らかなる水となる時節がある、寒極まれば暖來り、登り詰れば降る時節がある如く、正位を究竟すれば、何うしても偏位とならねばならぬ、大死一番すれば、何うしても大活の現成する時節がある、其時にはあゝ馬鹿／＼しかつたと慚愧するであらう

▲ 雪消テ死人ヲ露出シ來ル

法身向上とか非心非佛とかいへる所知障の雪

が消へば、舞へば、死人の骸骨が露はれて來る、併し此の骸骨は愛すべきである

●僧法會昌沙汰時護法善神向甚廢處去也。天桂禪師は此の三問を一人の僧に見られた様であるが、野袴は別々であるかと思ふ、後人が護國の三廢懼といふことを云ひ傳へたから何時ともなく、一ツの逸話となつたものらしい。

會昌沙汰とは、唐の武宗皇帝が甚だ仙方を好まれた結果、佛法を惡まれ、僧尼は國家の遊民であるから、凡僧は悉く沙汰して還俗させるがよいと、會昌五年八月下旬、僧尼二十六萬五百人を勒して歸俗せしめられた。武帝は仙丹を服せられてからといふものは、氣が狂ふた様であつたが、會昌六年三月の初めに及び、僧尼を沙汰してから半年ばかりも経た比丹毒の爲に死て了まはれた、或者は佛罰ぢやともいふけれど、マサカさうでもあるまい。

それから直に宣宗皇帝が即位せられた、この宣宗は憲宗の第二子にて、事情の爲め一旦僧となり、香殿の會中に在られた、其時志閑禪師や黃蘗禪師を友として大に祖門の堂奥に入られた人である、後に還俗して即位せられたけれど、その信仰は益々固いので、帝即位の後は佛寺も三倍の多きを増したとある(佛祖統記)。

一僧が又護國に問ふたことがある、會昌沙汰の時には佛法が殆ど廢絶せられたの

ですが、若し護法善神が居たならば、あんな事はあるまいに、畢竟善神は何國へ往つて居られたもので、御座らうかと、これは理屈佛法の様である、併しその善神とは何物であらうか。

▲點スレバ即チ到ラス。支那で集會を催する時廻狀をまはす、到ると承諾した時には點を打たない、點を打つときは往かれぬといふ習ひ、日本とは九切反對ぢや、日本では往くと承知した者は、自己が姓名の上に點を打つ、此僧の主人公即ち護法善神は留主と見えて、點が打てあるやうぢや。

●國云三門頭兩箇一場懼懾。三門といふ時は空無相無作の三門にもなるが、今は山門の義と見てもよい、この三門頭の兩箇とは二王の事である、二王とはいへ其實は一王にて、コレは密跡金剛力士のこと、觀音經の中にある執金剛神の事ぢや、應現無方なれば二王とても三王とても、自由自在ぢや、コレは釋尊の遺法を護持せんが爲め、二王と應現されたのである、その兩箇が立て居るにも拘はらず、武宗をして廢佛せしめたのは、彼れの大耻辱である、と護國の言中には響きがある、汝が護法善神は何うぢやと云はぬ許りの詰りである。

▲到レバ即チ點セズ 必定留主てもあるまいが、到來せぬ所を見れば不在の
様にもある

頌云

壯士稜稜鬢未秋恨天 男兒不憤不封侯太速 翻思清白傳家客已
生多洗耳溪頭不飲牛太末後

●壯士稜々鬢未秋 人生れて三十を壯といひ男子の通稱を士といふ先づ男
盛りといふ時である稜々は角立ことにて男ぶる勇氣の勃々たるを形容したもの、
鬢未だ秋ならず男盛りであるから鬢髪も眞黒にて白髪はまだ一筋もない本則に
於ける間僧の勇氣は先づ此んなものであらう

▲天ノ到ラザルコトヲ恨ム 出來得ることなら天までも昇りたい程の青雲
の志はあるがさうならぬを恨て居る

●男兒不憤不封侯 男兒たるものは一たび非常な憤發がなければ諸侯に封

ぜられない、衲僧も亦一たび憤心激勵して虎穴に飛込まなければその虎兒を捕ふ
ることは出來ぬ如く、一旦放身捨命しなければ本來人に相見する事は出來ぬとこ
の二句で尊貴位中の消息を頌せられたのである

▲程ヲ食ルコト太ダ速ナリ どの様に急いても一足飛に四十一位の階級を
超えて佛位に登ることは出來まい併し一超直入如來地といふので一念頓速に見
性することも出來る出來はするが、コレは發心滿位にて行果滿位には却々

●翻思清白傳家客 以下の二句は護國の答話を頌せられたのであるが、後漢
書や史記の故事を以てせられたから、鳥渡その理由を一言し置かねばなるまい
清白傳家の客とは後漢の楊震が事である、震は五十の時始めて州郡の役人とな
つたのであるが非凡な人であるから、漸々出世して涿郡の太守となられた、或時
王密と云ふ人が大金を遺ふと云ふたが之をも辭退し、故舊の人が爲めに産業を
開か令めんと欲したれど、之をも辭退して云く、後世稱して清白吏の子孫となら
しめよと、ソコでその子孫が皆蔬食歩行したとの事である

護國の境界は丁度清白の家風を子孫に傳へた楊震の様なもので、修證功勳の尊貴

をば、塵芥の如くに踏みつけられた

▲已に太多生 清白と云ふも早已に名聞だら／＼

▲洗耳溪頭不飲牛 然かのみならず尊貴に墮して居る僧の爲め、三度までも、

耻辱を與へられたのは、巢父が許由を耻しめた様なものである

史記を案ずるに、許由(字は武仲)といふ賢人が陽箕山に隱遁して居るのを堯帝が聞かれ、さういふ人があるなら自から退いて帝位を譲りたいものぢやとて、其由を以て之を召された所が許由は之を聞いて意外に驚き、耳が汚れたとて、颯水の濱に往いて耳を洗うて居た所へ、巢父といふ者が、牛を牽て來て其水を飲ませやうとする折柄、許由が耳を洗うて居るのを怪み、問て云ひけるやう、凡そ人は面を洗ふに公獨り耳を洗ふのは、全躰何ういふ譯ですかと、すると許由が答へて、イヤ外ではないが、堯帝が我を召して九州の長たらしめんとしたのであるが、夫が爲め耳が汚れたから耳を洗うて居るので、御座ると、時に巢父が之を辨取して豫章の木は高山に生るから、人が之を伐らない、君も世を避けんとせば、何故更に高山深谷に藏れないのであるか、深山に處して人に知られさへしなければ、誰も君を見

る者はない、今この人里に遊て人の目に見ゆるは、其の名譽を求めやうとする欲心があるからの事ではないか、其んな穢らはしい人の耳を洗ふた水を牛に飲ましたならば、牛の口が汚れるであらうからとて、更に上流に流さず往いて水を飲ませたといふ事である、上には上があるものぢや

許由と云ひ、巢父といふ賢人は萬乘の帝位を棄土の如くに思ふたものぢやが、護國も其の如く、法身向上の尊貴を塵芥の如くに思はれて居るので、其の境界は實に洒々落々である

第二十九則 風穴鐵牛の話

云 衆

示衆云、遲基鈍行爛却斧柯、眼轉頭迷、奪將杓柄、若也打在鬼窟裏。

把定死蛇頭還有變豹分也無

●遲基鈍行爛却斧柯 此は神仙傳にある王質の故事にて、委しき事は本則第五十七の所で話する積りである。今は師學對揚の事に應用されたので、風穴と盧陂とに譬へられたのである。遲基鈍行とは下手な碁打の事で、勝敗の見切もなく、ダラ／＼と打て居る、それを傍から見て居るのは、王質が仙人の碁を見て居たやうなもの、斧の柄までが爛れて仕舞のである。盧陂長老の如きは、遲基鈍行であるから、風穴の言句に氣を奪はれ、王質の如く間拔になつて居る。

●眼轉頭迷奪將杓柄 眼轉は目のチロづくこと、風穴の碁は如何にも上手であるから、盧陂の目がチロツいて手を出す事が出来ぬ、又演若多の様に自分の頭が有ながら、自分の頭を人に奪はれたかと疑ふて居た如く、盧陂長老も頓と自己を忘却し、己れの打ツ手に迷ふて居るのである。一方は非常に上手であるから、向ふの手元がハッキリと分つて居る、一方は下手であるから一向に先方の手元が分らぬ、愚圖／＼して居る内に、先方から肝腎な所、即ち杓柄を奪ひ取られて了ふのである。風穴と盧陂との様子が丁度斯ういふ有様である。

●若也打在鬼窟裏把定死蛇頭還有變豹分也無 鬼窟裡に打在するとは、碁が關になつて自由の利かぬこと、死蛇頭とは死石の事である。把定するとは、夫れを弄り回す事である。片角に目を持って、その死石許り弄つて居たのでは、逆も是まで死切て居た碁を活し、豹が變じて虎となる様なことはあるまい、それとも活すの分があるらうかと、本則を丸て碁に譬へたものである。變豹の有無は先づ公案に就て見るがよい。

本則

舉風穴在鄧州衙內上堂云祖師心印狀似鐵牛之機針剗去即印住拽回住即印破截斷只如不去不住印即是不印即泥裡洗是時土塊有盧陂長老出問云某甲有鐵牛之機請師不搭印宛有逆穴云慣釣鯨鯢澄巨浸却嗟蛙步引魂幡子陂佇思已過鬼穴喝云長老何不進語已臨崖岸陂擬議甚多時節穴打一拂子云還記得

話頭麼試舉看

殺人見血

破擬開口

猶自不

穴又打一拂子

仍少三

牧主云佛法與王法一般

不令會做官

穴云見箇什麼

却好與牧云當

斷不斷返招其亂

自招穴便

下座

得意濃時

●舉風穴……似鐵牛之機

鄂州之衙內とは昔し楚國の或る有名な城内の

事である衙は官衙として幕府の時の大名の城内を見たやうなものである風穴は山

號にて汝州にある寺は廣慈禪院人は延沼禪師にて南嶽下八世の法孫である

鄂州の牧主が師をその衙内に請して夏安居をして貰ふたので、一日牧主が陞座

を願ひたれば今の垂示があつたので、その鐵牛とは陝州に河を守るが爲め鐵の牛

を造り頭は河南に尾は河北に向ひて如何にも廣大なもの廣大であるから動きも

しなれば流れもせぬ其んなら丸て死牛かといふに河を守て居る然らば活牛か

といふに動きもせぬ之が即ち鐵牛の靈機ともいふべきものである

今日は城中に於ての上堂で禪師に於ても天晴である祖師の心印とて達磨や六

祖などの心印といふ事ではない祖師方の認得せられた心印であるから祖師の心

印佛陀の認得せられた心印であるから佛心印である其實は人々具足の心印であ

る同案常察の十玄談に心印を頌して

問君心印作何顏

心印誰人敢授傳

歷劫坦然無變色

呼爲心印早虛言

須知本自虛空性

將喻紅爐火裡蓮

莫謂無心便是道

と云はれた歷劫坦然として變色無きこの心印は何んなものであらうかその状態

を假りに形容して見やうなればまあ鐵牛の靈機を見た様なもので靈機といふも

實は虛言心印といふも早く虚言である何故かといふに元來虚空の性であるから

のこと去ればとて無とも云はれぬ有とも云はれぬ有無の兩邊に墮ちぬこの心印

である

又心を以て印といふは宗鏡錄の中に佛祖ノ法中ハ皆心ヲ以テ印ト爲シテ萬法

ヲ指定スとある達磨は諸佛の法印と云はれた法は心であるから法印は即ち心印

である世の中に於ても間違ひのなき爲に實印を捺す出世間に於ては心法を以て

一切の萬法を印定すると決して間違ひはない故に森羅萬像十界三千の諸法は皆

一心の所現であると印定するので之には何んな事があつても間違ひがない今日

の上堂はこの心印に就ての穿鑿である

▲針割不入　チツとも透間がないから、針一本も通りはせぬ、とは何の事ぢや、非思量の鐵牛ぢやもの、心意識も念想觀も近傍することはならぬ

●去即印住　只この心印空かとすれば即ち色である、無であるかとすれば即ち有である、去かと思すれば即ち來で、チャンと安住不動である、而も歷劫坦然として無變色である

●鼻孔ヲ拽廻ス　目にも見えず耳にも聞えずこの心印であるから、去て痕なきものかと思すれば、歷然分明である、之を譬へて見ると、臂を掉て去らんとするものをば、鼻孔を引返して去らせぬやうなものであるとの事

●住即印破　只この心印孤明歷々露堂々ならば、之を把住し、之を捕捉するところが出来るものかといふに、向はんと擬すれば即ち背くといふ様なもので、三世十方に求むるも遂に不可得て百雜碎である、謂ゆる色即空ぢや

●脚跟ヲ截斷ス　住かと思すれば無所住であるから、脚下を截斷せられた様なものである

●只如不去不住印即是 印するとは印定するの義である、不去と印

定したものであらうか、不住と印定したものであらうか、若し不去と印定すれば即ち觸れ、不住と印定すれば即ち背くので、兩頭共に是非得失を免かれない、故に背觸去住に涉らぬ所が即ち天真自爾法爾法然の心印である、正當この心印は是非得失、背觸去住を超脱して居るから印するの、印せぬのといふことはない、その無き所に有りさうに空處を拵へて、學人を試験するのが、祖宗門下の方便である、師家爲人の畏である、此の畏にかゝる者は未だ心印を知らぬもの、此の畏にかゝらぬ者は心印を領じた者である

▲泥裏ニ土塊ヲ洗フ　何だかドウもハッキリとせぬ言ひ分である、如何にも詞が濁って居る、濁りなき所に濁らせて見せたのが正師家の探竿影草である

●時有廬陂長老出問云某甲有鐵牛……印　長老とありはすれど、實は沙彌にも劣れる坊様らしい、何故かといふに、如何にもエラさうに、某甲に鐵牛の機が御座ると申しては出たが、何うして鐵牛はさて置き、泥牛の機もありはせぬ、風穴禪師の空處をも知らず、印不印の語脈に轉ぜられて、何うぞ印を押して下さいますなと

は何事である。此んな権横の中へ否鼠の中へ這入た奴ならば、モウ獲の中の鼠で、到底風穴と相對の問答は出来ぬ、惜いものぢや

▲宛モ逆水ノ波有リ　いや某甲にと躍り出た所はドウやら逆波の勢ひがあるやうぢやと、盧陂を弄ったのである

●穴云慣釣鯨鯢澄巨浸却嗟蛙步驟泥沙　從來の讀み方では意味が能く分らぬ、萬松老人評唱の従容録には

●慣釣鯨鯢澄巨浸却嗟蛙步驟泥沙　と斯ういふ様に訓點がつけてある。此の訓點が適當のやうに思はれる。鯨鯢は大海に横はる大魚である。巨浸は大海の義である。驟は馬の泥水に浴するといふ意味の字、今は蛙の泥潭にベタ／＼と歩いて居ること、その底意は、今日は大海に澄んで居る鯨鯢を釣る考へにて、鐵牛の餌を投じたにも係はらず、泥水の中から蛙どのが餌に掛つて來たのは如何にも嗟かましい事である。存外の落膽であるぞと頭ごなしにやり付られたのである

▲引魂幡子播氣袋　引魂幡とは招魂の幡といふこと、播氣袋とは死骸の事である。風穴どの何程活かさうと思ふて世話をやかれても、最早冷たくなつて居るか

ら活かへる様なことはあるまい、されど招魂の幡子を以て呼回さうとせらるゝのは、風穴の慈悲心である

●陂佇思　佇はタ、ズムと訓ずる。風穴の爲に酷くやり込められたものぢやに依て、進退維れ谷まり、尤て有氣息の死人の如く、泥に捲かれた蛙の如く、目ばかりパチ／＼としてウンともスンとも云はず、愚圖／＼して居る

▲已ニ鬼門關ヲ過グ　最うどの様にした所で、息を吹きかへす見込はないから、死亡届を出した方が宜からう

●穴喝云長老何不进語　この喝といふことを日本の人が誤つて大聲にカーツと叫ぶ否、無學の禪坊主が問答などの時、大きな聲で以て喝と云つて居る。これは丁度無學の雲水が上來は是れ予が莫妄想、如何か是れ佛法の大意と叫び、田舎寺の和尚が句雙紙を復して死者の引導法語を唱ふる時、眞面目になつて、自から良久して云くと云つて居ると好一對の話してある。今後の若い衆はよく心得て置かねばならぬ。風穴は尙も慈悲の手を下し、何うぢや長老何で黙つて居るのである。若し鐵牛の機があるならば、何とか云つて見よと大喝一聲せられた

▲已ニ崖岸ニ臨テ更ニ一推ヲ與フ 今の一語は切り岸から千尋萬丈の深谷にツゝと突落された様なものである

● 陂擬議 易の繫辭に之を擬して而して後に言ひ之を擬して而して後に動く擬議して以て其變化を成すとある故に擬議すとは心の中に言はんとして口を開くことの出来ぬ有様を形容したのであるツマラヌ男ぢや

▲ 許多ノ時節甚レノ處ニカ去來ス 何度も風穴にせり詰められて口を開く事が出来ぬ様ぢやが主人公は何處へ往つたのであるか長老の靈機は畢竟那邊にあるか

● 穴打一拂子云還記得話頭麼試舉看 風穴の勢ひはすさまじいものぢや手に持て居られた拂子を以て、陂の肩をピシヤツと一打し長老は最前老僧に向つて何と云つた某甲に鐵牛の機があると云つたてはないか最うその話頭を忘れたのか何うぢや最う一度言つて見られよと却々キツイ

▲ 人ノ爲ニスルハ爲ニ徹ス人ヲ殺シテハ血ヲ見ル いかさま徹骨徹髓の爲人である此位ならば肝にこたへるであらう風穴が留めま

てさゝれたのは親切なものぢや

● 陂擬開口 試みに舉げて看よと云はれたものぢやに依て何とか言はねば濟まぬかと口をモチ／＼して居る

▲ 猶ホ自カラ焼埋ニ伏セス 兎に角息は絶えた様なけれどまだ胸の處に一點の暖氣があるものぢやから焼きもせず埋めもしなかつた口をモチ／＼して居る所を見るとまだ息の根がある様ぢや

● 穴又打一拂子 舉せよ看んと言はれたからとて言はせ様との催促ではない今となつて縦し口を開いたからとて迎も堪は明かぬ最う言はんでも分り切て居る言ふには及ばぬと云はぬ許りに言はうとする所をピシヤリ

▲ 仍ホ三十棒ヲ少ク 拂子で以てピシヤリては尙ほ手ぬるいよく氣息の絶えるまで殺して了ふがよい

● 牧主云佛法與王法一般 最前から傍より見て居た郢州の牧主は餘り長老の不首尾な様子を見るに見かねてヤアドウも今日法戰の様子は佛法と王法と少しも變つたことは御座らぬ如何にも爽快なことで御座ると評せられた

▲官ト做ルコトヲ會セサレハ傍州ノ例ニ看ヨ 自分が官位役儀の取扱が知れぬ時は隣國の掟に引比べて見る様なもので、牧主も佛法の事はよく分らぬけれど、今は王法に比べて佛法を批評せられたのである

●穴云見箇什麼 牧尙主も今日は却々キツイ、一般と云はるゝが何んな所が一般なので御座ると直に喰ッて掛られた

▲却テ好シ一拂子ヲ與フルニ 詞を答むるよりも、盧陂と同様に一拂子を與へらるればよかつたに、惜い事ぢや

●牧主云當斷不斷返招其亂 王法の裁判でも人情を入れずに極め處を確かり極めなければ、後で返して不平が起ります、故に官には針ほどでも法を枉げませぬ、今貴僧のやり方が夫れと同じで、人情を交へず、法を枉げられぬ所は、全く王法と佛法と一轍である、と存するので御座る

▲自カラ罵リ自カラ招ク 人から罵られるしも、下から不平が起つて来るのも實は自罵自招で人わざでないから、佛法に於ても、王法に於ても、私を交へてはならぬ

●穴便下座 不充分ではあるが、チヨと便宜を得られたから、程々にして休し去られたのである

▲意ヲ得ルコト濃ナル時正ニ好シ休スルニ 如何にも思ひ存分に法令を行ぜられたから、まあ此處らで休めらるゝも宜からう、さうでない、と際限がないから

頌云

鐵牛之機也 未吼印住印破 在手 透出毗盧頂顛行 將上却來化佛舌
頭坐有匹下 風穴當衡 冷世情看 盧陂負墮 高面透 棒頭喝下 豈容電光
石火消停 歷歷分明珠在盤 不自撥 眨起眉毛 還蹉過 便打

●鐵牛之機 此句と下の句と、二句で以て本則の骨髓を拈起、頌出せられたのである、拈起して置て第三句以下に風穴禪師の眞精神を讚嘆し、盧陂や牧主を評論しやうとの底意

▲哮吼スヤ也々未シヤ 諸人何うちや鐵牛の聲を聞いたか、まだ聞かぬかと一拶を試みられたのである。鐵牛の何物たることを知つたら其聲もおのづと聞えなければならぬ、鐵牛の聲、あゝ鐵牛の聲、天地に響き、古今に亘る。

●印住印破 鐵牛の靈機は不生不滅、不常不斷、不一不異、不來不去であるから去れば即ち印住し、住すれば即ち印破すと拈提せられた斯ういふ言句は風穴禪師に依り始めて聞くことを得たので、空前絶後の新機軸である。

▲鈎錐手に在り 鈎はカギであるから引くことを意味し、錐はキリであるから推すことを加味したもの、引くも押すも自由自在なものぢや、風穴ならばこそ斯くも思ふがまゝに鐵牛を把住放行することが出来るのである。

●透出毗盧頂額行 毗盧とは法身毗盧遮那佛のこと、この佛は法界に周遍して居らるゝから、遍一切處と申すのであるが、斯ういふては教者法師の句調で禪僧家の言句に背く、毗盧は即ち法身上正位一色の當體である、空王那畔の眞實體である、鐵牛の靈機はこの本來無物の處にも住著せぬから、毗盧の頂額を透出して行くと申されたのである、古人が毗盧頂額を慈過し來れと云はれたのは、光明徧照の

處にも住するなと示されたので、毗は徧の義、盧遮那は光明照すの義である、趙州禪師が老僧は明白裏に在らずと云はれたのも、亦光明裏を出頭するとのことを意味したのである、大智慧光明遍照法界、教相門ては此處を眞如界とも涅槃界とも、極樂世界とも、光明世界ともいふので、此處には誰も隱遁したがるのであるが、長安樂しと雖も久居すべからず、坐著すれば不可である、この絶對無限の頂額をも慈過し去て更に向上非佛の大路に歩むのが鐵牛の靈機であるとのことぢや。

▲將上足らず 雲門禪師の廣録を見るに、師或時拄杖を拈じて云く、且く這裏に向て會するも也、た利益あり、也、た利益なし、總て會せずんば佛性を顯現し眞如を備伺すと代て云く、匹上足らず、匹下餘りありとあり、又文選の十三卷に、以て上に方んとすれば不足、而も下に比するに餘り有りとある、此等の意味を適用して此の著語を下されたので、今の底意は、天童は毗盧頂額を透出して行くと云はるゝけれど、萬松の眼から之を見ると、まだ何うも物足らぬ様である、まだく見地が低い様に思はるゝと更にその跡を拂はれた。

●却來化佛舌頭坐 前句の透出は印破、今句の却來は印住、印破印住は向上向

下である。毗盧は法身佛といふから頂額といふたもの化佛は劣應身といふから舌頭と文字を巧みに應用せられたまでの事、其實は正偏回互の見地を示されたのである。透出は上り詰めること、却來は下り切ること、向上那邊は實智にして、向下却來は權智である。向上は知門、向下は悲門である。知門に於ては無言無說無示無識、悲門に於ては舌覆大千、入語言三昧ともいふべきもの、即ち横説縦説して衆生を誘引するものが却來化佛舌頭坐である。

斯様に夫れ入ては幽玄の底に徹し、出ては三昧の門に遊ぶのが風穴の謂ゆる鐵牛の機である。あゝこの鐵牛の機、天下の衲僧、四海の禪者、如何に之を台取いたるか、咄▲匹下餘りあり。此れは前句を割て用ひたので、仰いて上を見るも無限絶對であるけれど、俯して下を見るも亦無量無邊である。仰げば彌々高く、鑽れば彌々堅しとは鐵牛の靈機である。即ち上にも匹べ物がなく下にも匹べ物がなく。

●風穴當衡 衡は權衡と用ふる文字にて、衡はハカリのサホである。今日風穴和尚が鐵牛の權衡を握て天下を秤定し、輕重を印定せらるゝのであるから、如何な者が出て來ても頭を持ち上げることは出來ない。縱ひ三世の諸佛歷代の祖師が出頭

し來ても如何ともすることは出來ない。此處が夫れ佛祖位中に太尊貴生なる祖門屋裏の法王法である。

▲世情冷暖ヲ看ル 此れは明心寶鑑の省心篇にある句にて、夫を今前後に割て用ひられたのである。世態人情にて冷暖を自知するが如く、風穴は盧陂長老の五臟六腑までを能く見分て居らるゝから、殺すも活すも自由自在である。

●盧陂負墮 如何に機敏なもので、頭の上らぬ所であるのに、猪口才な盧陂長老が負墮とまけて、失敗を取たのは當然の事である。

▲人面高低ヲ逐フ 人物の價値は大抵面付て分るものぢや、風穴はモウチャンと盧陂の一言下に於て見て取られた。

●棒頭喝下 イヤ何うも風穴禪師が盧陂長老を打たり喝したりせられた時の様子を形容して見やうならば……

▲豈分説スベケンヤ 何うして……正令當行の時、一言一句たりとも分別解説することが出來やうぞや

●電光石火 まあその機敏な所は閃電光擊石火とでもいふべき所のもの

あらう

▲消停ヲ待タズ

何うして瞬きする暇もない

●歴歴分明珠在盤

歴々とは列次也とも枚々也ともある明珠を盤の中へこ

ろがすと、コロ／＼コロ／＼と走ッて一所に住まらないうが、鐵牛の靈機を運轉せらるゝ風穴の手際は如何にも没蹤跡斷消息である、之が即ち回互宛轉の妙ぢや

▲撥セサルニ自ラ轉ズ

手を付けないでも自然に轉展自在である如く、空末の分別を用ひざるも、機に應じ變に隨て、轉々自在であるとは風穴を讚嘆せられたのである

●眨起眉毛還蹉過

眨起眉毛とは、眉を動かして眼を眨かすこと、即ち眼を眨

かして見やうと一念そこに分別すれば、モウ何時の間にか過ぎ去て見ることは出来ぬ、之が即ち衲僧家の本分風穴の鐵牛機である

▲聲ニ和シテ便チ打ッ

蹉過といふも尙是れ遲了八刻とこれは天童の言句に付き廻らぬやうにとて萬松老人の三十棒此の三十棒は實に徹骨徹髓の大慈悲心である

此の公案は終始祖師の心印、否吾人の心印に就ての靈機發轉を開示せられたものである

第三十則 大隨劫火の話

示衆

示衆云絶諸對待坐斷兩頭打破疑團那消一句長安不離寸步太山只重三斤且道據甚麼令敢恁麼道

●絶諸對待坐斷兩頭……消一句 學人修行の要は、あらゆる對待差別の見

解を摺り潰して絶對平等の大道に優歩しなければならぬ、その對待とは迷悟凡帶有無得失である、又生死涅槃菩提煩惱の兩頭をも陥み潰して仕舞はなければ萬象之中獨露身とはならぬ、この獨立無伴獨尊無二の境界になれば最早淨裸々赤洒々で、従前の疑團分別は、おのつから打破せられて、妄想の住家とする窟窟が無く

なるから、那ぞどうして四の五のと言半句の無駄言を消費するには及ばぬけれども其の對待と兩頭とを備等が心の中に存在して居るから止むなく千言萬言を費さねばならないのである

●長安不離寸步太山只重三斤

長安は支那の都、太山は同く五岳の一である、

その長安は眞如法性の帝都に譬へたもの、太山は功德莊嚴の寶山に喻へたもの、帝都ちや寶山ちやといへば遠大な様にも聞ゆれど、其實は寸歩を離れずして帝都の眞中に獨坐して自からが法王身になつて居るので、この寶山も手の中に在て自由自在である(三斤は軽いこと)

●且道據甚麼令敢恁麼道

さあ随分大きな話してあるが、全體これは何の様な法令があつて斯ういふ事が云はるゝのであらうか、分らなければ本則に就て見るが宜い

本 則

舉僧問、大隨劫火洞然、大千俱壞、未審這箇壞不壞、愁人莫向隨云、

壞早是那堪、僧云、恁麼則隨他去也、日前隨云、隨他去、下坡不走僧問、龍

濟劫火洞然、大千俱壞、未審這箇壞不壞、同病濟云、不壞、打破契頭

僧云、爲甚不壞、又恁濟云、爲同大千、鑄成

●舉僧問、大隨劫火……壞不壞、この僧の問意は、仁王護國經の佛説に依り

ますると、この宇宙間は皆無常なもので何も彼も皆一旦は滅盡に歸して仕舞ふといふ事です、即ち三災壞劫の時にはこの宇宙乾坤が大火災の爲に焼け盡て洞然と空界無物になるさうです、三千大千界といへば廣大無邊なもの、様ですが、それも皆黒灰となつて風災と水災との爲に吹き散らかされて取留もなくなると云ふてあります、其時には一切の有情も無論無くなるてありませう、サ、其時この道箇は何なるものでありませうか、這箇とは何てあらうか、佛性であらうか、靈魂であらうか、又は自己であらうか、平凡の問端である様なれど、言中に響がある、壞か不壞か、貴僧の御料簡が承りたいと參問したのである

▲愁人愁人ニ向テ説クコト莫レ、問話の一僧も愁人ではあるが大隨も亦愁

人である、這箇の一事に就ては大隨も幾星霜か愁歎しつゝあるので、未だ曾て涙の乾く暇がないであらうと思はれる、其處へこの話しを持掛られては堪まらないからマア止しにしたが宜いではないか。

●隨云 坡 この僧は一物を珍重して居るから夫れを放下せしめんがため、無くなるともくく 微塵毫髪ばかりも残るものはない、空々大空畢竟空となるワイと云はれた

▲早ク是レ何ゾ堪ン 愁人の大隨も堪まらないから直下に殺人刀を放擲せられた、僧も亦此の様に驀直に放出せられては堪まらないであらう

▲僧云 恁麼則隨他去也 この僧は一斷一常の見に墮して大千は無常であるが、這箇は常住であると思つて居たものと見え、夫れではこの這箇も大千と同じく壞滅に歸するのでありますかと語に依て解を生じ、大隨の宗乘を聞き損つた

▲目前ニ驗ス可シ この間拔野郎、去るか去らぬか人に問ふに及ばぬ、自分でよく點檢して見たらば宜からう

▲隨云 隨他去 勿論のことである、何處くまでも一物を放下させたいとの

爲人と見える、正位は本來空界無物

▲下坡ニ走ラズ更ニ一推ヲ與フ 坡の下で乗込まねばならぬ所であつたけれどツイ乗外れて恐圖くして居る者ぢやから、是非乗らせて遣りたいとて、夫れ何を恐圖くして居るのぢやサア乗込まぬかと、更に一推を與へられた坡はサカで、堤の下り口で船の乗場處である

●僧問龍濟…… 坡不壞 大隨は益州法真禪師のこと、龍濟は修山主とて雪竇と同時代の人である、この僧は別僧でなく、矢張大隨に問話せしものにて、何うもまだ大隨の坡と答へられた落處が分らぬものぢやから、再び龍濟に前話を持掛たものらしい、この僧の思ふに這箇は何處くまでも不壞なるものぢや、夫れを壞滅すると云はれては經意に背くと、教相言句にへばり着て居るので、この再問に及んだのである

▲同病相愛フ 萬松老人はこの僧を別人と見られたものと見え、是も亦前僧と同じ病氣ぢやワイと評された

同僧であるか別僧であるかハッキリしないから、其處は人々の見るに任せて置

さませう、同僧でも別僧でも其んな事に重きを置くの必要はない、只公案の宗乘
を見るが肝要

▲濟云不壞 夫れは何うして萬劫不生不滅ぢや、壞して堪まるものか、從劫至
劫三世常住ぢや

▲契頭ヲ打破シ鼻孔ヲ振轉ス 此僧若し別人であつたとすれば壞滅の斷見
であつたかも知れぬ、それを慈頭に不壞とせられたのは分別の固まりを打破し、鼻
孔の向け方をねぢもどされたのである、設ひ同人であつたにしても、この不壞は大
千に同じき不壞であるから、矢張その妄見を打破されたのであることを知らねば
ならぬ

▲僧云爲甚不壞 若し同人と見れば大隨は壞と云ひ、和尚は不壞といふ、その
不壞なる意旨が聞きたいとのこと、別人ならば此僧まだ不壞の形段が見えないか
ら、更にその宗旨を問ふたのである

▲又恁麼ニシ來ル 壞の時は壞の宗乘があり、不壞の時は不壞の宗乘がある、
問話の僧はそれに氣が付かぬものぢやから、まだその言句に轉じられてシツコイ

のである

▲濟云爲同大千 大隨の隨地去も意表外な答て、此僧の爲にはあつたが、是も
亦一層意表に出た答へといはねばならぬ、何故かといふならば聞かせてやらう、そ
れは大千界に同じいからぢや、丸て仁王經の文句とは措り違うて居る、何故であら
うか、趙州も有時は無と答へ、有時は有と答へられた、その有無は有無の有無ではな
く、有無を超えた有無である、今の壞不壞もその通りぢや、壞も這箇の當躰、不壞も亦
這箇の當躰ぢや、もの、禪僧門下は頂門に眼を具して、篤とこの壞不壞を研究徹見し
なければならぬ

▲生鐵鑄成ス 生鐵をば幾度もフヒゴにかけて打て、鍊へた不壞ぢやよつて、
齒も爪も立つものではない
壞の當躰から見れば萬法空寂にして一法も不可得である
不壞の當躰から見れば森羅萬象歷々分明にして嶢嶢羅列

頌云

壞不壞 佛手揀 隨他去也 大千界 沒量大人語 句裏了無鉤鎖機 粘
 帶齒亦 脚頭多被葛藤礙 誰教爾生 會不會 心忙 分明底事丁寧
 是非者過 知 心拈出 勿商量 牙人見 輸我當行相買賣 販楊州
 非日月谷

● 壞不壞

大隨の壞と龍濟の不壞と只言説のみあつて實義がない様ぢや、そ
 は何故であらうか、壞といふも世間普通の壞でなく、不壞といふも通常の不壞でな
 いからのこと、この壞不壞は祖宗門下の別傳である故高く着眼すべきである

▲ 佛手モ揀ビ出サズ

壞も壞でなく、不壞も不壞でないから、イカナ佛手でも、
 これは壞である、これは不壞であるとして、儘に揀び出すことは出来ないであらう

● 隨他去也 大千界

三千界と壞不壞とは共に隨他去である、この一句で二老
 の公案を拈出せられたので、手際は尤妙

▲ 沒量ノ大人モ語脈裏ニ轉却セラル

格外過量超宗越格の大人でも、二老の
 語脈裏には轉却せられ易い、彼の二僧が轉却せられたのも道理であるが、即今諸人
 者は何うであるな

● 句裏了無鉤鎖機

併しながら二老のお手前では、別に他をして困まらして
 やらう、鉤鎖とひつかけてやらうといふ、料簡があるのではない、眞語實語、正直に申
 された少しも飾り氣のない話しその通りに會得し、さへすればよいのだ

▲ 牙ニ粘シ齒ニ帶ルコト少ナカラス

何うも二僧を始め天下後世の者が、二
 老の宗旨を會せぬ者ぢやに依て、この壞が牙に粘り付たり、不壞が齒に挟まつて、ゲ
 ット呑込めぬものと見え、何時まで立てもサツパリとしない様ぢや

● 脚頭多被葛藤礙

二老の手前は固より人を鉤鎖する積りはないのぢや、け
 れど、二僧を始め天下の雲水共は、壞不壞の言句が葛藤となつて、超脱自在の出身が
 ない様ぢや、直下に會得すればその葛藤の根元が截断せられて了ふ

▲ 誰カ爾ヲシテ枝ヲ生ジ蔓ヲ引カシメン

決して二老の咎ではない、聖師せ
 らるゝ者の咎で仕方がない

● 會不會

二僧并に天下人は、兎もあれ、即今我が天童座下の者は何うちや、會
 か不會か、合點が出来たか、できなにか、若し會といへば天地懸隔、不會といへば自雲
 萬里ぢや

▲心忙ハシク手急グ あんまり騒ぎ方が殿しい様なワイ
●分明底事丁寧 實にハヤ隨濟二老はその胸懐を鞏固せられて、汝等がた
めに少しも隠しなく、丁寧はその真情實語を吐露せられたのである

▲是レ盲者ノ過ニシテ日月ノ咎ニ非ズ 夫れほど眉毛を惜まらず、丁寧に赤心
を吐露せられたものを、會得ができないのは盲者の日月を見ぬやうなもので、二老
の咎てはなく、學人の咎である、汝等の過ちである

●知心拈出勿商量 二老の心イナその宗旨を能く知った者があるならば、何
も兎や角と、この壞不壞を拈出して、高イの低イのと商量するには及ばぬことであ
るけれど、知らぬ者が多いから是非もなきことぢやとの歎息

▲牙人販子ヲ見ル 牙人とは賣買仲間のこと、販子は商人のこと、知つた同志
の仲は別に六ヶ敷い話しは無用である

●輸我當行相買賣 併しながら我が天童の店は強て勸めて賣り出さうとは
せぬ、當行とアタリ價に買賣して置くから、不分明で疑ひがあるならば此方へ還し
て了まへと諸人をして自から承當せしむる手段である、謂ゆる騙耕夫、奪飢人食

とはこの事であると知らねばならぬ

▲堂屋裏ニ楊州ヲ販グ 楊州は千里も遠方のこと、天童はチャンと我が店に
坐しながら遠方の代物まで自由自在に販賣して居らるゝ、實に無盡藏の本店であ
るワイ

第三十一則 雲門露柱の話

示衆

示衆云、向上、一機鶴沖、香漢、當陽、一路鶴過、新羅、直饒、眼似、流星、未
免口如匾檐、且道、是何宗旨、

●向上一機鶴沖香漢 すべて祖門下の宗乘は非常に氣高いので、釋迦も達磨
も手の附けられぬ所にある、故に向上の一路千聖不傳とも、萬機休罷千聖不傳とも
申すのである、その不傳不携の一機に承當するのが祖宗門下の第一義である、その
一機たる、丁度鶴の背漢とて、大空に飛去たやうなもので、頓と蹤跡が見えない、蹤跡

が見えないとは、分別思量の及ばぬことである。さうかとして木石の様に無神經かといふに、却々其んなものではない。ドウして

●當陽一路鷓鴣過新羅 當陽は南面若くは目前底といふほどのことにて、上の句に對すれば向下の代名詞である。盡虚空に於て没蹤跡の那一機ぢやもの、盡大地に於ても亦斷消息の那一機である。この那一機の敏活なることは、恰ながら鷓鴣の新羅國を過ぎ去つた様なもので、脚下線絶て百自由ぢや

●直饒眼似流星未免口如圓楡 斯うも素疾い玄機ぢやもの、よしドの様にも眼光が流星の如く速疾であるにもせよその口が富樓那の如く流辯であるにもせよ、到底への字口で黙るより外に仕方のあるものではない。何故かといふに、最早口を開けば第二第三ぢや、大智和尚は從來妙唱不干舌と云はれ、南岳大師は説似一物即不中と云はれた

●且道是何宗旨 さてこそ夫れはまたドンな宗旨であらうか、我宗は默に宜うして説に宜しからずであるから、達磨大師も九歳の長き間寥々として少林に冷坐し、黙々として正令を全提せられたのである。だが雲門大師はその無語中に於て

有語し、無舌にして解語せられた、それは本則に就て見ると判つて来る

本則

舉雲門垂語云古佛與露柱相交是第幾機 落七落衆無語柱却與露柱自代云南山起雲北山下雨 李張翁喫酒

●舉雲門 第幾機 古佛とは何んな御面相であらうか、今佛ならば御面

相を拜むことも出来るけれど、久遠の古佛で過去に属するので、チツトも蹤跡が知れない、知れない筈ぢや、向上の第一機であるから、露柱は今時徧界不付藏である、向下却來の那一機である、この久遠と今時、古佛と露柱とは、共に手を携へ足を交へて、前歩後歩、夜半正明、天曉不露、回互宛轉の全機大用を具して居る、是れ第幾機ぞ見んと要せば、白雲萬里、踏まんとすれば、天地懸隔、言ひ得るも三十棒、言ひ得ざるも三十棒を免かれない

▲七ニ落チ八ニ落チ了レリ 一機か二機か、何うして、雲門和尚、足下は吾

宗に語句無く一法の人に與ふるなしと云はれたこともあるのに、今はまあ何のザマぢや、其んな無駄口を利かるゝものぢやから、モウ七にも八にも落在して了ったワイな

●衆無語 擬議分別に涉るから口が開けないのである。若し情識を離れたならば、何んなことでも云へる

▲却て露柱と同參 その無言こそ露柱と同様で可いやうにもあるが、また餘り賞めたものでもない

●自代云 南山起雲北山下雨 之が古佛と露柱と交參した大機大用といふものである

▲張翁酒ヲ喫スレバ李翁醉フ 飲だ者が酔はないで、飲まぬ者が酔ふとは何うしたことであらうか、それこそ二人行く獨りはぬれぬ時雨かなぢや、二人行けば必ず二人ぬれるに極って居る、張翁が酒を飲めば張翁か酔ふ、李翁が酒を飲めば李翁が酔ふ、南山に雲が起れば南山に雨が降る、北山に雲が起れば北山に雨が降る、之が函蓋合し理應ずる端的ぢや、何も不思議なことはない、影略互顯の詞ぢや

頌云

一道神光上柱天 初不覆藏淨保保 超見緣也是而無是 烈火熾中
出情量也當而無當 莫劍輪鋒外 巖華之粉兮蜂房成蜜 神通野草之
滋兮 麝臍作香無方 隨類三尺一丈六柱山高峯山低 明明觸處露
堂堂無處迴避門

●一道神光 先づこの古佛と露柱との交參の靈機たる一道の光明は、威音より今日に至るまで、盡十方を照破して、遍界不曾藏である、そは何んな光明であらうか、着衣喫飯行住坐臥、高處は高平に、低處は低平に照して居る

▲上天ヲ柱へ下地ヲ柱フ この光明は何うして、無限の時間を通貫し、無限の空間に充塞して、針をツク程の餘地もない

●初不覆藏 これはモウ今に始まつたものでない、威音の前より、空劫の後まで、遍界不曾藏、明歷々である

▲淨傑々赤濕々 眞傑て微塵ほどの隠しもない

●超見縁也是而無是 盡界一枚の光明であるから固より見と見縁とを超越して居る超越して居るから能見と所見との差別がない能取光所取光と云ふ様に能所の差別があれば必ず是不是の沙汰もあるけれど已に無差別無礙光であるから是不是を超越して居る

▲烈火焰中眨眼スルコトヲ休メヨ 眩はマジロクと訓む四方八面悉く烈しき火焰の真中ぢや、ヂロツとマジロクことも出来ないぞなぜ眼を眩得すれば已に差過とある

●出情量也當而無當 情識思量を以て測度するときは當と不當とがあるけれど固より情量を出過して居るのぢやから當不當はない百發百中である

▲劍輪鋒外ニ頭ヲ廻ラスコト莫レ 劍や鋒をぐるぐると廻せはマン丸き輪の様になる其處へチヨツトでも頭を出したならば直に切り落されて仕舞ふその通りチツトでも情識の頭を出したならば演若多の如く直に頭を失うて仕舞ふ

●巖華之粉兮蜂房成蜜 さてその見縁を超越情量を出てた妙用のことを雲

門は南山北山を以て形容せられたが天童には又別にその形容詞がある彼の巖間に生てある無毒の花に蜂がたかつてその色香を損せずして味を探り、それで以て清潔なる蜜を成して居るこれは實に無作の妙用である又文殊の智慧ともいふべきである

▲神通廣大 彼の蜂が巢を造り蜜を成すまことに廣大無邊なる神通自在の力である人々もその通り手に在ては執捉し足に在ては運歩す神通にあらずして何ぞ

●野草之滋兮麝臍作香 また彼の麝獸といへる動物は野邊の草葉にある露を嘗めたり香氣を食ふたりしてあの匂ひよき香氣を臍の中に生ずるのであるこれも亦蜂が花の香を探て蜜を拵へると同様實に無作の妙用であるこれが古佛と露柱との同参した様子である

世に麝香といふものあるはこの麝獸より取れるものにてこの麝獸は支那の商女山中に澤山住んで居るといふ事ぢや彼れは天性非常にその臍を愛するものであるから今こゝに麝臍と云はれたのである

▲變化無方 千變萬化自由自在なものぢや

●隨類三尺一丈六 この古佛は神通も廣大である、變化も無方であるゆゑ、衆生の種類に隨つて、或は三尺とも見え或は丈六の金身とも見ゆるのである。三尺や丈六のみではない、千百億化身とも、三十三身ともなる。起信論などといふと、本覺照ととも云ひたくなる。なぜであらうか、イヤサ本覺は古佛ぢやもの、顯照は露柱ぢやもの

▲主山ハ高ク案山ハ低シ柱杖ハ長ク拂子ハ短シ 主山の後ろの山は高いし、案山の前の山は低い、脱體現成ぢや、柱杖は長いし、拂子は柱杖よりも短い、現成公案、隠すに處はない、遍界不藏ありのまゝぢや

●明明觸處露堂堂 イヤモツ南山の雲、北山の雨、岩下の粉、野草の滋、柳は緑花は紅、山は高く、水は長し、鐘はゴン、鼓はドン、鴉はカー、雀はチツ、見るもの聞くもの、觸處、古佛の全身、古佛の説法、古佛の莊嚴、古佛の光明、古佛の音聲である

▲面門ヲ拶破シテ廻避スルニ處ナシ 四方八面、天上地下、この古佛の應現で、

左轉右轉、築著、礎著、逃げ處はない、溪聲は便ち是れ古佛の廣長舌相、山色は是れ古佛の清淨法身ぢや

第三十二則 仰山心境の話

示衆

示衆云、海爲龍、世界隱顯優游、天是鶴、家郷飛鳴自在、爲甚困魚、止、樂鈍鳥、棲蘆、還有計利害處麼

●海爲龍、世界隱顯優游 大海はもと龍神の世界であるから、隱顯出沒は渠が心のまゝにて、優游自在ぢや、衲僧家もその通り、この法性海は己が心の世界であるから、出入自在で誰れとして、我の境界を束縛するものはない

●天是鶴、家郷飛鳴自在 蒼々たる天界も亦是れ鶴の家郷であつて、飛びはねるのも、鳴きまはるのも、渠が意のまゝぢや、その如く廣大なる第一義天は、吾人の本家郷であるから、向上するも、向下するも、我が意のまゝぢや

●為甚困魚止滌鈍鳥棲蘆 困魚とて困しめらるゝ魚は、魚て居ながら何うして彼の渺々たる大海の廣さに游がずして、滌の少し許りある水溜りに留まつて自由を得ないのであらうか、又鈍鳥のよい鳥は、鳥て居ながら何うして彼の蒼々たる大空に飛鳴することを知らずして、蘆の間などに棲むのであらうか、世の中の人もその通り、同じ眼横鼻直の人間て在りながら、法性海や第一義空に優游飛鳴することを知らずして、冥々暗々たる六趣四生に輪廻するのであらうか、これは蘆の糸を吐て自から巢の中に籠るが如く、自から分別妄想の糸に縛られて輪廻の不自由を感ずるのである

●還有計利害處麼 ソコで龍や鶴は何故自在の利を得、困魚や鈍鳥は何故不自由の害を招いて居るのであらうか、その利害得失を計り知る底の人があるか無いか、若し無ければ今日の公案に就て、之を見破するが宜からう

本則

舉仰山問僧甚處人 閉門僧云、幽洲人 明白山云、汝思彼中麼 恰待

僧云常思難處山云能思是心所思是境元來更立能所彼中山河大地樓臺殿閣人畜等物反思思底心還有計多般麼仁者自別僧云某甲到這裏總不見有這箇山云信位即是人位未是庭前殘雪日輪消僧云和尚莫別有指示否麼來山云別有別無即不中射透兩重關據汝見處只得一玄已有一瓶得坐披衣向後自看更添帆上風

●舉仰山問僧甚處人 これは師家尋常の探竿である、平凡の問ひの様ではあるが、言中に何となく響がある

▲門ヲ閉テ刷會ス 刷會は尋究の義にもなる、毎月一回づ、決算することにもなる、仰山は此僧に決算させて、出入を明白にせらるゝ、積りと見える

●僧云幽州人 此僧は先づ實頭の漢と見え、脚下を探らるゝとも知らず、何氣なく有躰に白した

▲公驗明白 正直一片モウちつとも包み隠しはない

●山云汝思彼中廢　ソロ／＼と穿鑿を初められた彼中とあればとて、幽州の事でもあるまい、何うも薄氣味のわるい穿鑿ではある

▲恰モ忘了ヲ待ツ　何うか古郷の事は忘れたが宜い

●僧云常思　此僧は何處／＼までも正直坊と見えて、イヤ何うも古郷のことは忘れ様と思つても忘るゝ間がありませぬ、時々刻々古郷が懐かしう御坐ります

▲熟慮忘レ難シ　兎角何うも馴れた處は忘れられないものと見える、此れはまあ人情の然らしむる處である

●山云能思是心所思是境　その能く思ふ所のものは心にて、思はるゝ所のものは境である、大小の仰山震旦の小釋迦とも云はるゝ人が、餘んまり道理を説き過ぎらるゝ様ぢや

▲元來更ニ能所ヲ立ツ　元來能所なきに殊更ら能所を立てらるゝ、御丁寒千萬なことぢや

●彼中山河大地……有計多般廢　さて其の境の中には山河大地樓臺殿閣など種々雑多な物がある、物があるから其の所思は數多ある様ぢやが、その思ふ所

の心を反思と手前の方へ引き返して見たがよい、その時數多あるものか、但しはなきものか、篤と吟味して見たがよからう

▲仁者自カラ分別ヲ生ズ　仰山それは御邊の妄想ではないかのと、語は維摩經の觀衆生品、並に壇經に出づ

●僧云某甲到這裡總不見有　イヤ能々反思して見るに其んなものは一ツも御座りませぬ、心は萬境に隨て轉ず、轉ずる所實に能く幽なりとは此義であらう、だから流れに隨て性を認得すれば、喜もなく亦憂もなしぢや

▲猶這箇有り　とは云ふものゝ、未だ何か殘つて居るやうぢや、即ちその有るを見ないといふ一物がある

●山云信位即是人位未是　萬法空寂一念不生の全體これが初發心地の信位である、この信位は空々寂々であるかといふに、さうではない、之が即ち光明寂照遍河沙といへる眞如法性の妙體である、この妙體の眞味を得た人てなければ、その妙用たる三寶の住持はてきぬ、即ちこの信位は本來無物の正位である、又人位といふは萬象歷然の偏位である、即ち悟り了れば未悟に同じき元是眞體の平四郎である、

之を透過法身の人位却來の消息といふ、その信位丈は許せるが、まだこの人位の洒々落々たる境界は許せない

▲庭前ノ殘雪ハ日輪ニ消スベシ室内ノ紅塵ハ誰ニカ掃ハシメン「天註に凡情は盡し易いが垂解は除き難いとある、さうして又拾得より寒山に遣はす歌を引て

掃ふべき所もなきに箒掃をば持つ心こそ塵となりけれ

ところで寒山の返歌に

掃ふべき所もなしといふ塵を拂はん爲の箒掃なりけり

此れは固より後人が寒山拾得の心を詠んだものであらうが、随分面白くてきて居る、成る程煩惱障は除き易いが、所知障は何うも立派に掃除の出来ぬものである

●僧云和尚莫別有指示否 して見ると一半は許されたるも、未だ一半は許されない様である、されば其の許されない所に於て、別に御指揮を受くべきことが御座いませうか、有るならば御指示を仰ぎたいのですが……

▲便チ恁麼ニシ來ル いや萬松傍から見て居たが、大方其んな事を言ふであらうと想像の通りであつた

●山云別有別無即不中 別に有るとか、いや別にないとかどつちにしても夫れは中らない有無の二邊を透得したならば中ることもあらうサ

▲兩重ノ關ヲ射透ス いや仰山どの有無兩重の關所を一撃に射透して破られたな、氣味よい仕方ぢや

●據汝見處只得一玄 有無は且く措て兎に角其方は本來無一物の一玄だけは得たのである、それ丈は許してやる

▲已ニ缸中ノ月有リ 兎に角一玄を得たのは缸中で明月を詠めて居る様なもので愉快な所がある

●得坐披衣向後自看 已に一玄の最初は夫れでもよいがまだ、最後の那一着があるから、向後更に精細をつけて、行住坐臥回光返照の退歩を學するがよい、さうすると退歩承當地に新なる時節が来る

▲更ニ帆上ノ風ヲ添フ 缸中で月を詠めたは心地よき事ではあるが、一處に泊まつて居ては面白くないのみならず却て死地に沈むの憂があるから、更に帆を上げて順風に船を進む様に力を添へられたのである、此れは同安寮の涅槃城裡

尙猶危陌路相逢沒定期といはれた轉位の消息である

頌云

無外而容大包無礙而冲不入無門牆岸岸莫好關鎖重重不消酒常
酣而臥客喚醒飯雖飽而積農一坑突出埋却虛空兮風搏妙翅穿開碧
踏翻倉海兮雷送游龍月節二

●無外而容

先づ吾人の思想界中の廣大なることをいへば十方虛空に等しいものであるから大は山河大地日月星辰の森羅萬象を包容して狹まからぬ

▲大トノ包マザルコト無シ

大には方處を絶するところある

●無礙而冲 又吾人思想の極小なることをいへば藕絲孔裡にも自由に出入

▲細トノ入ラサルコト無シ

細には無間に入るとある是が夫れ須彌を芥子に入れ芥子を須彌に入れるといふ大の中に小を現じ小の中に大を現するので大

小圓融事理無礙法界の様子である

●門牆岸岸

是の如く夫れ大小圓融出入無礙であるにも拘はらず此僧の爲には何ういふものか到這裡總不見と頑固に門牆を立て切られて進退維れ谷まる事になつたこれは因魚が深に留まり鈍鳥が蘆に棲むのと同じ事である自から要めたのぢやから仕方がない

▲探頭スルコト莫クンバ好シ

探頭とは頭を突込むことぢや餘りに一念不生の玄中に頭を突込むものぢやに依て出頭することが出来ぬやうになるのぢや

●關鎖重重

何うも七重八重と關門を閉鎖せられたものぢやに依て寄ても付けぬ事になつた是れが夫れ當頭觸著す彌天の罪といふのぢや若し回光返照して退歩承當スレバ特地ニ新なる自由が利くやうになる

▲彈指ヲ消セズ

昔し彌勒は彈指して門を開いたといふが大道無門千差有路でこの關門は本から開いて居るのであるから彈指を消するにも及ばぬことぢや

▲酒常酣而臥客

いや何うも氣の毒千萬なものぢや彼の僧は信位といふ本

來空無の酒を澤山に飲んだものぢやに依てモウ醉倒れとなり、諸法實相柳綠花紅の我家を忘れて悟裏夢中の客舎に寝て居るのである

▲喚び醒シ來レ打タン 座下の者ども、彼僧を萬松の前に喚び醒して連れて來い、目の醒めるほど棒ごなしにしてやるとは、彼僧に托して座下に擗かしたのである

▲飯雖飽而積農 一玄といふ飯に飽いたは宜けれど、喰倒れになつて、回途垂手の活動がないから、農を積すて、遂に尊貴向上の悟空つぶしとなるのである

▲一坑ニ埋却セン その悟空つぶしをは一穴に埋めて仕舞ふて遣りたいな

▲突出虚空兮風搏妙翅 妙翅とは金翅鳥王のことぢや、妙翅が羽翼を伸ばせば八萬山句もあるといふ説、この鳥王が虚空に突出して風に羽打たしめたならば、度惠來勞ひである、丁度その如く、仰山も實は彼僧をして悟空裏を出頭せしめ、徧界不藏の中に翱翔自在ならしめたいとの慈悲心である

▲碧落ノ天ヲ穿開ス その勢ひならば、碧落の青天をも穿つて、天外に翱翔するであらう

▲踏翻滄海兮雷送游龍

さて又妙翅の搏つ勢ひに彼の滄溟海を蹴くり返し、雲雷が虚空に昇騰する游龍を送るが如く、性空世界の廣濶たる天地に遊化三昧を作さしめ様との爲人である、全體佛教者が厭世的であると云はるゝのは、尊貴に喰して、垂手回途の作用を缺くからの事である

▲蟄蟄二月ノ節 二月(舊曆)の雷を聞くと、彼の蟄虫が驚いて土中から出づるといふことぢやが、今は正しくその時節である、信位の中中に蟄伏するものは、仰山の謂ゆる得坐披衣の一語を聞いて醒覺しなければならぬ時節である

第三十三則 三聖金鱗の話

示衆云逢強即弱遇柔即剛兩硬相擊必有一傷且道如何廻互去

●逢強即弱遇柔即剛 我が祖宗門下に於ける作家相見轉身自在の活作用は、ドンなものであるかといふに、若し強者に逢ふた時は退身三步して弱者となり、若し亦弱者に出逢ふた時には、前進勇歩して強者とならねばならぬ、其處が即ち廻互宛轉殺活自在の妙用ぢや、コレは敢て祖門屋裏の消息ばかりでない、凡ての應接上

に於ても、この活作略がなくてはならぬ、謂ゆる笑ッて来る者には怒ッて係り、怒ッて来る者には笑ッて係るといふ程の、犯し難き大度量がなくてはならぬ

●兩硬相擊必有一傷 若も然らずして、コツプとコツプと相對し、茶碗と茶碗と出合たならば、双方共に傷がつく、夫れでは何うも面白くない、上下君臣男女夫婦、師資長幼、天地陰陽、水火賓主の互に其處を得て法、法位に住するは、煖と硬とが交換となり、強と弱とが回互すること、回互し交換するのが萬物の活動である、若し交參回互せずして一方に獨立したならば、必ず死物となる、鳥は兩翼あるが故に飛走し、車は兩輪あるが故に運轉する如く、祖宗門下に於ても、生死とか涅槃とか、向去とか向下とか、何れかの一方に傾いたならば、モツ動きはつかぬ、動きがつかなければ死物となる、悲むべきぢや、さあ何うしたものでぢや

●且道如何廻互去 さあどの様に回互したものであらうか、交參したものであらうか、それは今日の本則に就て、その様子を窺へば、そのつと其妙が悟り得らるゝであらう

三聖金鱗の話といへば、古往今來、天下の叢林に於て、有名なものぢや、立身の時

節、法職の本則といへば、大抵この本則に限られて居るほどで、沙彌童行に至るまで、諸誦して居る位なものぢや、されど其の宗乘を會得して居る者が何の位あらうか、實は覺束ない者が多い、今後首座にてもならうと思ふ者は、殊に注意すべき問話である

本則

舉三聖問雪峰透網金鱗未審以何爲食不待垂綸 峰云待汝出網

來向汝道三分話 聖云一千五百人普知識話頭也不識靈山授

目似今 峰云老僧住持事繁見應

●舉三聖問雪峰透網金鱗未審以何爲食 文字言句の教網は無論、説心説性の禪網をも透脱して、佛海禪河の邊量をも躍り出た金鱗活魚は、ソモ何を以て餌食としたものであらうか、如何に金鱗なればとて、斷食したならば、命根斷絶であるが、まさか言句葛藤の邪命食を食する譯にも行くまいし、無爲寂靜の正命食にも念懸

けぬもの、去りとて飲まず食はずにも居られない等法喜禪悅食などは疾くに見捨
てたこの金鱗サア何を飲食して日送りをしたものであらうか、人天の宗師定めし
御承知であらうから聞きたいものぢやと作家同志の出合はスサマジいものであ
る、雪峰はこの駿主間に對して何ういふ答へをせらるゝてあらうか

▲繪ヲ垂ル、コトヲ待タズシテ自ラ釣ニ上ル 萬松が傍より之を詠むるに、

三聖夫れ自身はエラさうに金鱗ぢやと名乗って出られたけれど、可憐乎萬松には
何うしても金鱗とは見られない、何故かといふに釣絲を垂れないのに御自分から
釣上げられて居る様ぢやと押へつけられた

▲峰云待汝出網來向汝道 ウーン夫れは易い事であるけれど、まだ和尚は透

脱無依の大網を被って居られるから、それを出頭して來られたならば、御挨拶を致
さぬものでもないがと、大きな網をかぶせかけられた、流石は雪峰禪師ぢや、

▲人ニ逢テハ且ク三分ノ話ヲ説ケ 言は十成を思み意は回互を貴ぶといふ
こともある、十分のものならば三分を説いて置くべきものぢやに、雪峯どのはヲト
説き過ごされた様ぢや

▲聖云一千五百人善知識話頭也不識 流石はまた三聖ぢや、人から網を被ぶ

せられ、夫れて愚圖くしては居らないピンとその網中より天外に跳り出て、何だ
ソナタは一千五百人の徒衆を接し、久しく天下に其名を知られた大善知識では御
座らぬか、その知識振って居る癖に、法中同志の物語だに分らぬとは氣の毒なもの
ぢやと、その勢ひは寄ても附けぬ

▲靈山ノ授記モ亦タ今日ニ似カズ イヤ何うも拈花微笑の授記も、今日の出

合には及ばぬであらう、三聖も三聖、雪峰も雪峰、顔々相對して中に影像が見えぬ
▲峰云老僧住持事繁 之が謂ゆる強に逢ては弱、即ち自て勝つといふ老將の

手段ぢや、餘りに三聖の鋒先が強いからスバツと身を轉じてその箭鋒を外された、
三聖は有らん限りの力を籠め、真正面から突込んだのであるが、スバツと身を換は
された途端に、空を突いてキョロリとした三聖の面が見たかつた、嚙ぞ面白かつた
であらう

▲腦後ニ腮ヲ見ル 腦後に腮を見て人觸犯し難して、この雪峰は一千五百人

の大將校だけあつて、勿々恐しい所がある、ウツカリ寄附くと飛だめに逢ふ

頌云

浪級初昇雲雷相送恨到天騰躍稜々看大用三拜禮燒尾分明度禹門急著華鱗未肯淹壑更有老成人不驚衆穩穩當當慣臨大敵初無恐視死如生泛泛端如五兩輕不審堆堆何啻千鈞重近觀高名四海復誰同棟天上介立八風吹不動怡似

●浪級初昇雲雷相送 支那の録州に禹門といふがあるこれは洪水の爲に人民が苦しむ故禹王が山を開鑿して海門に通じた所此處が何でも三級になつて居るといふ事ぢやまあ昔よりの云ひ傳へに鯉魚がこの三級を越て龍門に至れば必ず龍になるといふ支那の法螺話兎に角鯉の流昇りといふ様なわけで非常に勢ひのよきことを形容したものぢやこの鯉の逆昇りは毒龍の天上する時黒雲や天雷が其伴となつて相送るその様子は如何にもスサマジイものである
今三聖が雪峰に向つて問話するその勢ひは鯉の逆昇り雲雷相送るともいふべき

有様山鳴り谷應ふるともいふ實にスサマジイ禪機である

▲天ノ到ラザルヲ恨ム 三聖も作家ではあるがまだ胸中未穩在の所があつて第一義天にでも昇りたい精神があるさうな左もなければ此の問答は御無用である

●騰躍稜稜看大用 騰躍とはヲドリアガルこと稜々とは角ヒシ立ツて恐ろしげに猛烈なる意氣込を形容したものの實に山川海岳をも動搖するほどの大機大用である何うもソリヤ一千五百人の善知識話頭だも也た識らずと頭角を振り立てた所はと下の句に移る

▲速禮三拜 イヤ何うも天童の申さるゝ通り大機大用を具した三聖で萬松も三拜せずには居られないとなぶつた

●燒尾分明度禹門 鯉魚が龍門に躍り出て自から龍に化せざれば雷火がその尻尾を焼て龍とならしむるといふ法螺話がある今は天童それを適用して彼の三聖は慥かに尾を焼て禹門を度つた活龍ともいふべきである活龍であるそれ故にと次句に移る

▲急ニ眼ヲ著テ看ヨ 巳に禹門を度り越した活龍ぢや、愚圖くして居ると
彼を見ることは出来ぬ、見んと要せば急に眼を着けるがよい

●華鱗未肯淹蓋 華鱗とは光りかゞやくウロコのこと、蓋とは漬物桶の

こと、淹はヒタス、ツケル、シヅメルと訓ずる字、己れ華鱗のピカ／＼した活龍となつたればこそ、雪峰の爲に漬物桶の中へ淹けられなかつたのである、若し雪峰の綱にかけられて、飛出すことが出来なかつたならば、鯉の鹽漬にせられて了ふのであつたがまあ仕合せてある

▲更に侯黒有り 鯉の中へ淹けられ様として、淹けられなかつた三聖ばかりを大走ほめらるゝけれど、夫れよりも之を淹け様とした雪峰の方がまだエライぞ

●老成人不驚衆 以上は三聖を頌し、以下は雪峰を頌せられたのである、ドウも智仁勇の具備した老将であるから、三聖を見た様な大敵が挑んで來ても落付拂つたものぢや、自分が驚かぬのみか、衆人をも騒かさぬ、強に逢ては弱とスリと身を替して、老僧住持事繁と遣つて除けらるゝ様なわけ、流石は老成の人だけの妙が

ある
▲妥妥帖帖穩穩當當 いかさま天童の申さるゝ如く、雪峰の老成人は落付拂

つたものぢや
●慣臨大敵初無恐 小敵には却て謀略を用ひねばならぬこともあれど、モウ

久しく大敵と戦ひ慣れて居るので、最初からして少しも恐るゝことのないのは、老將の常である、三聖の如き大敵は無暗なことをせぬから、決して怪我をする様なこととはない、談判の上にて直に埒を明けるのは、雪峰の老手段であるぞと讚歎せられた

▲辱ヲ受ルコト榮ノ如ク死ヲ視ルコト生ノ如シ 辱められて怒り、死に臨む

恐るゝ様なこととは大丈夫の漢と云はれぬ、他の侮辱を以て之を榮譽とし、死に臨むも生と同じ様に思うて居るのが、眞の英雄豪傑である、雪峰は即ち其人ぢや
●泛泛端如五兩輕 泛々とはヒラリ／＼すること、五兩とは金の五兩の事ではない、竿頭に羽を以て作る風候の様なもの、又は紙で造つた風車の様な風の吹くに隨つて泛々とヒラリヒラリ吹き廻す所のもの、雪峰が大敵に臨んで轉身自在なるこ

とは五兩の輕々しい様なものぢや

▲遠ク觀レバ不審 其機に臨て變化自在なるところを遠眼に觀れば如何にも輕々しい様にも思はれる

●堆堆何管千鈞重 轉身自在の所は輕々しい様にもあるが又度胸のすわつた所は千鈞の弩とも云はふか萬鈞の大砲とも云はふか勿々三人や五人で動くものではない

▲近ク觀レバ分明 ところで能く近寄て見ればハッキリとそのウツ高い離かりした所が見える

▲高名四海復誰同 雪峰の義存禪師は斯ういふ筋の人であるからして、その高德名譽が四海五湖に聞えて誰一人として知らぬ者もなく、又此人に肩を並べる人もない

▲天上二月ヲ揀ブ 天上の月を見た様なもので比べものがない若し比べものと云つたら天上のお月様であらう

▲介立八風吹不動 雪峰禪師は佛祖位中に於て獨立無伴ぢや、利衰毀譽稱讚

苦樂の八風が吹き來やうとも天邊の月を見た様なもので安住不動ぢや

▲恰モ竹ヲセザルニ似タリ その不動なることは、まだ風の吹かぬ已前を見た様であるだから動かさうとしても動きはせぬ、八風の爲には動かぬけれど、又五兩の輕さが如く轉々として動いて居る所もある、動いて動かぬ所に味があるが動にして不動、不動にして動といふべきである

第三十四則 風穴一塵の話

示衆

示衆云、赤手空拳千變萬化雖是將無作、有奈何、弄假像、眞且道、還有基本也無

●赤手空拳千變萬化 徐氏筆精の六に、赤とは空盡無物の義なりと申してある、併し頑空無物て何物もないといふのではない、赤体赤心赤眼、赤洒々として餘物のなきこと、即ち其身其儘といふ意味にて、赤手といふも手中無物のことを形容し

たのである。去り乍ら赤面赤恥真赤な嘘といふ時は此れと少し其意味を殊にして
 をる。今赤手空拳といふは手の裡に一物も握って居らぬといふこと、其實手の裡で
 はなく心の中に一ツとして固まり物が無いといふこと、心の中の固まりとは煩惱
 障所知障、佛見法見等であるが、宗師家分上となつて、爲人度生の三昧に住する人は、
 真に赤手空拳の無一物である。その無一物の所が無盡藏にて、千變萬化隨機應變種
 々無量の方便作略を用ふるので、宗師家第二義門の様子である。

● 雖是將無作有、奈何弄假像真。是れと上の句を受け、宗師家として第二義門
 頭に下り、無物の所に、有物の方便を要するのは、第一義空の眞實無物を顯はし知ら
 しめんが爲に外ならぬ。その方便作用は、有物の假物を翻弄して無物の眞實に像る
 より仕方がない。言家などで即事而眞といふも、此等のことを云ひ現はしたので、方
 便は何うしても假相の眞實は空相のものと定まつてある。その色即是空、空即
 是色の所に無限の妙味がある。

● 且道還有基本也無。さて是くの如き爲人度生の作用は無暗欠憾の出鱈
 目であらうか、但しは何ぞ基くところが有つての事であらうか、サア座下の諸人何

と思ふぞ、分らなければ左の本則に就て見たがよい

本 則

舉風穴垂語云、若立一塵、家國興盛、得之。不立一塵、家國喪亡、失之。
 雪竇拈拄杖云、不立一塵、還有同死同生底、衲僧麼、只是少無。

● 舉風穴垂語云、若立一塵、家國興盛。この風穴延沼といふは臨濟四世の孫に
 て南院慧禹禪師の法嗣である。今の垂語は五燈會元の十一卷にある、モト上堂の垂
 語と見える實は、若立一塵、家國興盛、野老頻蹙、不立一塵、家國喪亡、野老安恬也とある。
 今はそれを略したもの、さて一塵とは何の事であらう、家國とは何の事であらう、興
 盛するとはどんな事であらうか、文字に拘泥しては、驢年にだも會することは出来
 ぬ。語は十成を思ひ意は四互を貫むといふので、一塵か直に一心ぢやといへば、最早
 名相言句に落ちる、だが一微塵裏に入て大法輪を轉ずるといふ様なこともあるか
 ら、事に依ると一心其物が直に一塵であるかも知れぬ、一心といふも最早一種の名

相言句に落ちてをる故に一塵とはなに一心とは何物ぞと此處は默識心通して其宗旨を辨ずるより外に仕方がない口を開けば第二第三その口を開かぬ以前父母未生天地未開以前森羅萬像の主となるものが無くてはならぬその主人公が僅に立してその遊戯場なる家國を建立せんとすれば天地萬像十界三千の諸法が生々化々と興盛して重重無盡である之を是法住法位世間相常住とも常在靈鷲山とも申すのである

▲之ヲ得レバ本有リ 一塵の何物たることを會得して見れば立したから興盛になるの立しぬからならぬといふわけのものではない本から如來常住無有變易ともいふべきものである

●不立一塵家國喪亡 前句が建立門であるとすれば此句は掃蕩門である前句が俗諦の偏位なれば此句は眞諦の正位である正位は本來空界無物偏位色界有萬象形である眞諦正位の方面から見れば無佛無世界家國喪亡であるが俗諦偏位の方面から見れば有佛有世界崢嶸羅列であるすると興盛も喪亡も只一塵の見所に依て分らるゝと云はねばならぬ

▲之ヲ失スレバ本ト無シ 本から無なるものならば失ふた所で損はないその得失有無は一塵に依るのでその識得すべきは一塵の物體である

●雪竇拈拄杖云 雪竇和尚が丁度其坐在在ったのか又は後に批判したのか其處は不明であるが只その聞くべきは和尚の言句である

▲是レ立カ不立カ 立の様にあり不立の様にもある併しまだ一言を聞かぬ内は立とも不立とも云はれぬ

●還有同死同生底禪僧麼 風穴は拈じて一塵といひ雪竇は拈じて拄杖となした何れにもせよ興盛の時節には徹底興盛喪亡の時節には徹底喪亡になり切るのが同死同生といふものぢやその同生同死は一念心上の差排に過ぎぬこの同死同生は禪僧家尋常の茶飯にて其んなに養成張に威張なくてもよい前念は建立後念は不立前念は不立後念は建立と回互宛轉して行きさへすればそれで宜い其んな禪僧は天下到る所に稻麻竹葦の如くあつて少しも珍とするに足らぬ

▲無シトハ道ハズ只是レ少ナシ イヤ萬松の見る所に依れば何うせ何れかの一方に偏して中道を歩む禪僧はメツクにあるまいと思ふ

頌云

幡然渭水起垂綸、老不何以首陽清餓人、努力不在一塵分、變態枯
云柱杖高名勳業兩難泯、放下柱杖云資猶在

●幡然渭水起垂綸　この一句は家國興盛の建立門を頌せられた國家といふ
文字より、モト國家の事ではなけれど、それに因み天童が巧みに頌出せられたので
ある、幡然とは幡はシロシ、シラガと訓ずる文字にて白髮のこと、然は助字、渭水に垂
綸より起ツとは太公望が周の世を治められたといふ故事、此事は史記の中に載せ
てある、西伯といふは文王のこと、此人の思ふに何でも世を治めるには聖人を得な
ければならぬが、今聖人は野に隠れてをるから、求むるには野に遊ぶか宜いとて、渭
水の頭りに釣をしてをられた、スルと其の陽の方に於て呂尚といふ同じ釣漁の老
人に逢はれ、段々語ツて見ると勿々非凡の人である、ソコで西伯の文王は大に悦び
吾が先君の太公よりして、聖人が出て、周に適けば周家が興ると申されツ、あつ

たが、君こそ眞に吾が太公の望んで居られた人であらうと思ふてから、今日より君
を太公望と號するほどに、何うぞ是れから直ぐに此方と同道して呉れぬかと云は
れたれば、さらば尊意に任すて御座らうと、其儘釣漁を捨て、周家に召され周家の
顧問となつて周家百年の基礎を固められたのは家國興盛といふべきものである
まいか

▲老テ心を歇メズ　太公望の呂尚は白髮の老翁になつても、まだ世を捨て天
下の世話を歇める心もなきものと思はれる

●何似首陽清餓人　これも史記の故事、伯夷、叔齊は孤竹國君の二子にて、何れ
も聖人であるが、武王が紂王を伐た時、馬を叩いて諫めて申すに、父が死んでも之を
葬らずして、干戈を交ふるに及ぶといふは孝と謂はれ、申すか、臣の身を以て君を扶
するといふは仁と謂はれませうかと、時に左右の者が無禮な事をいふからとて、之
を伐たんとした、その時太公望が此れは義人であるから扶けて置けとて、去らしめ
た事がある、武王が殷の紂王を伐ち平けて周の世となつた時、夷齊の二人は天地に
之を耻ぢ、周の粟をば食はぬと謂て、首陽山といふに隠れ、薇の根を食して居た、時に

或る人が、それも周の薇ではないか、それだけは汚らしくはくないのかと聞かれたれば、夫れもさうぢや、其んならばモウ食べぬとて遂に餓死したと申す事である。此の一句は家國喪亡を頌じられたのである。何似とは何方を探るか二ツに一ツ、出向も聖人、夷齊も聖人、此に優劣はない、難兄難弟ぢや、その如く興亡は何れも聖人の所見である。世法から見ても、佛法から見ても、取捨の兩邊に涉ることができないやうなもの、サア何うしたものぢや。

▲少フシテ努力セス 呂尙の太公望は年老ても天下の爲に努力したのであるが、夷齊の二人は年若でありながら何故努力めないのであらうか。

●只在一座分變態 畢竟見來るに興亡とも一座の變態、ナリフリが變つたまでのこと、扶起放蕩共に一座の變相變身に過ぎぬ。

▲柱杖ヲ拈起シテ云ク看ヨ 諸人者一座とはソモ何の事ぢや、萬松が拈起する所の柱杖と、同乎別乎、活眼を開いて見るがよい。

●高名勳業兩難浪 天下を取るべき夷齊の兄弟が互に譲り合ひをして國位を捨て終に首陽山に餓死したのは家國の喪亡であるけれど、それは國家のこと、道の

上から見れば實に節義の名高い君子である。又一旦世を捨て、野に隠れた太公望が、時節の到來を待ち、周家の補佐役をして死に至るまで其勞を執られた勳業は實に家國の興盛といふべきものにて、兩方とも浪絶することの出來ぬものである。天下の事ですらその通り、祖宗門下に於ても、扶起放蕩、真俗正偏、建立不立共に、浪亡するわけに行かぬ、事理明暗の二ツが、兩手兩足の如く、回互宛轉しなければならぬ。

▲柱杖ヲ放下シテ云ク雪竇猶在リ 雪竇は同死同生と云はれたが、天童が高名勳業、兩ツナカラ、浪じ難しと頌じられたので、雪丁が再來せられたかと思ふ様である。イヤ活眼を開いて看よ、夫れそこに雪竇が踊り出てたぞ、諸人看たか何うぢや。

第三十五則 洛浦伏膺の話

示衆

示衆云、迅機捷辯折衝外道天魔、逸格超宗曲爲上根利智、忽遇箇一棒打不迴頭底、漢時如何。

●迅機捷辯折衝外道天魔 迅機とはピカ／＼と閃めく電の如く如何にもス早いこと捷辯とは堅板に水を流すが如き懸河の辯舌寄ても附けぬ舍利弗か富樓那の達辯である斯ういふ人が音吐朗々と辯じ出した時にはイツカな外道異宗の教師でも天魔波旬に使ふる道士にもせよ、モウそりや一言の下に折衝と屈服せしめて了ふことの出来るも、宗師家たる者の分上である折衝とは呂氏春秋の廷に衝ハ車ナリ敵ノ軍ニシテ己ヲ攻メント欲スル者ハ其衝車ヲ千里ノ外ニ折キ還シテ敢テ來ラサラシムル也折トハ前敵ヲ折挫ス衝トハ鋒銳ヲ衝突スル也ともあるさて又

●逸格超宗曲爲上根利智 五十二位とか三乘十二分教とかいへる佛菩薩の格量格調をも遙かに逸出し祖宗門下の風格をも疾くにヲツ超えて向上宗乘中に逍遙するの亦宗師家分上の常にて吾宗は黙に宜うして語に宜しからずと高くとマツて居ても或は上根利智の爲め曲げて止むなく無語中の有語を爲すこともあるが

●忽遇箇一棒打不迴頭底淡時如何 忽ち夫れ箇の一棒にて打ても叩いても

振向もせぬ様な剛の者が出て來た時には、どの様に接待したものであらうか、それは先づ洛浦と夾山との出會を見れば思ひ半に過ぐるであらう

本則

舉洛浦參夾山不禮拜當面而立相逢不下馬 山云鷄棲鳳巢非其同類出去一手推 浦云自遠趨風乞師一接探竿 山云目前無閑梨此間無老僧影草 浦便喝盡力 山云住住且莫草草忽忽忙者不忙 雲月是同溪山各異斜街暗巷 截斷天下人舌頭即不無頭只見雞 爭教無舌人解語不見聲 浦無語長蛇陣前 山便打不意夾山 浦從此伏膺藝歷

●舉洛浦參夾山不禮拜當面而立 何れにしても他に相見せんとするには町噀に禮拜するのが相見の威儀である然るに威儀をも具せず他に面前に佇立するといふは何ぞ一料簡があるらしい、その一料簡とは一知半解の爲に天狗にな

つて居るのであらう、又夾山がどの様な挨拶をするであらうかと其の脚下を探りに往つたものと見える、これは世法でも佛法でも随分有り勝のことである、我等も亦夾山の挨拶振りが聞きたいのである

▲相逢テ馬ヨリ下ラザルハ各自ニ前程有レバナリ
洛浦は臨濟門下の一隻箭ともいふべきもの、萬機休罷千聖不携といへる一疋の馬に騎て来たので、御自分では夾山も互格の人物と見込ての鼻息互格ならば敢て馬より下りてお辭儀をするには及ばぬ、サツサと乗り越して前程の知識を見かけて往けばよいとの胸算があるからの事ぢや

●山云 鷄棲鳳巢非其同類出去
流石は夾山勿々許さぬ、何だ尊禪も剃髮染衣して居るから他宗坊主の様にも見えぬが、その來つて禮拜もせずツツ立タ所から見ると恰ながら鷄が鳳凰鳥の巢に入り込た様なもので、其の棲み住まるべき類のものでない故、尊禪如き禪魔鬼の爲に魅せられたる者は暫時も置くことはならぬ、急に出て去れ、サツサと下山して丁へよ頭から無形の三十棒を参らられた併し是れも亦一種の接待手段である

▲一手ハ推シ一手ハ拽ク
口でこそは否、右の手にて推出す様にせらるれど、心では否、左の手にては拽き住め様との料簡らしい

●浦云 自遠趨風乞師一接
強に逢ては弱連もこの勢ひでは正面の攻撃は出来さうもない、これは裏切をするに如かずと思ふたものと見え、イヤマア俯らキツイ事を仰せられず、私も折角アナタの徳風を慕ひ来たので何等の所得もなくムザくと引近されるものでもありません、せぬほどに、何うぞマア一ツ御接待を願ひますと猫撫て聲になつた併し、油断はならぬ

▲探竿手ニ在リ
エロツ折れて来た様ではあるが、真底から折れたのではない、夾山の腹を探つて見やうと掛つた油断のならぬ曲者ぢや

●山云 目前無罅裂此間無老僧
何だ接待せよと、人人鼻孔遼天箇々壁立萬仞ぢや、何れの所に接待せらる、汝罅裂と接待する此の老僧とがあるか、これも亦洛浦の慢鬼を降伏する格外の妙手段である

▲影草身ニ随フ
探竿は賊の探し竿、影草は賊の隠れ蓑、何うせ賊同志の出合であるから、夾山はヒョイと身を隠して了まはれた

●浦便喝 有るの無いのと小入釜敷いと云はぬ許りに臨濟門下より會取し來つた禪機をば腹の張割るほど喝出して喝散せられた

▲筋ヲ盡シカヲ截ル イヤ何うも度エライ大きな聲ぢやあれでは腹の筋も臍の緒もちぎれて了まつたかも知れぬ

●山云住住且莫草草忽忽 何んだ餘んまり忙がしいぞ、モツと靜かにさつしやれ、其んな大きな聲をする人が氣狂ぢやといふかも知れぬ

▲會スル者ハ忙ガシカラズ忙ガシキモノハ會セズ
よく合點したものは周章ぬものぢや、周章るものに限ッて仕損じがある

●雲月是同溪山各異 同じ雲井の月でも山上で見ると、谷間で見るとは、少しその趣を異にするものぢや

▲斜街暗巷生客頭ベ迷フ 斜街とは東西南北縦横に曲り曲つた紛らはしい辻通りのこと、暗巷とは土地不案内の町若くは十文字になつてある通筋のこと、生客とはナマな客即ち暗客ともいふ、少しも土地馴れぬ人のこと、斯ういふ十字街頭には多く人の迷ひ易いものぢや、溪山各異なりと云はれては、洛浦も何方へ行ッて

よいやらと心の内が定まらぬであらう

●截斷天下人舌頭即不無 夫れてそれ、今の一喝も敢て不是ではないその一喝で以て天下人の舌頭を截斷して有無得失の論量に渡らせぬといふだけのこと
は出来もしやうけれど、夫れ以上の働きはできぬであらう

●只錐頭ノ利ヲ見ル 只錐の先の銳利なるを見れば、最初の一所見といふものは随分銳利なものではあるが、夫れ許りでは命根斷絶である

●爭教無舌人解語 喝と喝拂ッた一本鎗で佛魔同相を現じた時、その同相を共に突きまくり、迷悟凡聖の二見を一掃する劍刃上の端的は、夫れでもよいけれど、

夫れだけを是として居たのでは何うしてその無舌の人をして自由自在に解語せしむることができると思ふぞ、逆もてきはすまい、古來佛祖の言句は悉く無舌の解語ではないか、無舌の解語なればこそ、舌大千を覆うて語言三昧に入るも、その語言に過失がないのである、尊禪の様な見解を是とするものが、何うして為人度生がでさるか、何うして人天の大導師となつて、隨機說法ができるかと深く誠められた

▲鑿頭ノ方ヲ見ズ 錐の先ばかりを見て、四角な所を見なければツマらぬ

見所は縦横無盡に、四方八面にまで達しなけば駄目である

●浦無語 無舌人は解語し得られぬものと思つたものぢやに出て頓とツマツたものと見える、無住の本より一切の法を立することを解せぬ

▲長蛇陣前弓梢地ニ撲ケル 洛浦が初め禮拜もせず立つた長蛇の陣前に、今は早言句の箭も盡きて一箭をも投ずることのできぬまで大敗北を來し、モウ仕方がないから、その弓の柄までも土地べたへ撲げつけたのである、恰利といへばいふものゝ實はクソ焼けてある

●山便打 夾山スカサズ、ビシヤツと打たれた、臨濟の棒頭と是れ同乎是れ別乎と云はぬばかり、こゝらが實に打ッべき所ぢや

▲意ハザリキ夾山却テ臨濟トナラントハ 夾山は餘り棒行底の人ではないので、マサカ臨濟の如く棒を行じられ様とは思ひも忝らぬ、今日は臨濟に成り代つて洛浦に一棒を與へられたのであるワイ

●浦從此伏膺 此れまでは兎角臨濟下の一所見て無暗と鼻意氣ばかりが強く、我慢法慢の角が生いて居たのであるが、夾山の爲にヘン折られたものぢやか

ら、トウ、閉口した許りてなく、その教訓をば穿々服膺して、夾山和尚の法嗣とまでなられたのである

◎この夾山といふは船子徳誠禪師の法嗣にて善會と申す人、洛浦といふは元安禪師のことである、法脈の系統を正して見ると青原下に屬するので、石頭希遷|| 藥山惟儼 || 雲巖曇成 || 百岩 ||船子と斯う續くので、ツマリ南岳下の人|| 船子 ||が青原下になつたといふもの

頌云

搖頭擺尾赤梢鱗、身口掛香餌、徹底無依解、轉身、今日、截斷、舌頭、饒有術、君方掃雪、拽廻、鼻孔、妙通神、我已開、夜明、簾外、分風、月如、晝不借、三、枯木、巖前、分花、卉常、春色、消、一、無舌人、無舌人、應、正、令全提、一句、親、暗裏、抽、獨步、囊中、明了、了、不、任從、天下、樂、欣欣、自、於我、何爲

● 搖頭擺尾赤梢鱗

この洛浦元安禪師は前にも辯じた通り、臨濟門下の一雙箭であつたといふが、その臨濟を辞して南方に(江西湖南を以て)南西を分つのである。去られた時、臨濟がその分れに臨み、箇の赤梢の鯉魚あり、頭を搖かし尾を擺うて南方に向つて去れりしと云つて大層惜まれたといふ。今はその臨濟の語をソックリ摘用して一句に洛浦の人格を拈じ舉げられ、且ツは半ば稱揚せられたのである。

▲ 口香餌ヲ貧リ身網羅ニ掛ラン

赤梢の鱗ぢやと賞めらるゝけれど、その鱗魚が黙して居れば宜いが、若し口に香餌を食つたりなど、別に求むる所があつたらば、直に其身は網に掛ることがあるかも知れぬ。

▲ 徹底無依解轉身

それ程の傑物であるからして、今日夾山の所に來りても徹底無依にして、轉身自在を解し、流石の夾山をも一喝の下に喝破し去うとした、その禪機は實に鋭いものである。

▲ 今日網底ニ拽在ス

天童は轉身を解すると云はるゝけれど、この萬松から見ると、そうでない、その徹底無依といふのが、雲門の謂はゆる透脱無依の禪網に掛つて居るので、容易にその網底よりハチ出す事が出來そもない。

▲ 截斷舌頭饒有術

夾山面前に於て一喝に喝破せられた見所は、流石に臨濟門下の一本鎗だけであつて、天下禪僧の舌頭を截斷し、存とも無とも云はせぬほどの妙術があるにもせよ、上には上があつて、夾山面前に於ては、見事に御自分の舌頭を截斷せられて、開口する事ができなんだ。

▲ 君方ニ雲ヲ掃テ松子ヲ尋ヌ

此れは妙な著語であるが、本を尋ねると東坡居士が、杜輿才が松を種る法を學ぶに贈つた詩に、君方掃雪收松子、我已開樽得茯苓、爲問何如種楊柳、明年飛絮作浮華とある、その起承を割て此に挿入せられたので、東坡の詩集にある、今の底意は、天童の申さるゝ如く、よしや舌頭截斷の妙術があるにせよ、松山に雪を掃うて松の實を尋ねる様なもので、宗門向上の眼から見れば、尙未だ修行功勳の路程に過ぎぬ、本來空の穀潰して、餓に堪らぬから食を求めつゝある。

▲ 拽廻鼻孔妙通神

夾山は已に最初最後の二關を透脱して、無語中に有語を得られた、天下の活禪者であるから、洛浦が空界無物の鼻孔を拽廻とひきまはして、争てか無舌人をして、解語せしめんと、妙不思議によく神通無礙の所に通せしめら

れた

▲我已ニ榛ヲ開テ茯苓ヲ得 榛はシケルと訓じ樹木の生茂つて居ること、茯苓は一種の藥劑である、底意は松子を尋ねる積りのところ、思はず妙な藥種を發見せられたものと見える、夾山が洛浦を得られたのは望外の僥倖であつたワイな

●夜明簾外兮風月如畫 以下の二句は夾山といへる山に善會といへる人傑が居らるゝので、山即人、人即山と見做して夾山其人の境界を稱嘆せられたのである、珠玉で作つた簾の光りて、夜も尙ほ晝の如くに明るゝ、その又簾外の風月はといへば丸て晝の様に明るゝ、夾山の境界は夜かと思へば晝、晝かと思へば夜、夜半正明天曉不露ともいふべきか、正偏回互のありさま、回互は即ち中道實相である

▲三光ノ勢ヲ借ラズ 日月星の勢力を借りるに及ばず、大智慧光明で蓋天蓋地が日午の通りである

●枯木巖前兮花卉常春 この夾山はナカノの大山にて苦むした巖石の上に枯木も澤山に立枯れてをる、又一方には百草萬木の花が咲き芽が吹て、恰なから春の通り、卉は草の總名、枯木かと思へば花卉、花卉かと思へば枯木、それが常住不變

に春色と三冬とを顯はしてをるから面白い、これを眞如界とも實相界とも申してよろしい

▲潜カニ一色ノ功ヲ消ス 枯木巖前の三冬にて一點の暖氣もなしとすれば一色邊に墮する禪病なるも柳綠花紅の春色を呈してをるから、一色大功の空界にも住せぬ、故に轉身自在である

●無舌人無舌人 夾山が何うして無舌人をして解語せしむるか、と云はれた、その無舌人の一語がキツク天童のお氣に召したものと見え、連聲に連語せられた、無舌人、一、嗚呼、この無舌人、天童ばかりではない、我れ、一、も此一語を聞く毎に堪まらぬほど愉快な心地がする

▲鼻孔裏ニ應諾セヨ 天童は頻りに無舌人、一、と呼びかけらるゝ、様ぢやが、なんぼ連聲に叫ばれても口で應へることは出来ぬであらうから、返事をするならば、鼻の裏でするが宜からうよ

●正令全提一句親 正令とは如來正當の法令にて、娑婆大千界に布かれたのである、夾山はその正令を無舌人の一句に親しく全提せられた、流石は何うも船子

徳誠禪師の法子だけはある

▲暗裏ニ横骨ヲ抽ツ　これは晋の廓文が或日虎の口を開けて来るのを見るに、口中に横骨が生いて難義をしてをる、それを恐れもなく抜いて遺たといふ故事、今も洛浦の口中に一所見といふ横骨が生てをる、それを無遠慮に抜いてやられた、その大膽には驚くべきである、口中は暗いから暗裏ぢや、洛浦は我が目の見えぬ所にある横骨を引き抽かれた

●獨歩寰中明了了　寰中は五畿内なれど、今は天下といふほどの事、獨歩とは無伴の事、イヤ何うも夾山は當時の大善知識にて一天四海に肩を齊うするほどのものなき明々了々たる僧中の王である

▲眞光ハ耀カズ　天童は明了々と云はるれど、その眞光はナカ／＼耀かぬもので、その光りを認めるものは滅多にない

●任從天下樂欣欣　サモアラバアレとは任せ従ふと書いてあるから和語のマ、ヨといふこと、まあ天下の禪流、遠慮會釋なく欣々然として斯ういふ有難い説話を聞いて樂むがよい、法喜禪悦食こゝろのマ、ぢや

▲紘紘ハ彼レヨリス我ニ於テ何ヲカ爲サン　紘紘は物の入込んだこと、又は絲の亂れた様子、ガヤ／＼と天下人の樂み欣ぶことは心のまゝ、併し我れ萬松などは、嬉しくも可笑くも何ともない、その何ともなき所が無舌人の解語する所、佛見法見の垢抜けた所である

◎夾山善會ナ傳明大師トモ云フ、澧州洛浦山ノ元安禪師ハ久シク臨濟ニ參シテ侍者ト爲リ、濟作テ云ク臨濟門下ノ一隻箭誰カ敢テ鋒ニ當ラント、一日濟ヲ辭ス、濟問フ何クニ往ケヤ、曰ク南方ニ去ル、濟柱杖ヲモテ一割シテ云ク、這箇ヲ過ギ得テ便チ去レ、浦乃チ喝ス、濟便チ打ツ、浦作禮シテ去ル、遊歴シ罷テ夾山ノ頂上ニ至リ、庵チ卓シテ一年ヲ經、夾山之ヲ知り侍僧ヲ遣ハシ書ヲ馳セテ到ル、浦接得シ便チ坐却ノ再ビ手ヲ展ベテ索ム、爾時無シ、浦便チ打テ云ク、歸去テ和尚ニ學似セヨ、僧越テ之ヲ擧ス、山云ク這僧書ヲ看バ三日内ニ必ズ來ラン、書ヲ看マンバ救フ可カラズ、浦三日ノ後ニ來ル、禮拜セズシテ面ニ當ツテ立ツ……以下本則ノ如シ

第三十六則 馬師不安の話

示衆

示衆云、離心意識、參有這箇、在出凡聖路、學已太高、生紅爐、进出鐵

蒺藜舌劒唇槍難下口不犯鋒銳試請舉看

●離心意識參有這箇在 達磨門下の參學直指見性の法門はこの心意識の思量ト度知解觀想を離れなくてはならぬ何故かといふに永嘉大師も證道歌に法財ヲ損シ功德ヲ滅スルニトハ此ノ心意識ニ依ラストイフコトナシ是ヲ以テ禪門ハ心ヲ了却シ頓ニ無生ニ入ルハ知見ノ力ナリと申された又道元禪師は普勸坐禪儀に心意識ノ運轉ヲ止メ念想觀ノ測量ヲ停メテ作佛ヲ圖ルコト勿レとも申された之を教相家に聞けば心は第八の心王意は第七の末那識は第六の分別ぢやと申す而して第八は眞妄和合第七は染不染の因第六は善惡無記の因となるので此等を超越するのみならず第九清淨の無垢識までも超越して仕舞はなければ祖門下の參學にならぬそれですら尙ほ這箇の在るありこの這箇とは何物であらうか計較ト度を離れた許りて濟むものではない空盡無物と思ふても尙ほ其處に爐がある趙州に僧問ふ一物不將來の時如何州云く放下著僧云く一物不將來此の何をか放下せん州云く恁麼ならば擔取し去れ這箇とは趙州の謂ゆるその擔取し去れと指示せられたものらしい

●出據 青林の虔禪師曰く汝等諸人直に須く心意識を離れて參じ凡聖の路を出て學すべし方に保任すべし若し是の如くならずんば吾が子息に非ず云々迷悟凡聖有無得失を學ぶは祖門下の禁物なり

●出凡聖路學已太高生 同案察十玄談祖意の句に祖意如空不是空玄機平實有無功三賢尙未明此旨十聖那能達此宗とある三賢は尙ほ凡位十聖も功位に在るので道元禪師は迷途凡覺路聖夢中行とも三賢十聖其非境界とも超凡越聖坐脫立亡一任此力とも申されたので何うしても萬機休罷千聖不拂の田地に至ることを要するのが參學の眼目であるけれども更に回途復妙の境界に至らぬ内は孤危峻峻獨立無伴にて金鎖玄路の難處に墮在しなればならぬ太高は太だ氣高くて危いとのこと生は助字と見て宜しい

●出據 青原の行思禪師希遷をして書を馳せ南嶽の懷讓和尚に與へしむ遷彼に至て未だ書を呈せず便ち問ふ諸聖を慕はず己靈を重んぜざる時如何讓曰く子が問太高生何を向下に問はざる遷云く寧ろ永劫に沉淪す可くとも諸聖の解脫を慕はず讓便ち休す

●紅爐進出鐵蒺藜舌劍唇槍難下舌

紅爐とはモエ立た火爐のこと、蒺藜とは

ヒシ又はハマビシとも申して沼池などの中に生立つ草にて、其子は三角にして驚しい針があるので、手も足も刺されて滅多に寄附かれはせぬ、而もそれが鐵のヒシと來た日には尙ほ寄つても附けぬ、それも尙冷たいのならば兎もあれ、紅爐の中より進出とホーリ出したのであるから、尙更ら側へも寄り附かれぬほどのもの

とは暗に本則の日月佛月面佛——に響かしたのである、この燃立つ様な鐵蒺藜之が超凡越聖底の那一物、言詮不及意路不到の玄機であるから、設ひ舌は劍の如く、唇は槍の如くなる辯口でもとはドンな迅機捷辯でも及ばぬとのこと辯ずること、は出來ぬだから三世諸佛も口を壁上に掛けて無言を守られたのである

●不犯鋒銛試請舉看 玄機争てか有無の功に墮んで本統からいけば紅爐中より取出した赤かな鐵蒺藜の様なもので、手も足も口は尙更下し難いのであるが、その鐵蒺藜の鋒銛即ち尖つた針先に犯し觸れないで、ソロリと和らかに本來眞の面目を諸人に見せたいと思ふのぢやが、そは何んなものが適當であるか測り知られぬけれど、試しに舉げて御覽に入れやう

本則

舉馬大師不安 未必似院主問和尚近日尊意如何 常住事忙 大師

云日面佛日面佛 莫是轉筋

●舉馬大師不安 此は南岳懷讓和尚の一子馬祖道一禪師の事である、少し御不快の日があつたものと見える、天下の正師家になると事々物々上が轉大法輪となる

▲未ダ必ズシモ維摩ニ似カス 維摩と同脈の様ではあるが似て同じからぬ所がある、維摩の病は熱氣が太だしいけれど、馬大師のは熱氣もなく平日と左のみ異なる様である(維摩の事は四十八則にある)

●院主問和尚近日尊位如何 維摩の病は當にならぬけれど、馬師のは事實の事と思はれる、無論院主として御機嫌を伺ふは師資尋常の禮儀である、マサカ次の如き答へのあらうとは豫想しなかつたであらう

▲常住事忙フシテ問候ヲ少ギ得タリ 事務多忙のため大方御機嫌を伺ひ損つたのであらう

●大師云日面佛月面佛 大師は學人の氣付かぬ所にまで氣を付け、事に依り縁に觸れても爲人の事を忘れがない、日々是れ好日不安の沙汰はないぞ、老僧眞の面目は只是れくよく見やれと、これが即ち紅爐より迸出せられた鐵蒺藜で、手も足も付けて見やうがない、頭痛であるか、痲痺であるか、サツパリ伺ひが付かぬ、この伺ひの付かぬ所が大師眞の面目イヤ又人々箇々が本氣になつて全力を傾注すべき本來人の面目である

▲是レ轉筋霍亂ナルコト莫シヤ 和名類聚に轉筋はコムラカヘリとあるが、癩痢病の事ではあるまいか、霍亂は暑氣障りの事であらう、或は揮霍逸亂の事であるからランカンの様なものかも知れぬ、イヤ何うも變だぞ、院主が眞面目で御機嫌を伺ふたに、彼んな事を云はるゝのは、チとキ印の様にもある、あんまり句調が外れてをるからと裏面より卓上した

頌云

日面月面即睹 星流電卷 已過鏡對像 而無私難設珠在盤而自轉
拏足君不見 鈞鏈前百鍊之金 瓶盆鈎鈎 刀尺下一機之絹 衾被衣冠襟領

●日面月面 一句に公案の大綱を拈出し、天下の諸人それ見よ、馬大師の眞面目をと慕直に提起せられた

●佛名經の中、第二百二佛を月面佛といひ、第八百五十八佛を日面佛といへり、出據は斯くあるも今この二佛に用事あるにあらず

▲觀者スレバ即チ睹ス 日月の二面一時に出現せられた眼を開いて見んとしたならば目がつぶれて了ふぞ、併しこの日面月面の光明は肉眼で見えるものではない、心眼にもせよ見んとすれば見ることはできぬ

●星流電卷 前句が公案の體である、此句は其用である、體は素より見ることは出來ぬが、用としても閃電流星の如きものにて、見んとすればモハヤ没蹤跡

知らんとすればヤガテ断消息實にスパヤイものぢや

▲巳ニ新羅ヲ過グ 疾いことを箭新羅を過ぐといふ何うもそのスパヤイこ
とは見止もならぬほどである

●鏡對像而無私 その日月面を形容して見やうならば鏡は誠に正直なも
のにて胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずるといふ様に萬像森羅がソックリ其儘映
る如く、毫末ばかりも私照がない

▲一點モ邊ジ難シ イヤ何うも少しばかりでも味ますことはできぬ、盤鑑不
昧にして秋毫をも辯知する所の古鏡である

●珠在盤而自轉 而して又活機轉の様子を形容して見やうならば、珠の盤に
在て自由自在に轉ずるが如く、少しも罣礙はない

▲拏提スレトモ住マラズ どの様に捉へやうとしても捉へることが出来な
い、その心に罣礙なきが故に……

●君不見鉛銚前百鍊之金 彼れ鍛冶屋がチンカンくくとやつてをる鉛
銚の下ては千鍛百鍊の金銀て以て種々無量の品物が出来る、あれを諸人は見てを

るであらう、本は一箇鉛銚の下て未は千變萬化の應用が現はれる、馬大師も其の如
く應用無邊である、日月面も亦その一分である

▲瓶盆釵鈿券孟盤 金とあつても黄金に限つたことはない、總て金銀銅鐵と
見ればそれで宜い、一の鉛銚から水瓶も、茶盆皿鉢も、釵も指輪もワリ符の様な物か
ら、洗面盥の類、盆の類に至るまで望み次第千變萬化であるけれど、其本は一ツの金
鐵である、一心から萬法……

●刀尺下一機之絹 商人の用ふる鉄と物指との下から小袖もできる、履鼻襪
も手拭も皆一の手加減からできる、夫れ一ツの機から千差萬別の織物ができる、馬
師三寸の下から機に臨み變に應じて日月面即席に應用せらるゝ、流石は法に於
て自在を得られてある

▲衾被衣冠襟領袖 衾の夜具もできる、被の襖も、衣の着物も、冠りも、襟のヱリ
かけも、半纏も、褌絆も、股引も、自由自在なものぢや

第三十七則 瀧山業識の話

示衆

示衆云、驅耕夫之牛、拽廻鼻孔、奪飢人之食、把定咽喉、還有下得毒手者麼。

●驅耕夫之牛、拽廻鼻孔。先づ正師家分上となつて學人を接待する場合の手段を形容して見やうならば、耕夫の百姓即ち農夫が杖とも柱とも頼みをする所のは田地を作る爲に養ひ居る一疋の牛、それを驅取り引揚て二進も三進もならぬ様にして、了ふ學人が意識分別の牛を便りに、是非善惡有無得失と、彼處此處と引廻しつゝ、心田地を耕しをる、それを驅取てウンともスンとも云はせぬ様に、觀智と道理とを浪滅させて了はなければならぬ。

●奪飢人之食、把定咽喉。今一ツ形容して見やうならば、ヒダグイ人が命根とも頼みをする一盃の食物、それを奪ひ取て咽喉筋を把定と締切て了ふともいふべきもの、如何に道具を並べ立て、巧みに理窟を飾つて見た所で、毫も大事究明の爲にはならぬ、故に學人をして生死を透脱せしむるには、その胸中に蓋へ居る少量の憶想

分別をも奪ひ取て了はなければならぬ、爾うして參無參に至らしめ、究無究に至り、無究無參の所も更に訶して大死一番せしむるのが、宗師最初の誘引手段である。

●還有下得毒手者麼。尋常一様の垂示垂誨で以て佛祖の屋裡に到ることはならぬ、斯様な惡刺の毒手を下し得る活潑僧があらう乎、若し無くんば本則に就て其例を見るが宜い。

本則

舉瀉山問、仰山忽有人問、一切衆生但有業識茫茫、無本可據、子作麼生驗。馬是官馬。仰云、若有僧來、即召云某甲、不須來處僧廻首、門三魂去却乃云、是甚麼、更與一下待伊、擬議了七魂、脚底鑽向道、非唯業識茫茫、亦乃無本可據。活捉瀉云、善哉。苦口出

●舉瀉山問、仰山忽有人問、一切衆生但有業識茫茫、無本可據、子作麼生驗。この瀉山といふは、彼の有名な警策文を作せられた大圓禪師のこと、諱は靈祐と申す、百

丈懷海禪師の法嗣、仰山は瀉山の法嗣にて、惠寂と申す人、この二師が盛に祖風を宜揚せられたが爲め、遂に瀉仰宗といふ一派が出来たのである。瀉山が仰山の脚下を探ぐられた親言、親口は、澤山にあるが、今の本則も其一である。忽とはヒコツト問者があつて、私は無明住地の煩惱即ちその業識が茫々と草の生へ茂つて本の道を失ひ、西も東も分ちの付かぬ様になりまして、何方へ方針を向けて宜いやら、サツパリ始末が付きませぬといふ者が出来て来た時には、何の様に驗辨する積りであるかと、接物利生の端的直指の宗乘を括出し、さうして仰山を辨驗せられた。

▲馬ハ是レ官馬印ヲ須ヒズ 瀉山老師エロツ心配なざるけれど、この仰山は

最早公然官許を経た千里の名馬で、検査の上、馬印を爲すには及びますまい。

●仰云若存僧來即召云某甲 ところが仰山、左様ですヒコツと其んな質問を

して来ましたならば、直ぐ其僧の名を呼びますと、何れその呼聲は高くてビツククするほどの音聲であらうと思はれる。

▲腦後ノ一椎來處ヲ知ラズ そろりと和らかに問はれたのならば、驚きもす

まいけれど、不意に大聲で呼びかけられては、腦後からビシヤツと欺し打に打たれ

た様なもので、碌々返事が出来ないてあらう。

●僧廻首 不意に呼ばれ、彼れは大方ハイと返事をするて御座らう。

▲頂門上ニ三魂ヲ去却ス イヤ何うも餘り不意に呼ばれたものぢやから、ビツククして頭腦の中から三魂を引抜れて了つた。

●三魂七魄 丹鉛總錄廿二、人生四十九日而七魄全、其死四十九日而七魄散、大微

靈喜曰、人有三魂七魄、三魂一爽、靈二胎光、三幽精、常呼念其念、則魂安、人身也、七魄一尸狗、二伏兔、三雀陰、四吞賊、五非毒、六除穢、七臭肺、見文苑、榮雋廿一身、幹部又見十王

經。

朱子語類第三卷曰、魂屬木、魄屬金、所以說三魂七魄是金木之數也、性理大全第二十

八卷亦載此。

蓋海集人身類曰、或問三魂七魄之說、答曰、此洛書九宮之位、三居於東、七居於西、東爲木、主藏魂者肝也、西爲金、主藏魄者肺也。

要するに三魂七魄といふと、雖も肺肝の事なるのみ。

▲乃云是甚麼 サア呼べば應ずる底これ何物ぞ、佛性乎業識乎、サア道へ業識

乎佛性乎……説似一物即不中……之が即ち直指である

▲爐竈ノ熱ヲ趁テ更ニ一下ヲ與フ とは昔し一人の貧人があつて隣家の竈を借用せんとした、スツと隣人は親切に易い事ぢやと使ひなさい、併しその竈で今朝食物を煮たのであるから尙未だ暖かである故疾く用ふれば薪が得でありますぞと云つたれば、貧人は人を馬鹿にして居ると大に怒り、我慢にもそが熱氣の消するのを待ちて飯を蒸したといふ話がある、今は熱氣の冷めぬ内にといふ意味、仰山のやり方はハイと聲も未だ絶ぬ内に息をもつかせずに責め込まれた

▲待伊擬議 頓と行きつまり言はんとして言ふことの出来ぬ様子を擬議とは申したもので、ぢや、是れ何ぞと急に責め立つれば、屹度擬議するぢや

▲脚板底ニ七魄ヲ鑽了ス あまりツロクへ脚板と脚下で板は前の義板齒といふ時は向ふ齒の事になる、七魄も鑽り殺し踏み潰したてであらう

●向道非唯業識茫茫亦乃無本可據 その時は何れに向ひ茫茫たる業識は畢竟何處に本の據るべき所のものがあるぞ、只龜毛兎角名のみにて取留もなきものぢやないか、何うして夫れが邪魔になる、チツとも邪魔にはならぬ、有りの儘の有

潰れてはないか、盗人を捉へて見れば吾子なり……

▲生擒活捉 いきどらまへ、九て捕虜を見た様なものぢや、手放して置けば害になることもあるが、已に活捉して見れば煩惱即菩提である

●瀧云善哉 瀧山もエロウお氣に召したものと見え、イヤ夫れならば老僧も賛成ぢやと證明せられた

▲苦口親言ヲ出ス 流石は師資の間柄だけあつて親切なものぢや

頌云

一喚廻頭識我不有甚難見 依倚蘿月又成鉤 露影 千金之子纔流

落 骨 懈 風 雖 猶 存 漠 漠 窮 途 有 許 愁 小 器 不

●一喚廻頭識我不 仰山が瀧山の間に答へ、誰れ某と一たび喚べばハイと直

に頭を廻らすであらう、又廻らさぬ者はあるまい、そのハイと返事をする者は何であらう、そは申すまでもなく我れであるが、その我れとは何であらうか、打てば響き

呼べば願ずる底のものぢや、諸人これを識得したか何うぢや、參禪學道の要素は此の我を知るにあるのぢや

▲眞ノ白拈賊甚ノ見難キコカ有ラン 白拈賊とは晝盜といふこと、天童こそ

は眞の晝飛である、返事をする者ばかりが我てはない、行住坐臥運作動轉するものは皆我れにて之を知らぬ者は一人もない、知るや否と、餘程知り難く見難き者の様に勿體を付けらるゝけれど、決して其んなに六ヶ敷ものではない、それを故ら拈じ出して諸人に強ひらるゝのは、強て諸人の脚下を探らるゝので、尤切晝飛か、老賊野郎を見た様なものである、エヘン公言ではなけれど、萬松などはアンと其手は喰ひ積りて御座る

●依●係●羅●月●又●成●鈎 類書纂要十一に、依係は勞勞也、似有似無貌なりとある、故

にオボロくとしてハツキリ有無の分たぬ事である、羅月は満月のこと、成鈎は片破月のこと……とは何の事かといふに、仰山が某甲と召したのは満月なれども、僧の首を廻したのは最早鈎月となつたのである、鈎月は弓張月で、圓満の相が缺けたので、依係勞勞ともいふべきぢや、この依係勞勞は業識茫茫である、一時無二心と

もあつて、業識の茫々たる時も本來の圓月なれど、鈎月と成り下るときは依係勞勞である、一切衆生は如來の智慧徳相を具有して居るのではあるけれど、煩惱執着を以ての故に證得せぬぢや、羅月ハ羅月ナリ、煙羅ナリトモアリテ、朦朧タル半明半暗ノ意ニモ用フルナリ

▲身ヲ藏メ影ヲ露ハス 成るほど圓満の羅月が缺けて鈎月となつたのは、鳥

渡身を藏したのであるけれど、オボロに影を露はしてをる、彼の蚤が頭を藏して尻を隠さぬ様なもの、その業識も眞識の變影である、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身で、幻影と眞相とは全く別物でない

●千●金●之●子●纒●流●落 千金は大富長者のこと、法華の信解品に、長者窮子の譬喩

がある、今も其意を用ひられたのであらう、纒に流落、これは昔代の管絃暫時落魄す
とある、それと同じで如何にも零落てはをれど、元の元から乞食非人の子ではない、只纒かに流落してをるまでのこと、淺き夢見し酔もせず、根本的から迷つたのではない、衣内にはチャンと寶珠がある、流落の凡愚なれど、一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易である、纒かに回光返照すれば直に本來の面目が現前するのである、

ど悲しい事には千金の佛子忽然々起の無明に碍へられ惡趣輪回の身となつたのである

▲瞬風破ルト雖モ骨格猶ホ存ス 此句は趙州の語を借用せられたのである、如何に破れても本の骨が残つてを彼の瞬風を見た様なものぢや骨さへあれば又張て本の瞬風にする事も容易である、一念に由て迷ひ、一念に由て悟るのである

●漠漠窮途有許愁 漠々は廣大のこと、窮途は人跡不到のところ、如何にも大荒れに荒れ果てた險難惡道のこと、その難路にて苦しむのが許の愁である、本の據るべきもなく業識茫茫として悲歎の涙に咽びをるのが流落の衆生である、氣の毒千萬なものぢやとは、正覺禪師の大悲心である

▲小器ハ大量ナラズ 小器は兎角大量ならぬものぢや、我は凡夫である、諸佛賢聖の相好はなきものと濟し込んでをる、悲しむべきぢや、設ひ今は落魄の身なれど、やがて千金長者の相續人となるのであるぞとの大度量を養うては何うである
◎百丈上堂衆方ニ集マル、柱杖ヲ以テ一時ニ打テ下ス、復々大衆ト召ス、衆首ヲ廻ス、丈云ク是レ何ソ

ト、諸方日ケテ百丈下堂ノ句ト爲ス
這ノ僧若シ石火光中ニ暫地ナラバ、臨市裏ニ天子ヲ識取スト謂ツ可シ、忽チ若シ疑議不來ナルトキハ則チ依傍トシテ羅月又鉤ト成ルナリ、○黃檗上堂衆方ニ集マル、柱杖ヲ以テ一時ニ打テ下ス、復々大衆ト召ス、衆頭ヲ廻ラヌ、衆云ク、月轉リニ似タルトキハ少雨多風ト頓ノ意此ヲ用ヒシナリ

第三十八則 臨濟眞人の話

示衆

示衆云、以賊爲子認奴作郎、破木杓豈是先祖、觸髅驢鞍橋亦非阿爺、下頷裂土分茅時如何辨主

●以賊爲子認奴作郎 賊を認めて子と爲す、これは楞嚴經の第一卷に佛阿難に告げたまはく、此は是れ前座虛妄の相想、汝が眞性を惑はす、汝無始より今生に至るまで賊を認めて子と爲るに由りて、汝が元常を失ふ故に輪轉を受く、とある、賊とは自家の家賊を奪ふ所のもの即ち妄心を認めて眞心と誤まるからのこと、又奴を認めて郎と爲す、召使の下男を認めて主人と爲すは誤りの甚しきものぢやが今も

その通り第六意識を認めて本具の真識とするは、大臣を以て天子と誤る様なものぢや

●破木杓豈是先祖獨體獨體鞍橋亦非阿爺下領 爾ういふ鈍馬野郎は能く聞
くが宜い、破柄杓が先祖の獨體に似て居るからとて其の代りにはならぬ、兎馬の鞍
骨が如何に能く似て居るからとて爺親の下領とする譯には行くまい、然るに往々
この様な鈍漢野郎が多くある

●裂土分茅時如何辨主

裂土分茅とは妙な言句であるが、それは

○類書纂要の第十三卷に曰く分封土王者封五色土爲社建諸侯則各割其方色土與
之使立社、以黃土直以白茅、茅取其潔、黃取王者覆西方云々、とある、要するに一方の
主宰となり、一方の宗師となる時、奴郎も真妄も辨別せられぬ様な事では、埒が明か
ぬが、全林何うする積りである、實主君臣の差別を知らなければ、何うして爲人度生
が出来ると、その手際を知らうと思ふならば、先づ今日の公案に就て辨見するが宜
からう

本則

舉臨濟示衆云、有一無爲真人、安基定常向汝等、底背後初面門出入

心未證據者、看看、還具時有僧問、如何是無爲真人、還解廢濟下禪牀、

擒住、備更這僧擬議、鈍滯他濟托開云、無爲真人是甚乾屎橛、大似

不得

●舉臨濟示衆云、有一無位真人、無位といへば五十二位の階級に涉らぬ、眞實

人跡であるが、何れ超凡越聖の那人であらう、全林階級といふものは凡位から聖位
に昇進する所の修證功勳であるが、未だ迷悟に落ちぬ所の無修無證の那人がある、
之を本源自性天真佛とも本来の面目ともいふ

▲基ヲ安ンジ脚ヲ定メ了レル也

是れ臨濟和尚尊禪は無位ぢやと云はれる

けれど、一無位の真人が有るぞと云はるゝからには、早已に土臺の基礎を拵らへ脚
の留留が出来たから無位ではない様ぢや

●常向汝等面門出入

華嚴經疏鈔第六卷第三十二葉に面門とは即ち口なり

とある併し口からといふ許りではない、面前目前眼前といふ様な事である行住坐臥打てば響き呼べば應ずる底のもの耳に在ては聞といひ眼に在ては見といひ口に在ては言語となる出入はそれである

▲背後底響

豈夫れ而門のみならんや背後も通身も全身悉く眞實人軀ては

ないか響、それそこにも、こゝにも

●初心未證據者看看

出入するとあるから變であるが時々刻々出入してを

る出息入息が眞人の現成ではないか初心にして未だこの眞人を知らぬものは急に看取するが宜いぞと直指の爲人ぢや

▲還テ眼ヲ具スルヤ

看よくとの事であるがその一無爲の眞人を見る底

の眼を具する者があるかの何うぢや

●時有僧問如何是無位眞人

何うも斯う云はれて見れば黙つても居られな

い必ず問着せにやならぬ所である

▲還テ語ヲ解スルヤ

臨濟の云はれた所が分つて問ふたのであるか分らず

に問ふたのであるか

●濟下禪床擒住

問話底はソモ是れ何者ぞと云はぬ許りに禪床の椅子を下

つて其僧を擒取り、尊前はまだ氣が付かないのかと凄じい勢ひ

▲備更ニ諱

サア爾の諱は何ぞ道へく

●這僧擬議

何うも早その様に詰めかけられては有とも無とも口を開くこ

とはできぬだから進退谷り黙つて居たらしい

▲他ノ眞人ヲ鈍滯ス

其僧とて其儘の眞人なるに餘りの事をせらるゝので

アツタラ眞人がマゴ付て了ふた

●濟托開云無位眞人は甚乾屎橛

無位の眞人胎藏界では毘盧遮那といひ金

剛界では大日如來といふげな如何にも貴い様に聞ゆるけれど左のみ貴いこともないぞ、東司で不淨を拭ふ乾いた概も同様近前すれば鼻向もならぬぢや、托開とは

突き放すことである

▲大ニ鉢ヲ持シ得ザルニ似タリ

托鉢僧が大骨を折つても空鉢で歸る様な

もの臨濟いかに骨を折られても骨の折り甲斐がない様である